
風は君色

シェリンカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風は君色

【Nコード】

N4553Q

【作者名】

シェリンカ

【あらすじ】

もう一度会いたい人がいる。孤独な日々の中で唯一私の心の支えだった初恋の人。でも自分のせいで不幸にしてしまった彼に会いたいなんて、望む事さえ罪のような気がして……。新しい生活を始めた場所で知り合った優しい人。彼に弟を紹介された時、時が音を立って逆戻った！……全てを忘れてしまった初恋の彼がそこにはいた！……ただ私はもう、誰も傷付けたくなんかない……だからこの想いは胸に封じ込める！ 切ない初恋物語。

ブログで連載していた自作小説を転載しています。

第一章 1

まだ子供なんだから、どうせよくは分からないだろ　とその人は言った。

すぐに慣れるよ　とも――。

大きな声で母の事を　奈美さん　と呼ぶ男は、母のスカートの陰から出て来ようとしないうちに、チラリと目を向ける。

恐い思いを必死に我慢して私だって見返したのに、何も言葉をかけてはくれなかった。すぐにふいつと視線を逸らして、ただ母にだけ笑顔を向ける。

（お母さん……）

スカートをつかむ手に自然と力がこもった。

母は男の顔を見上げて楽しそうに笑いながら、何かを話している。私の方には目を向けてくれない。

（ねえ、お母さん……）

呼べばいつだって視線を合わせて、　なあに？　と笑ってくれていた母を、なぜか今だけは声に出して呼ぶ事が出来なかった。

幸せそうな横顔は、たった一人で朝から晩まで働いて、これまで私を育ててくれた疲れ切ったいつもの表情とは別人のようだ。

仏壇に飾られた父の写真を、夜中に泣きながら抱き締めていた母の面影は、今はどこにもない。

この世にたった二人きり、肩を寄せ合うようにして生きて来た母と自分が、今確かに分離されていく感覚を、私は苦しく感じていた。（お父さんを忘れて、その人を好きになったの……？）

何も分からないわけじゃない。何も知らないわけじゃない。まだ生まれて七年の月日の中でも、自分をこよなく愛してくれた父との別れがあり、それから一変した生活を経験した。

千紗はお父さんによく似ているね……

嬉しそうに、そしてどこか寂しそうに笑う母と二人で、これから

も父の思い出を大切に生きていくんだと思っていた。

——でも母は恋をした。目の前に立つこの父とは似ても似つかない大きな男に恋をしたんだ。

それぐらいは私にだって分かった。——子供にだってよく分かった。

小さな町工場でパートとして働く母が、工場に出入りするトラックの運転手である澤井と再婚を決意したのは、私が小学二年生の夏だった。

初めて引き合わされた瞬間に、澤井が必要としているのは母だけであり、私は邪魔者でしかないという事を直感的に感じ取った。

無口だけど優しい人なのよ……

以前は私だけに向けられていた愛情に溢れた眼差しが、その男に向けられるのを特別に嫌だと思ったわけではない。ただ寂しかった。

千沙の新しいお父さんよ

そう言って紹介されても、私を見ようもしないその男に笑いかける事は難しかったし、歩み寄る事もなかなか出来なかった。

でも、父が亡くなってから苦労しっぱなしだった母がようやく幸せになれるんだからと、気を取り直す。自分を奮立たせる。

お父さん……

意を決して呼んでみても、澤井がなに？と返事をしてくれた事は一度もなかった。一緒に暮らした三年半の間、ただの一度としてなかった。

母と澤井の新婚生活は、始めのうちは平穏無事だった。

私という異分子がいるにしろ、恋から始まった結婚だったのだから、見ているこっちが恥ずかしいくらい、二人は仲睦まじかった。

ただ、お酒を飲むといつもより大きくなる澤井の声と、何か気に入らない事があるとバンと机を叩く癖だけは、私はどうしても好きになれなかった。

小五の冬。学校から帰った私を出迎えた母の頬は真っ赤に腫れていた。

どうしたの……？

驚いて問いかけた私に、母は静かに微笑む。

大丈夫よ……大丈夫……

澤井がやったんだろ？という事は、すぐに分かった。その頃の澤井はトラブルが原因で仕事をクビになって、いつもイライラしていた。

母に当り散らして、手を上げた事も一度や二度ではない。

お母さん……また前みたいに二人で暮らそうよ……それじゃ駄目なの？

問いかけた私に母は困ったような笑顔を向ける。何か答えてくれようと、ゆっくりと口を開きかけ——けれど私はその言葉を聞く事が出来なかった。

お前が悪いんだろうが！

凄まじい怒鳴り声と共に体が横に吹き飛んで、私は自分がその時ちょうど家に帰って来た澤井に殴られた事を知った。

左の頬がジンジンと痛い。壁に叩きつけられた右肩も痛い。でもそれよりも、怒りに我を失った澤井に締め上げるようにして持ち上げられた喉が苦しくてたまらない。

いつまでたったって、まるで他人を見るように俺を見る！バカにしてんのか！仕事がなくなつて……そんなにバカみたいかよ！（そんな事思つてない！）

心の叫びはもちろん口に出す事が出来ない。頭の中が真っ白になるくらい首を締め上げられているんだから、口を開く事なんて出来るはずがない。

私は心の中だけで、決して澤井には届きそうにもない言葉を繰り返す。

返していた。

（仲良くなるうつて思った！……でもぜんぜん私の話を聞いてくれなくて！……私の方を見てもくれなくて……！）

私に興味がなかったのは澤井の方だ。いくら歩みろうとしても頑なに私に背を向け続けたのは、澤井だ。なのに――。

お前がいなきや！お前さえいなかったら！

澤井は狂ったように叫びながら私を床に叩きつけ、馬乗りになつて殴りつける。

もうどこがどうとも言えない痛みで気が遠くなる中、母の叫びが聞こえた。

やめて！やめて！……千紗！

必死に澤井を止めようとして、そうは出来なくて、逆に殴られているような音が聞こえる。

お母さんを叩くな！

本当はいつだって心の中で我慢していた叫びを、苦しい息の中から叫んだ私に、また澤井の手が伸びてきた。

腕をつかまれて壁に叩きつけられ、意識が遠くなる。

千紗！千紗！

薄れていく意識の中、母の泣き声と澤井の怒鳴り声が小さくなつていく。

（お母さんを叩かないで！）

何度も心の中で繰り返しながら、私は意識を手放した。

目が覚めたら病院のベッドの上だった。

右肩の脱臼と左足を骨折。あれだけ殴られたのに顔の骨は折れておらず、一時的に瞼が腫れて視界が狭くなっただぐらいで済んだのは、奇跡だとお医者さんは言ってくれた。

傍らに立つ母も、全身いたるところに包帯を巻いていた。守ってあげられなくてごめんね……

自分も傷だらけの母を泣かしてしまうのは忍びないので、私は必死に口を開く。

悪いのはお母さんじゃない！絶対にお母さんじゃない！

それでもやっぱり母は両手で顔を覆った。

ゴメン千紗……ずっと迷ってたけど、私あの人と別れるから……

！やっぱり別れるから！

自分のためではなく母のために、私はホッと安堵した。

うん……

呟いた私に、母は両手で顔を覆ったまま　ごめんね　と言い続けた。何度も何度も言い続けた。

松葉杖について久し振りに登校した小学校では、みんながなんとなく私を遠巻きにした。以前は仲のよかった友達も、声をかけても困ったように離れて行ってしまう。

前のように、放課後遊ぶ約束をしようとしても、

ごめん今日はちょっと用事があるんだ……

と断られっぱなしだった。

誰も見に来てくれない授業参観の日。後ろで交わされていたお母さんたちの会話から、みんなの態度の原因がようやく分かった。

それで警察沙汰になったんですって……

まあ、恐い。関わらないようにってうちの子にもよく言っておかなくっちゃ

ガックリと肩が落ちる。

（仕方ない……もう……一人でもいいや……）

普段はそんなふうに見切りをつける事が出来ても、課外活動でグループを決めなくちゃいけない時とか、遠足の時なんか寂しかった。

私と組んでくれようとか、一緒にお弁当食べようという奇特な相手を探して声をかけ続けるのには、相当の精神力が必要で、残念な

がらそんな忍耐力を持ち合わせていない私は、そうそうに投げ出す事を選んだ。

（いいやもう……遠足なんか行かなくて……！）

放課後、一人で教室に残ったまま机に突っ伏していたら、ふいに声をかけられた。

「あれ？長岡？まだ帰らないのか？」

まるで怪我をする前のようにかけられた何気ない普通の声が、あまりに久し振りで、あまりに嬉しくて、思わず勢い込んで顔を上げた。

教室の入り口に男の子が立っていた。——同じクラスの小田紅也君だった。

いつも何をするにもみんなの中心にいる人気者。勉強もスポーツも得意で、誰からも好かれる彼が、サッカーボールを片手に立っていた。

「もう下校の時間だぞ……学校閉まるよ？」

気がつけば外はもう薄暗くなりかけていて、私は焦って立ち上がった。ガタンと大きな音をさせて、机にたてかけていた松葉杖が床に落ちる。

拾おうと私が身を屈めるより先に、彼が走りこんで来てそれを拾ってくれた。

「ありがとう……」

お礼を言つと満面の笑みを向けられるから、少し焦る。最近は誰も私にこんな顔を向けてくれないからだろうか。よく分からない。

「あつ！ひよつとして家の人が迎えに来るの待ってるとか？」

ひらめいたとばかりに、またもう一度ニコツと笑った彼に、私は静かに首を横に振った。

母はまだ仕事中だ。澤井の事は 家の人 だなんて認めたくない。複雑な思いでただ首を振るばかりの私に、ちよつと首を傾げると、

小田君は

「そうか……」

と呟きながら教室の扉に向かって歩き始める。

久しぶりの普通の会話が終わってしまうのを、私が内心寂しく思っている事になんかまるで気がつかずに、彼はそのまま教室を出て行った。

（私も帰ろう……）

ため息混じりに立ち上がりかけた時、パタパタパタという軽やかな足音を響かせて、また彼が教室の中に駆け込んで来た。

「俺も帰るってみんなに言っただけから……一緒に帰ろう！荷物持つよ！」

言うのが早いか、私のランドセルと補助バッグを次々と手に取る。

呆気を取られてお礼も言えないまま、私は彼の後について歩き出した。

「長岡の家って、楓町？こっちでいいの？」

松葉杖で歩く私に歩調をあわせるようにして、ゆっくりと先を歩きながら小田君が振り返る。

コクコクと何度も頷く私に、やっぱり彼はニツコリと笑ってくれる。

「そっかあ。うちと結構近いんだな……知らなかった」

私だって知らなかった。クラスでもあまり目立たない私と、いつもみんなの中心にいるような小田君に接点なんて、これまで全くなかったのだから。

いつも楽しそうに笑っている姿を遠くから見ていたような人が、誰にも声をかけてもらえなくなった私に、こんなふうに普通に声をかけてくれるなんて思いもしなかった。

あんまり考えているとんだか涙が浮かんで来そうで、俯き加減に歩いていたら私の耳に、思いがけない言葉が聞こえて来る。

「ここがうちなんだけど……よかったらちょっと寄って行って。ずっと杖を突いて歩くのも大変そうだし、送って行ってもらえないか

聞いて来る！」

私の返事も待たずに駆け出して行く背中に大慌てする。

「お、小田君！？」

（そんな迷惑かけられないよ！）

叫びかけて目を向けた目の前の門は、普通の民家のそれではなかった。

「希望の家」と古い木製の板に墨字で書かれた表札の名前には、私にも聞き覚えがあった。

——事情があつて両親と一緒に暮らせない子や、身寄りのない子が共同生活を送る福祉施設。

町に一つしかない教会の片隅に建てられたその施設は、私が生まれる遥かに前からこの町に存在しているのだと言う。

（えっ？……小田君って……）

ドキンと心臓が飛び跳ねた時、他ならぬ彼が建物の陰から走り出して来た。

「いいってさ！園長先生が車で送ってあげるから、長岡！」

彼の後に続いて姿を現した初老の男性に、私は慌てて頭を下げた。見上げるほどに背が高く、口元にも顎にも豊かな髭を蓄えたその男性は、どこか日本人離れた雰囲気を持っていた。

私を見下ろす優しい瞳がグレーだった事と、少しみんなと違った言葉のイントネーションが、どうやらその人が本当に外国の人らしいという事を、私に教えてくれる。

「こんにちは。コウが連れて来たお嬢さん。……彼のガールフレンドなのかな？」

「……！？」

真っ赤になつてしまった次の瞬間、私は、外国ではガールフレンドは文字どおり 女友達 の意味なのじゃないかと思つた。

慌てて「はい」と頷くと、今度は小田君が見る見る真っ赤になつた。

（えっ？違うの？なに？私……間違つた？）

再び彼に負けないくらいに赤くなる私と、なんだか恨みがましくその男性を見上げている小田君を代わる代わる見ながら、園長先生はハッハッハと大きな声で笑った。

「ちよつと待つてね。車、まわしてくるから……」

足早に立ち去ろうとするその長い足めがけて、建物の陰から小さな子供たちが飛び出して来る。

「えんちようせいせい、どこいくの？」

「あつコウにいちゃんだ！にいちゃんおかえりー」

「おつかえりー」

園長先生同様、子供たちに飛びつかれている小田君はとても嬉しそうだった。みんなをいっぺんに抱き締めて、ひとりひとりに声をかけてあげている。

「翔太、お利口にしてたか？奏美、花壇のお掃除終わったか？」

その顔は間違いなく お兄ちゃん だったけれど、七、八人もいる同じぐらいの年齢の子供たちが、みんな本当に小田君の弟妹だとは思えない。

きつとこの施設で一緒に暮らしている子供たちなのだろう。

そう。いつも元気で明るい小田君が、この 希望の家 から学校に通っている子だったなんて、私は今まで全く知らなかった。

「おねえちゃんだあれ？」

小さな女の子が、大きな丸い目を真っ直ぐに私に向けてくるからドキリとする。

「コウにいちゃんのおともだち？」

小田君と園長先生に群がっていた小さな子たちの注目をいっぺんに浴びて、なんだかドキドキした。

「そう。おんなじクラスの長岡だよ」

ニッコリしながら答えてくれた小田君の言葉を、子供たちは無邪気に笑う。

「ながおか？へんなおなまえ……」

「ばっかだな、りん。なまえじゃないよ、みょうじだろ？おれ！お

れは、おだしようた」

「わたしは、おだあやめ」

「ぼくは、おだかずま」

口々に自己紹介を始めてくれた子供たちは、みんな 小田 姓だった。

（だから小田君も 小田 なんだ……きつとここに住んでるから

小田 君……）

「おねえちゃんは、ながおか……なにちゃん？」

尋ねられるままに口を開こうとした時、思いがけない方向から先に返事が返って来た。

「千紗だよ。ちさちゃん……」

小田君が私の名前を知ってるなんて思いもしなかった。今までほとんど話をした事もないのに。

驚いたように目を向けると、ふいつと視線を外される。

ほんのり赤い頬に、なんだか胸がざわついた。

「ち……さちゃん……ち、さ」

どうやら私の名前は、小さな子には上手く発音するのが難しいようだ。

小田君がニツコリ笑って、その女の子の頭を撫でる。

「ちいちゃんていいよ……な？いいだろ？」

向けられた屈託のない笑顔に、その言葉に、胸が詰まった。

瞬間——私の大切なちい と私の事を呼んでくれていた父の事が、どうしようもなく思い出された。

優しくって強くって、いつだって笑顔だった父。あんなに元気で健康だった人が、あまりにも呆気なく亡くなって、それから私の世界は一変した。

（お父さん……！）

これまでなるべく思い出さないようにしてきた。思い出せばどうしたって悲しくなるから。あの頃に帰りたいと思ってしまっから。

でももちろん戻る事なんか出来るはずなくて。私のこれからの未

来は、母と澤井と共に暮らしくしくなくなつて。

懸命にこらえて我慢していた心が、小田君の笑顔で、私を　ちいと呼ぶ声で、全部崩れ去つてしまった。

——そう。遠くに見ている頃からずっと思つてた。小田君の笑つた顔はお父さんに少し似てたんだ。

ポロポロと涙を零して泣き始めた私に、子供たちが驚いて声をあげる。

「ちいちゃん、どうした？」

「どうしたの、あんよがいたいなの？」

優しいばかりのあどけない声が胸に痛くて、痛くて。涙を止めなきやと思つのに、どうしても止まらない。

「長岡！」

駆け寄つて来た小田君は、まるで彼の周りにいる小さな子たちを抱き締めるように、なんの迷いもなく私を抱き締めた。

「我慢しなくつてもいいんだ。辛かったら、悲しかったら泣いていいんだ」

耳元で囁かれた小さな声に、もうどうしようもなく涙が流れた。

私は自分よりほんのちよつと背が高い小田君にすぎるようにして、その場に泣き崩れた。

「コウがずい分君の事を気にして……よかつたら一度ここに連れて来てもらつてお願いしたのは、実はワタシなん德斯」

やつぱり日本人とはどことなく異なる話し方で、園長先生は車のハンドルを握りながら、後部座席に座る私にバックミラー越しに話しかけて来る。

「希望の家　にいる子は、コウみたいに両親がいない子ばかりじゃなくつて……親から暴力を受けて一時避難している子も多い德斯だから……」

（そうか。それで気にかけてくれたんだ……）

「ありがとうございます……」

小田君にも園長先生にも、思わず頭が下がる。

とその途端、助手席に座っていた小田君がガバツとこっちを振り向いた。

「お節介だつて事は分かつてる！そんな事……他人にとやかく言われたくないって思う奴だつているって、俺だつてちゃんと知ってるんだ！……だけど長岡は……なんか放つておけなくって……！」

そこまで言つてから、また真ッ赤になつて前に向き直つてしまうので、私まで赤くなる。

小田君の言葉は、態度は、どうしてこんなに私を一喜一憂させるのだろう。

「困つた事があつたら、いつでも 希望の家 に……私の所にいらつしゃい……あつ、もちろん、なんにもなくつても来ていいんデスよ！みんなすつかり、ちいお姉ちゃんが好きになつちやつたみたいデスから……」

泣き出した私のところに集まつてくれて、小さな手で代わる代わる頭を撫でてくれた子供たちの事を思い出すと、また涙が浮かんで来そうだった。

「自分が辛い思いをした事がある子は、他の人に対して優しいデス……あなたやコウもそう……」

穏やかな園長先生の言葉は、カラカラに乾いていた私の心に、水のように染み渡った。

第一章 2

それから私は、放課後は小田君と一緒に帰るようになって、毎日「希望の家」にも遊びに行くようになった。

施設で暮らしているのは十五人の子供たちで、五年生の小田君が一番最年長だった。

「小学校を卒業するまでに、みんな行き先を見つけてここを出て行くんだ。だから俺が一番古株。なんてったってここは園長先生が一人でやってる園だからさ……万年人手不足で、これ以上は手が回らない……」

小田君はあっけらかんと笑いながら、私にそう教えてくれた。

ここではみんな自分の事は自分でやるし、小さな子だってそれに係りを受け持っている。難しい事はお互いに助け合って、励ましあってなんとかしている。

小さな頃から母の帰りを一人で待って、食事の準備も自分でしていた私は、自然と小さな女の子たちに料理を教える事が日課になった。

「それで、これを煮ている間に、こつちを切っちゃうでしょう……」

「そっか！ちいちゃんねえちゃんすごい！これでいつもよりはんぶんのじかんできる！」

「うん。料理は手際が大切だからね……あとは、これも炒めちゃおう」

「すごい！えんちようせんせいのより、こうにいちちゃんより、ずっとおいしそう！」

素直な賛辞が嬉しかった。向けられる笑顔が嬉しかった。

学校ではもう誰も私に声をかけてはくれなくて、まるで存在しない人間のように扱われていたから、放課後「希望の家」に行く事だけが、いつの間にか私の心の支えになっていた。

「ちいねえちゃん、もうここにすんじゃえよ！そしたらあさごはん

ももつとおいしくなるからさ！」

いつも元気な翔太君の頭を、小田君が軽く小突いた。

「馬鹿言うな……長岡にはちゃんと帰る家があるんだから……」

チクリと胸が痛んだ。純粋な目を私に向けてくれるこの子たちにも、それから小田君にも、家と呼べる場所はここしかないんだ。私みたいに中途半端にここに出入りしている人間を、みんな嫌だとは思わないだろうか――。

「あつ！ちいねえちゃんがかなしそうなおかおしてる！」

「こうにいちゃんが、いじわるいうからだぞ！」

私が考え込んでしまったおかげで、小田君がすっかり悪者にされてしまっている。私は慌てて手を振った。

「ちがう、ちがう！小田君のせいじゃないよ！」

「おだくん……？ぼくも おだくん だよ？」

「ぼくも！」

「ぼくも！」

あちこちで連呼され始める声に、もつと慌てた。

「そうじゃなくって……ええつと……紅君だよ……！」

口に出して言うてしまうのには、かなりの決意と勇気が必要だった。彼を名前で呼ばなくちゃと思っただけで、もうどうしようもなく心臓が跳ねた。

ドキドキしながら視線をさまよわせた先で、その 紅君 と目があつてしまったので、なおさら焦る。

紅君はちよつと驚いたように目を見開いて、それからすぐに笑顔になった。私の大好きな――あのお父さんとよく似た笑顔になった。

「じゃあ俺も…… ちい って呼ばうつと！」

まるですつごくいい事を思いついたとでも言わんばかりに、大きな声で宣言されて、顔が赤くなつていくのが自分でもよく分かった。ドキドキと体全体が心臓になったかのように、鼓動が私の中心で、大きく大きく鳴り響いていた。

澤井が私を殴ったあの事件で、母は あの人とはもう別れる！
と言ってくれたけれど、実際にはそう簡単に事は進んではいなかった。

警察に捕まった翌日、澤井は他ならぬ母の迎えで釈放された。

もう二度とあんな事はしない と泣いて謝って、結局今までのように私たちと一緒に暮らしている。

私は家にいるのが嫌で、「希望の家」に通い詰めていたと言っても過言ではない。

母が工場で働いている間、狭いアパートの一室で澤井が寝転んでテレビを見ている光景には、心底吐き気がした。

ここから出て行つてよ！ と叫びたい気持ちを必死にこらえ、その男の分まで食事の用意をしなければならぬ事が、嫌でたまらなかった。

自然と「希望の家」にいる時間が、日一日と長くなってゆく。

それでも澤井は私に何も言わなかった。母のいないアパートでも学校の教室と同様、私はまるでいない人間のように扱われていた。

「いったいどういう事なのよ！」

昼休みの女子トイレで、五、六人の女の子たちにグルツと取り囲まれたのは、「希望の家」に通うようになって二週間ほど経った頃だった。

——つまりは私が紅君と一緒に下校するようになってから二週間。

「なんであんなに毎日、紅也君と一緒に帰るわけ？」

「そうよ！なんなのよ！」

やっかまれるのは当然のように思えた。

紅君は本当にみんなに好かれている。いつも元気で、明るくって優しくって、なんでも出来て——。そんな、女の子にとっては夢のような男の子だった。

まだ事件が起こる前。友達だった子たちとの噂話の中にも、一組の美奈ちゃんやんは紅也君の事が好きなんだって ええっ？ 晴香ちゃんもだよ？ と何度も何度もその名前が出て来た。

だから、 なんてあの子なんかと！ とみんなが私に嫌悪感を抱くのは、我ながらごく当たり前の事のように思う。

「ごめんなさい……」

申し開きをするわけでもなく、ただ淡々と頭を下げた私に、女の子たちはすっかり鼻白んだ。

「謝られたって……ねえ？」

「そうよ！ 特別な理由がないんだったら、もう紅也君に近付かないでよ！」

「そうよ、そうよ！」

彼に近付くとか近付かないとか、彼女たちに指図されるような事ではないし、私が決める事でもないと思うのだが、私は素直に頷いた。

だってもし反論した場合、私がどうなるのかは改めて考えるまでもなかった。集団になった時の女の子の強さ、恐さなら、私だってよく知っている。

「はい……もう近付きません……」

口に出して言ってしまうってから後悔したってもう遅かった。

（それでもう「希望の家」にも行けなくなるのかな……？）

そんなはずはない。彼女たちはそんな事まで知っているわけではないし、その事について文句を言っただけでもない。だから今までどおり、学校帰りにちよつと寄る事には、なんの差し支えもないだろう。

ただ――。

今までのように紅君と一緒に行く事は出来なくなるわけだ。並んで歩きながらいろんな話が出来なくなるわけだ。

そう思った途端、胸がズキリと痛んで、自分が今までどんなにその僅かな時間を楽しみにしていたのかを、私は初めて知った。

（でももう遅いよ……約束しちゃったもん……）

たとえそれがどんなに理不尽な取り決めだったとしても、一度した約束はやっぱり撤回は出来ない。

（バカだな……私ってバカだ……！）

泣きたいくらいの気持ちでそう思った。

放課後。いつものように「帰ろう」と誘って来た紅君に、私は首を横に振った。

「ごめんなさい……もう一緒には帰らない……」

どうしようもなくズキズキする胸を必死に我慢しながら、ペコリと頭を下げた。

「ごめんなさい」

「うん。分かった」

短く言って私に背を向けた紅君がどんな顔をしていたのか、見る事は出来なかった。顔を上げると、目に涙がいっぱい浮かんでいる事が彼にも分かってしまうから、私は紅君が教室を出て行ってしまうまで、決して頭を上げはしなかった。

「希望の家」へと向かう道を、松葉杖を突きながら一人で歩いた。川沿いの土手の道。川を挟んだ向こうに、母が働く工場の煙突が天を衝くようにして何本もそそり立っている。

ほんの二週間前までは一人きりで歩いていた道なのに、今はむしろように寂しかった。

ちよつと前を歩く紅君の背中がそこにないだけで、どうしようもなく寂しい。

浮かんだ涙を手の甲でグイッと拭いた時、思いがけない方から思いがけない声がした。

「ちい」

土手の下の方。確かに私を呼ぶ紅君の声がしたのに、どこにいるのか分らない。

「こっちだよ。こっち」

笑い含みの声に促されるまま、あちらこちらと視線をさまよわせて、ようやく背の高い草の中にその姿を発見した。

「どうしたの？」

精一杯普通を装って返事したつもりなのに、どうしようもなく声が震える。

そんな事になどまるで気がつかずに、紅君はいつも通りに笑う。

「もういいだろ？もう学校から帰ってるんじゃない？……家に向かっ
つてるところだよな？」

言葉の意味がよく分からなくて首を捻る私に向かって、紅君は土手を上って来る。

「いいよ……これは俺の勝手な屁理屈だから……薄情者のちいへの仕返しだから！」

草むらの中から赤い自転車を引っ張り出して、押しながらやって来る。

土手の上まで辿り着くと、私が背負っていたランドセルも手にしていた荷物もあつという間に取り上げてしまった。

「紅君……私ね……」

もう紅君に近付かないなんて、おかしいな約束をみんなとしたのだ。それがどんなに自分にとって辛い事なのかも知らないで、簡単にしてしまっただ。

なんと説明したらいいのかも分からず困り切っている私に、やっぱり彼はニツコリ笑った。そして――。

「いいから……乗って！」

自分が乗った自転車の後ろをポンポンと叩いた。

「えっ？」

戸惑う私の手を引き、松葉杖をさっさとハンドルにかけてしまう。「園長先生から借りて来たんだ……ちいをビツクリさせようと思っ

て！そしたら一緒に帰らないなんて言い出すから……なんでバレたんだろうつて焦った！」

いつも楽しい事や面白い事を自分で見つけ出して、きらきらと輝いている紅君の目が、鮮やかに輝き出す。

きっと私が楽出来るようにと考えて、喜ばそうと思って、こっそり準備してくれたんだろうつに、そんな事も知らずに私はずいぶん自分勝手な事をした。

「……ごめんなさい」

また頭を下げると、今度はその頭をポンと叩かれる。

「うん。いいから。もういいから乗って！」

朗らかな声に促されるままに、自転車の後ろに座った。

「行くよ？しっかりつかまっててよ？……しゅっぱーっ！」

グンと紅君がペダルを踏み出した途端、頬を風が撫でた。伸ばしっぱなしの私の長い髪が、風にさらわれて後ろに流れて行く。

「落っこちないでよ、ちい」

すぐ目の前で半分だけ振り向いてくれた笑顔が眩しくって、背中につかまっている指に思わず力がこもる。

「うん」

ちよつとバランスを崩したら、紅君の背中にほつぺたがくつついてしまいそうなほどに私たちの距離は近かった。近すぎた。こんなに近かったら、ドキドキと脈打っている私の心臓の音だつてきつと聞こえてしまう。

「見て、ちい！飛行機雲！」

春が目の前の青空を横切るようにして、小さな飛行機が飛んで行く。一直線に伸びる白い雲さえ、紅君に教えてもらったら私にとっては特別になる。二人で見上げたらもっともつと特別だった。

第一章 3

春が来てようやく足のギブスも取れる頃、私は六年生に進級した。紅君とは違うクラスになった。でも、それでかえってホッとした。

周りにいろいろ言われなかったために、あれから学校ではなるべく話をしないようにして、それでもどうしたって、気がつけば私はやっぱり、彼の姿を探しているから。

どんなに遠くにいたって、うん、遠くにいればいるほど、紅君にばかり目が行ってしまうから。

そんな自分を叱ったり諫めたり、格闘するのにすっかり疲れてしまった。

だからもういい。放課後、二人でこっそりあの赤い自転車に乗って、土手の道を「希望の家」に向かう時間が私にはあるから、その他はもういい。

学校での紅君は、みんなの人気者の 紅也君 のままでいてくれたらいい。

——そんなふうに思ってた。

「ちい、ほら見て！」

自転車をこぎながら紅君は、どこからか飛んで来て自分の制服の袖についたピンク色の花びらを、私の目の前に差し出す。

「……さくら？」

「うん。もうすっかり散っちゃったと思ってたけど、まだどこかに花が付いてるのがあるんだな……探しに行ってもいい？」

「うん」

私が頷くと同時に、紅君はグンと自転車をこぐスピードを上げた。ギブスが取れた時、足が直ったんだから、もう自転車に乗せてくれなくてもいいよ と言った私に、紅君は 嫌だ と笑った。

俺はちいを後ろに乘せて、もつともつといろんな所に行きたい。
だから嫌だ

——そう告げられて嬉しかった。

紅君が笑った。私を見るたび、どうしようもなく胸がざわめくのはなぜなのか。その理由を私は知っている。

ちい　と優しい声で呼ばれるたびに、泣きたいくらいの気持ちになるのはなぜなのか。それだって分かってる。でも——。

（いつか伝える事が出来るんだろうか……？ 口に出して言うなんて今はまだ想像もつかない……）

抱え込んでしまった想いはあまりにも大き過ぎて、まだ胸に痛いばかりだ。

だけど近い未来も遠い未来も、やっぱり私は遠くからでも紅君の姿ばかりを探しているんだろう。

——そんな光景だけは簡単に想像出来た。

未来の自分がおかしくてクスリと笑うと、「何？」と背中のまま尋ねられた。

「なんでもない」と答えたら、「そっか」と短い返事が返って来た。紅君と二人でいる時の穏やかな自分が好きだった。余計な言葉や気遣いなんかがいらない、二人の間の自然な空気が好きだった。

紅君と一緒に私はいくらでも優しい気持ちになれる。家や学校で時折感じる暗く沈んだ気持ちや、自分の中で渦巻く濁った感情を全て忘れて、綺麗な私のままでいられた。

二人で過ごす短いひと時が、私にとっては本当に宝物のように大切だった。

「見つけた！ ほら、あそこ！」

大きなお寺の境内の片隅に、その桜の木は生えていた。様々な樹木が重なるようにして鬱蒼と繁っている中に小さく紛れていた。

「すみません。さくら……見せてもらってもいいですか？」

掃き掃除をしていたお坊さんをあつという間につかまえて、紅君はもう中に入る許可をもらってしまっている。

「いいって！ちい、行くよ！」

振り返って私を呼ぶ笑顔を、私も急いで追いかけた。

背の高い木々の合い間をぬうようにして、必死に枝を伸ばしている小さな桜の木は、ちょうど満開が過ぎた頃だった。

風もないのにハラハラと花びらが舞い落ちている。下には黒い地面を覆い尽くすように、白い花びらの絨毯が広がっていた。

「綺麗……」

少し離れた場所からその光景を見つめる私を、紅君が手招いた。

「ちい、こっち。桜はこうやって見上げるの」

降り積もった花びらの上に、紅君はなんの躊躇もなくゴロリと寝転ぶ。一瞬舞い上がった幾百もの花びらが、紅君の髪に、腕に、体に、ハラハラと舞い落ちた。

（綺麗……）

今度は声に出さず、心の中だけで呟いた。

まるで雪に埋もれたように寝転んだ紅君の上にも、絶え間なく新しい花びらが降りそそぐ。

「おいでよ」

呼ばれるままに、私も彼の隣に行った。そして紅君の真似をして、ゴロンと桜の絨毯の上に仰向けに寝転んだ。

その途端、彼が私に見せてくれようとしていた景色が、目の前に広がった。

無数の桜の花びらは、まるで少し霞みがかった春の空から降って来るかのように、静かに私の上に降りて来る。クルクルと回りながらほぼ一直線に降りて来る。

僅かな風でも進路を変えてしまう花びらを吹き飛ばしてしまわないうように気をつけて、私は身動きもせず、ただ静かに空を見上げていた。

「桜の木の下に倒れてたんだって……」

私と同じように黙っていた紅君がふいに口を開いた。

「俺の母さん……生まれたばかりの俺を抱いて、満開の桜の木の下に倒れてたんだって……そう園長先生が教えてくれた……」

「……………」

私は思わずその場に起き上がった。私の上に降り積もっていた花びらが、音もなくハラハラと地面に落ちて行く。

「紅君……………」

呼びかけても紅君は私の方を見ようとはしなかった。腕を頭の下で組んだまま、ただ真っ直ぐに空を見上げて、静かに語り続ける。

「ずい分痩せて、悪いところも体中いっぱいあつて……だけどそれでも、幸せそうだったって園長先生は言ってた。この子を……紅也をお願いします。って俺を見つめる目が、それはそれは愛しそうだったって……きつと自分の命をいっぱい削って俺を産んでくれたんだ……………」

紅君の眼差しは強かった。自分が確かに愛されているという事を知っている者の強い目だった。

私だつて父が生きていた頃は、いつだつてあんな目をしていた。

恐いものなんて何もなかった。

「母さんが最後に見た光景は、きつとこの……自分の上に舞い落ちて来る桜の花びらだよ……だから俺は、春になるとこうして桜を見上げるようにしている……ちいにも見せたかった……見てもらえてよかった……………」

「うん……………」

ニッコリ笑った紅君に促されるまま、私ももう一度、彼の隣に横になった。

きつと彼にとって特別な意味がある光景を、こうして私に見せてくれた事。他の誰でもなく私に見せたいと思ってくれたって事が、嬉しくて嬉しくて――。

私の上に降りそそぐ無数の花びらは、次第に涙で滲んでいった。

穏やかな日々に暗い影を落とす一点の染みのように、一時は収まっていた澤井の暴力が、季節の移ろいと共に時々顔を出すようになっていた。

特に年度始めに新しい会社に就職してからは、ストレスを抱えているからか、しばしば私を叩いた。

でもそれは単発的なものだったし、頬を赤く晴らした私に、「悪い」と謝る事もあって、私はそれ程危機感を感じてはいなかった。もともとそんなに澤井に対して期待していなかったと言った方が近いかもしれない。

紅君や園長先生は何度も、「いつでも 希望の家 に来ればいいから」と言ってくれたし、母もずい分私の様子を気にかけてくれた。だから大丈夫だと思っていた。

——あの日までは。

その日は母が残業で遅くなる事が朝から分かっていた。だから限界の時間まで私は 希望の家 に居座って、家に帰ったのはもう外が真っ暗になる時間だった。

危ないから と自転車で送ってくれた紅君に別れを告げて、アパートの部屋に帰った途端、澤井に力いっぱい殴られた。

「どこに行ってたんだ！こんな時間まで！俺をバカにしてんのか！」怒鳴られた瞬間に、澤井がかなり酒に酔っている事は分かったし、据わった目で私を睨む表情には、本当に憎悪の感情しかなかった。背筋がゾクリと寒くなった。これはマズイと本能で分かった。

座り込んでいた床を蹴るようにして立ち上がり、私はすぐに部屋の外へと逃げ出した。

「どこ行くんだ！こらあ！」

追いかけて来る澤井が、酔いで足がもつれてくれる事を祈りながら、無我夢中で走った。

真つ暗な夜の道を、ついさつき紅君が自転車で乗せて来てくれた道順をさかのぼり、ただひたすら 希望の家 に向かって駆けた。

「待てこらあ！」

後ろから聞こえる声がだんだん近付いて来る事に、全身鳥肌が立つほどの恐怖を感じる。私は無我夢中で叫んだ。

「紅君！紅君！助けて！」

いつの間に彼の名前を呼んだのか、自分でもよく分からないままに夢中で叫んでいた。

聞こえるはずなどないのに。気付いてくれるはずなどないと思っていたのに。真つ暗な夜道を、私に向かって小さな自転車のライトが一目散に走って来る。

「乗って、ちい！」

私に手を差し伸べた紅君は、私の手をつかむと、たぐり寄せるようにして自転車の後ろに引き上げた。

私が夢中で彼の背中にしがみ付いたのと同時に、紅君のこぐ赤い自転車はいつもの倍ものスピードで走り出した。

「待て！待て、こらあ！」

息を切らしながら叫ぶ澤井の声が、次第に遠くなっていく。

それでもギュツと固く両目をつむったまま、私はいつまでも紅君の背中にしがみ付いていた。

いつもはなんだかドキドキして指で触れる事さえとまどう背中に、ずつと頬を押し当てていた。

きつと限界いっぱいので速さで自転車をこぎながら、紅君が切れ切れに私の名前を呼ぶ。

「ちい……ちい……大丈夫だよ……」

優しいその声に私は頷く。何度も何度も頷く。

「俺と園長先生が……守るから……！ちいの事は絶対守るから……！」

頼もしい声が、言葉が、胸に痛くて痛くて――。

私は何度も頷きながら、紅君の背中に頬を寄せて泣いた。

「ありがとう……」

上手く紅君に届いたのかどうか分からない私の声は、真っ暗な夜の闇の中に飲み込まれて消えていった。

第一章 4

翌日、まだ早い時間に母は 希望の家 へとやって来た。

わたしがちいねちゃんといっしょになる！ と取り合いっこをしてくれた女の子たちと、みんな一緒に団子のようになって寝室の床に眠っていた私は、一人だけ先にこっそり園長先生に起こされた。応接室という名の園長先生の自室で私を待っていた母の頬は、私と同じように赤く腫れていた。

「お母さん！殴られたの？」

何よりも真っ先にそう叫んで駆け寄った私を、母は両手を広げて受け止め、胸の中に抱き込んだ。

「ごめん千紗……ほんとにごめん……」

耳元で囁かれる涙混じりの声に、キッと顔を上げる。

「お母さんは悪くない！お母さんが謝るような事はなんにもない！」

「うっん……お母さんのせいだよ……お母さんがハッキリ決められないから……だから……」

「違うっ！」

いつもより倍も大きな声を出して、必死に母の言葉を打ち消し続ける私の肩を、園長先生がポンと叩いた。

長い足を折り曲げて、私と目の高さを合わせ、一言一言ゆっくりと言葉をかけてくれる。

「ちいちゃん……しばらくこの 希望の家 で暮らしませんか？お母さんがキミの事を心配しないでゆっくりと答えが出せるように……」

「先生……」

優しいグレーの瞳で、表情を窺うように顔を覗き込まれて、思わず言葉に詰まった。

園長先生はそんな私の心も全部分かってきているかのように、ニツコリと笑って頷いてくれる。

「お母さんにも考える時間が必要だよ。そうデシヨ？……」

私は母の腕の中でコックリと頷いた。

「すみません……本当にすみません……しばらくの間、この子をよろしく願います……」

園長先生に向かって何度も何度も頭を下げる母の腕を、ギュツとつかむ。

この腕の中にまた安心して帰って来れる日が、一日も早く来るように。今度こそ母が、あの男と別れる事を決意してくれるように。願いを込めてつかんだ。

なのに神様は意地悪だ。——もう二度とこの腕に抱き締められる事はないなんて、私は思ってもいなかったのに。

「それで？……ここからは俺が先に行けばいいの？」

希望の家　に私も一緒に住む事になって、放課後のように二人で自転車に乗って登校した朝、いつもの土手に赤い自転車を隠しながら、紅君は私にそう尋ねた。

「うん……出来たらそうして欲しい……」

真っ直ぐに見つめられている事が居心地が悪くて、思わず俯く。そんな私に紅君は望みどおりにクルリと背を向けてくれた。

「分かった。じゃあまた帰りにね……ちい……」

後ろ手に手を振りながら去って行く背中を、道の真ん中に立ち止まったまま、しばらく見送っていた。

歩き始めて数十メートルも行かないうちに、脇道から土手に出て来た男の子たちが、紅君の姿を見つけて駆け寄って行く。

ポンと頭を叩き合ったり、肩を組んだりして、彼らが紅君とひとしきり談笑して離れていくと、またあつという間に違う男の子たちが集まって来る。

その一団の後ろを歩きながら、きゃっきゃと小声ではしゃいでいる女の子たちの姿も見える。

前方から来る犬を散歩させている女の人にも、後ろから自転車で追いついていく学生服姿のお兄さんにも、紅君は笑顔で会釈し、大きく手を振って挨拶する。

（ふふっ……いかにも紅君らしい……）

みんなに愛されて、彼自身もみんなを愛している人気者の 紅也君 がそこにはいた。

あの彼の隣を歩く事は、私にはなんだか出来ない。

（紅君はそんな事ないって言うけど……やっぱり私と紅君じゃ何もかもが違う……違いすぎる……）

だから遠くから見ているぐらいがいい。遠く離れて後ろを歩きながら、その背中をこうして微笑みながら見ているぐらいがちょうどいい。

澤井に殴られた頬は痛いし、母ともしばらく会えなくなつて、私の人生なんて悪い事だらけだけど、紅君の背中を見ているだけで、そんな事も全部忘れて笑う事が出来る。その事が嬉しかった。そんな些細な事が、私の幸せの全てだった。

楽しい事なんてなんにもないけれど、ただ遠くから紅君の姿を見るためだけの学校に、私は今日も一步を踏み出した。

ごめんなさい千紗……もうちょっと……もうちょっと待ってね

母からは時々、辛そうな声でそんな電話がかかってくるばかりで、なかなか澤井との話し合いは進展してはいないようだった。

あらかじめ覚悟していた事とは言え、毎回毎回電話が来るたびに、淡い期待を抱いて、そしてそれを打ち砕かれてと、何度も繰り返し返すのは精神的にかなりこたえた。

ちいねえちゃん……まだここにいる？

そう尋ねて私が頷くのを、 やったあ と喜んでくれる子供たちがいなくなったら、ひょっとしたら短気を起こして母の苦勞も考えずに家に帰ってしまったかもしれない。

季節はとつとくに桜の咲く頃から、初夏へと移り変わろうとしていた。

「ちい…… 希望の家 を出たらどこへ行くのか、俺の行き先が決まったよ……」

いつものように二人で自転車に乗った朝。なんの前触れもなく、紅君にそう告げられて、心臓が止まるかと思った。

この、私にとっての幸せなひと時が、いつまでも続くななんて思っていたわけじゃない。

でも改めて終りの時を告げられて、なんだか自分が世界中の全てに見放されてしまったような気さえた。

「そう……」

よかつたね なんて言葉は到底口に出来ず、小さく呟いた私に紅君は背中のまま告げた。

「うん。父さんが見つかったんだ……俺の本当の父さん……ずっと俺を探してたんだって……」

「……………！」

私が息をのんだ事が伝わったのだろうか。紅君が自転車を止めた。そのままゆっくりと後ろに座る私を振り返る。

「ちよつとした行き違いで母さんと連絡が取れなくなって、でもずっと探してたんだって。俺が生まれてたなんて事も全く知らなくて…… だけど「紅也」って名前で分かったって…… 次に男の子が生まれたらそう名付けるって、ずっと母さんが決めてた名前だからって……」

紅君の声が震えてた。いつもどんな時だって堂々と自分らしく生きていて、見ている私に勇気を与えてくれるあの紅君が、戸惑っている。

私は思わず自転車から飛び下りて、彼の正面へと走り込んだ。

「紅君……お父さんと会ったの？」

私に合わせて前へと向き直った紅君は、静かに首を横に振った。
「ううん……電話で話しただけ……三つ年上の兄さんもいるんだって、泣きながら話してくれた……」

言いながらその電話でのやり取りを思い出したのだろうか。紅君の目にも薄っすらと涙が浮かぶ。

「信じられない……信じられないよ、ちい……！」

くしゃつと顔を歪めて俯いた頭に、思わず手が伸びた。無意識のうちに、私は紅君の頭を抱き締めていた。

「よかった……！よかったね紅君！」

涙が零れる。自分の事のように、ううん、自分の事なんかよりもっともつと嬉しくて、涙が頬を伝って落ちる。

園長先生から教えてもらったほんの少しのお母さんの話を、紅君がこれまでどんなに胸の中で繰り返していたのか。何百回何千回と思ひ浮かべていたのか。私には分かる。分かる気がするから——嬉しくてたまらない。

「お父さんにもお兄さんにも会えるね。お母さんの話もいっぱい聞かせてもらえるね……よかったね紅君……！」

大切に大切に彼の頭を抱き締める私の背中に、紅君も腕を伸ばした。

「ちい……！」

かき抱くように抱き締められて、これまでのどんな時よりも彼を近くに感じて、それでもそこから逃げ出したいとは思わなかった。

紅君を抱き締める腕を、解きたくはなかった。

「よかったね……」

「うん、よかった……」

ようやくいつもの調子に戻った紅君の優しい声は、夏が近い青い空に吸い込まれて消えて行った。

「約束……守ってないよね……？」

放課後、紅君と待ち合わせている土手に向かおうとした私を呼び止めたのは、あのいつかの女の子たちだった。いつかはきつこうなると思っていた。でもそれでも、約束を破って紅君の近くに居続けたのは私だ。だから非難を受けるのは仕方がない。

「うん……ごめんなさい……」

潔く頭を下げたら、その上にバシャツと水をかけられた。驚いて顔を上げて、女の子たちの中の一人が、そこにあったバケツの水を私にかけたんだと知った。

校舎裏の物置の近くに置いてあった古いブリキのバケツ。いったいつからそこにあったんだか分からない中に、たまっていた雨水は腐ったような嫌な匂いがした。

「きつたなーい」

くすくすと笑いながら鼻をつまむ女の子たちの中で、中央にいる子だけが険しい表情を崩さない。確かあの時、私に　もう紅也君には近付かない　と約束をさせた子。

私と違って今年は紅君と同じクラスになって、楽しそうに話している様子も何度も見かけた事があるその子が、唇を噛みしめて私の事をじつと睨んでいた。

「なんで？……なんで約束したのに守らないの？」

押し殺したような声で尋ねられて、返事に困る。私の中ではその答えはすでに出ている。でも紅君本人にだってまだ告げてはいないこの想いを、先に他の人に言ってしまう事は出来ない。

「ごめんなさい……」

出せない言葉の代わりにもう一度謝った私の頬を、その子が叩いた。

「謝って欲しいわけじゃない！」

パアンと大きな音をさせて私の頬が鳴った途端、叩いたその子も周りの子たちもハツと息をのんだのが分かった。けれど、私は驚かなかった。

自分が叩かれるという事に、私はあまりにも慣れていた。それが

他の女の子たちとはこんなに違うんだと知って、その事の方がよっぽどショックだった。

「ごめんなさい……でもあの約束は守れない……ほんの少しの時間でもいい。私はやっぱり紅君のそばにいたいから……！」

きっぱりと自分の気持ちを宣言したのは、その子たちに対してだろうか。それともそう遠くない未来に紅君との別れを準備された自分の運命に対してだろうか。

分からない。分からないけれど、これまでこんなに強く何かを願った事などなかった。曲げられない。どうしてもこの思いは譲れない。

「なに言ってるのよ！」

右側の子に思いつき突き飛ばされて、物置にぶつかって、そのままそこに座り込んだ。すぐに立ち上がる事は出来そうだったけれど、私はあえてそうはしなかった。

地面に突っ伏すようにしてそのまま頭を下げた。

「ごめんなさい。紅君のそばにいさせて下さい。あとほんの少しでいいから……！」

鼻の奥がつんと痛くなる。浮かんで来る涙は、今の状況が悔しいからなんかじゃない。叩かれた頬も、突き飛ばされてぶつけた肩も、全然痛くなんかない。

もうあと少ししか紅君と一緒にいれないんだと知ってしまった胸の痛みに比べたら、何もかもがどうって事ない。

「なんなのよ、あんた！」

頑なな私の態度に頭に來た女の子たちが、土足で踏みつけてきたって、口汚く罵られたって、平気だった。

そんな事ぐらいで紅君と一緒にいる事を許してもらえるんだったら、どんな目にあったって、私はそれでよかった。

「どうしたの、ちい……？」

いつものように待ち合わせの土手に現われた私を見て、紅君は目を丸くした。

泥水で汚れた髪は水道の水で洗い直したし、制服についた汚れや叩かれた痕なんかも分からなくしたつもりだったのに、どうやら紅君の目は誤魔化せなかったらしい。

「えっと……転んじやった……」

ぎこちなく笑った私の顔を見上げて、草むらに腰を下ろしていた紅君は立ち上がった。

「誰がしたの？」

珍しく恐い顔で腕をつかまれるから、私は必死で首を横に振る。

「だ、誰も……本当に転んじやったんだよ……？」

「ちい！」

声を荒げる紅君に、それでも私は目をギョツとつむって必死に首を横に振った。

「大丈夫だから……本当に私は大丈夫だから……！」

「……ちい」

紅君がつかんでいた私の腕を放した。それを合図に、私は恐る恐る目を開いて彼の顔を見た。

「お願い……俺に守らせてよ……ほんとはずっと傍にいて守っていたかったのに、そうは出来そうにないんだから……せめて今だけでも……！」

ちよつと首を傾げて眉を曇らせて、本当に紅君は悲しそうな顔でそんな事を言うから、私まで悲しくなる。

必死に心の中で押し殺して、なかった事にしてしまおうと努力している寂しい思いが、胸から溢れ出しそうになる。だから――。

浮かんで来た涙をグイツと手の甲で拭って、私は笑った。

「大丈夫、私は強いから……！お母さんだって、園長先生だって、希望の家 のみんなだって傍にいてくれるんだから……自分で頑張れる。紅君が行っちゃっても、ちゃんと頑張る！」

「………そっか」

思いがけない事に、紅君は大きな大きなため息をついて、私に背を向けるとそのまま土手まで歩いて行って、その端に座り込んだ。髪の中に両手の指を突っ込んで、文字通り頭を抱える。

「なんだ……会えなくなつて寂しいのは俺だけか……」

ため息と共に吐き出された呟きに、どうしようもなく心臓が跳ねた。

「……………紅君？」

私が恐る恐る発した呼びかけにも、紅君は振り向いてくれない。膝を抱えて、土手の向こうの川のさらに向こうの、五つ並んだ煙突をぼんやりと眺めている。

「ずっと一緒にいたいなんて思つてたのは俺だけか……」

「紅君！私だつて……！」

焦つて駆け寄つてその顔を覗き込んで、彼が笑っている事に気がついた。

「……………！」

「ごめん、ちい……ちよつとズルかつた……」

申し訳なさそうに顔の前で両手を合わせる紅君の仕草を見ながら、私はさつきとは違う理由で泣きそうになった。

だつてこんなふうに焦つてしまつたら、もう自分の気持ちを言っているのと同じようなものだ。

真つ赤になつて俯く私の目の前で、紅君は立ち上がった。

「ちい……」と私を小さな声で呼んでから、腰から上半身を折り曲げて深々と私に頭を下げた。

「好きです。俺の彼女になつて下さい！」

ふわりと温かな風が頬を撫でた。遠くでカリーンと教会の鐘が鳴っている音が聞こえた。まるで私の上に鳴り響く祝鐘のように――。

「えっ？」

たつぷりとふた呼吸くらいの時間沈黙した後、ビククリして瞳を瞬かせた私の前で、紅君はガバツと頭を上げた。

「本当は、中学生になつたら誰よりも真つ先に言つつもりだった！

他の誰かに言われる前に！ちに、好きな人ができる前に！それとも……もうひょっとして、誰か好きな人がいる？」

それはもちろん紅君だよ！　なんて、とても面と向かつては言えなくて、私は必死に首を横に振る事しか出来ない。

「よかったあ」

紅君はニツコリ笑って今度は私に右手を差し出した。

「なんか……全然思ってたようには行かないんだけど……予定が狂いっぱなしなんだけど、しょうがない……俺がずっと傍にいてあげられないんだから仕方ない……」

独り言のように言いながら、紅君は私の手を取る。ギュツと両手で包み込むように私の手を握り締めて、キリツと真剣な眼差しを私に向けた。

「俺は絶対にちいを忘れないから！……きつと会いに来るから！ちいが寂しくなったらいつだって飛んで来るから……だから、いつか迎えに来てもいい？俺がこれから住む町に……いつか、ちいも連れて行ってしまうてもいい？」

頭が真っ白になった。ドンドンと大きな音を立てて、もう壊れんばかりの早さ、大きさを心臓が脈打ってる。

（え？え？……それっていったい……どういう……？）

思考も完全に麻痺してしまっているし、顔もほとんど異常なまでに赤くなっていく。そんな私に紅君が笑いかける。——あの私が大好きな笑顔で、ニツコリと笑いかける。

「ごめん……なんで俺、今、プロポーズみたいな事言ってるんだろ……？そうとう参ってるな……おかしくなってる……でも……！」

私の手を包み込む両手に、紅君はぎゅっと力を込めた。

「順番は滅茶苦茶になっちゃったけど……もうずっと前から決めた事だから！全部、全部……きつといつかはちに伝えるって決めてた言葉ばかりだから！」

「……全部？」

「そう！全部！」

「ずっと前から……？」

「うん。ずっとずっと前から！」

声が震える。胸が痛い。もうどうしようもないほど胸が痛くって、零れ落ちる涙を隠す事だつて出来そうにない。

遠くから見ているだけでいいと思つてた。背中を見ているだけで幸せだった。なのに紅君は、そんな私を振り返つて、手を差し伸べて、一緒に連れて行つてくれるのだと言う。

——いつか紅君と同じところに、私も連れて行つてくれるのだと言つ。

「うん。行く」

彼の言葉が風にさらわれて全て幻になつてしまふ前に、私は急いで返事した。

いつかは伝えたかつた気持ち。伝えられるといいと思つていた気持ち。

確かに紅君の言う通り、私の中でも予想外に早くなつてしまったけれど、きつといつになつても変わらないだろう。

——例え伝えるのが今でも、何ヶ月か先でも、何年後かでも、この想いはきつと変わらない。

「好きです、紅君。大好きです」

いっぱいいっぱいの思いで言葉を口にした私に、紅君は大きく目を見開いて、それから満面の笑顔になつた。——またもう一度、あの私の大好きな笑顔になつた。

「うん。俺も大好き。ちい」

手を取り合つて私たちは笑つた。世界中の幸せを全部、二人のてのひらの上に集めたみたいに笑つた。

手に入れたのはままごとみたいな小さな幸せで。大人から見たら、子供の戯言だなんて笑われてしまいそうなほどの小さな約束で。

でも大人だとか子供だとか関係なく、あの時の私たちはいたって

真剣だった。

もしもあのまま何事もなく日々が過ぎていたならば、守られていた約束だったのかななんて考えると、今もまだ胸に痛い。

うん。俺も大好き。ちい

ただ一人、私だけに向けられていた優しい声が、今も耳に残る。

いつだって吹き抜ける風のように、爽やかに鮮やかに、私の心を驚掴みにしていった永遠の少年。――紅君。

今でも好きだよ。あの日と変わらず。うっん、もっともっと大好き。

切ないばかりの想いは色あせる事無く、今も私の心に焼き付いている。

希望の家 に向かつて二人で帰る途中、何台ものパトカーや消防車が私たちの乗った赤い自転車を追い越して行った。

「何かあったのかな……？ 火事かな？」

「うん……」

妙な不安を感じながら紅君と囁きあった時、前から来た軽自動車が出したのは、母と同じ工場に勤める富田さんだった。

「あんた千紗ちゃんじゃないのかい？ ああやっぱりそうだ！ 千紗ちゃんだね！」

母よりは少し年配の面倒見のいいそのおばさんは、ずい分青い顔をしていた。

「てつきり火事に巻き込まれたんだと思ってたけど……会えて良かった！ お母さんが大変だよ！ 今、総合病院に搬送されたところだ！」
「病院！」

思わず紅君の背中につかまった手に力がこもった。息をのんだまま全身がガタガタと震え始めて口も開けない私に代わって、紅君が富田さんに次々と質問をして、必要な情報を聞き出してくれる。

「どうしたんですか？」

「あの男だよ！あの男に刺されたんだ！」

「さ……された？」

「ああ。別れ話にカツとなってやっいたらしいけど……刺した男は奈美さんを放ったまま逃げて、今度は千紗ちゃんがいるらしい福祉施設に火を点けたって！」

「……………」

紅君がどうしようもなく緊張した事が、背中越してもよく分かった。私はたまらず叫ぶ。

「紅君！」

「ちい！」

紅君が自転車のペダルに足を掛けた。大きく漕ぎ出そうとして一瞬、私を振り返る。

「ちいは、お母さんのところに……」

全部言い終わられる前に、私は必死で首を横に振った。

「お母さんはもう病院だもん！私に出来る事は祈る事だけだもん！そうでしょ？」

「でも、ちい！」

「いいから行こう！みんなのところに早く！」

あどけない笑顔が次々と目の前に浮かんで来る。翔太君。綾芽ちゃん。鈴ちゃん。和真君。奏美ちゃん。要君。一葉ちゃん。

まだ小学校に入学していない幼稚園組は、この時間みんな希望の家 にいるはずだ。いつものようにそれぞれの小さなお仕事に一生懸命精を出しているはずだ。私たちが帰って来るのを心待ちにして――。

「くそおおっ！」

紅君の今まで聞いた事もないような叫びにぎゅっと唇を噛みしめてから、私は富田さんを振り返った。

「みんなの無事を確かめたらすぐに病院に行きます！だからそれまでお母さんを……！」

富田さんは真つ青な顔のまま頷いた。

「うん、うん、分かった。気をつけてね！」

「はい！」

私の返事と共に、紅君が自転車を漕ぎ出した。今までにないもの凄いいスピードで――。

「紅君……」

（私のせいでごめんなさい……！私が 希望の家 にいたばかりにみんなをまき沿いにしてしまつて……ごめんなさい！）

まるで、そんな言葉を私に言わせまいとするかのように、紅君はどんどん自転車のスピードを上げていく。

遠くに見えて来た黒煙に、紅君がついにブレーキから手を放したのと、目の前に近付く車の多い国道。 気をつけてね！ という富田さんの声。

その全てになぜかとてつもなく背筋が冷えた瞬間、私たちに向かって大きなトラックが横滑りに突っ込んで来た。

紅君の背中越し、トラックの運転席に座る男性がハンドルにぶら下がるようにして意識を失っている姿が、まるでスローモーションのようにゆっくりと私には見えた。

（……………！）

ノーブレーキの大型トラックにはば真正面からぶつかつて、空高く舞い上がった赤い自転車。

道路脇のガードレールに背中からしたたかに打ち付けられた私は、道路の真ん中に倒れた紅君に向かって、トラックが再び突っ込んで行く光景を、為す術もなく見ていた。

「いやあああああつ！紅君……！」

差し伸べようとした腕が、自分の意志の力ではピクリとも動かない。叫んだはずの言葉は、実際に音になっていたのか自分の耳で確かめる事も出来ない。

音も感覚もなく、ただ映像ばかりになった私の世界が、次第に真つ赤に血塗られ、たった一つだけ残されていた視覚――見る事さ

え出来なくなっていく。

（やだ！やだよ！お母さん！園長先生！みんな！……紅君！紅君！紅君！！！！）

体と心を貫く激痛に抗う術もなく、私は意識を手放した。

——深い深い闇の中へ、たった一人で落ちて行った。

第二章 1

私にとってはたった一つの約束を、紅君と交わしたあの日。

——私は大切なものを全て失った。

抱き締めてくれる腕も。注がれる優しい眼差しも。差し伸べられた手も。

ようやく手に入れたと思った未来への希望は、何もかも無残に打ち砕かれた。

他の誰でもない。私自身のせいで――。

火事になった 希望の家 へと向かう途中でトラックに跳ねられた私と紅君は、結局、炎に包まれた園に辿り着く事は出来なかった。澤井に放火された古い木造の建物は、あっという間に火が燃え広がりに、中にいた子供たちの生存は、一時、絶望的とも見られたらしい。

しかし子供たちと一緒に火の中に取り残された園長先生は、決して諦めはしなかった。

最初の二人を両腕に抱えて火の海から出て来ると、すぐにまた全身に水を被って、火の中に戻ったという。何度も何度も――。

園長先生の手によって子供たちはみんな助け出され、結局、その火事では誰一人傷つかなかった。消防車の到着と同時に、精根尽き果てて倒れた園長先生を除いては――。

全身火傷だらけで走りまわった園長先生は、そのまま帰らぬ人となった。

救急車で搬送されていく先生に、希望の家 の子供たちは泣いてすがり、それはそれはかわいそうだったと、後になってその場にいた人から聞かされた。

私も涙が止まらなかった。子供たちにとっては唯一無二の存在。

私にだって 辛かったらいつでも私のところにいらっしやい と手を差し伸べてくれた大切な人。

（なんでこんな事になってしまったんだろう……！）

そう思えば思うほど、自分を責めずにはいられなかった。

澤井に刺された母も、ついに意識が戻る事なく亡くなった。

背中の裂傷と何箇所もの骨折で、三日三晩生死の境をさまよった私が目を覚ました時には、もう何もかもが終わっていた。

誰にもお別れを言う事も出来なかった。

私よりもひどい容態で病院に運び込まれた紅君は、事故を知って訪ねて来た彼の父親によって、自宅近くの病院にすでに転院させられていた。

彼がどこに行ったのか。私には知る術がない。

いや。知ろうと思えば、担当の医師にだって尋ねる事は出来たのかも知れない。でも私にはその意欲が湧かなかった。

どう考えたって、園長先生と紅君がこんなひどい目にあったのは私のせいだ。

澤井が警察につかまって、周りの人がどんなに あなたのせいじゃない って言ってくれたって、 私がいなければ…… 私が希望の家に関わっていなければ…… という後悔の気持ちは、どうしても心の中から消えない。忘れる事なんて出来ない。だから――。（きつともう関わらないほうがいい…… 紅君が無事なら…… それでいい……！）

私はお医者さんづてに、紅君の怪我が命に関わるものではなく、少しずつ回復に向かっているという事だけを教えてもらって、もうそれ以上は聞かなかった。

（ごめんね紅君…… ごめんなさい園長先生…… お母さん……）

後悔と悲しみの涙は枯れる事なく、いつまでもいつまでも私の心を支配していた。

何もやる気が起きず、実際何もしないままの夏が終り、秋が過ぎた頃、私は病院を退院した。行く当てはなかった。

母が私名義の貯金と保険金を残してはくれていたが、母と澤井と三人で暮らしたアパートには戻りなくなかった。紅君がいなくなつた学校にも――。

マスコミにも小さく取り上げられた事件を心配してくれた父方の遠い親戚が、連絡をくれ、田舎に越して来たらどうかと申し出てくれた。

私はこの町を出る事にした。

秋風が吹く頃、片手に下げた鞆に収まるくらいのほんの少しの荷物を持って、一人で駅までの道を歩いた。

空はどんよりと曇り空で、まるで私の心境のように今にも泣き出しそうな天気だった。

紅君といつも自転車で走つた土手の道。川の方こうに今日も変わらず煙を吐き続ける五本の煙突を見ていたら、自然と涙が浮かんで来た。

あの工場で、毎日頬を煤でちょっと黒くして働いていた母はもうどこにもいないんだ。

千紗……なんて顔してんの！ほら笑って、笑って！

父が亡くなつてから、精一杯のから元気で私を励ましてくれたいた笑顔しか、今は思い出せない。

ちい！見て！もうつくしが出てるよ！

何を見ても何を聞いても、それが紅君からの知らせだったらどんな事だって私にとっては特別だった日々が、胸に痛い。痛い――。

いつか迎えに来てもいい？俺がこれから住む町に……いつか、ちいも連れて行ってしまってもいい？

叶う可能性がなくなつてしまった約束が悲しくて悲しくて、涙が零れる。

まるで私の涙に呼応するかのように、空からも大粒の雨が降り出した。

天気があまりよくないと、背中の傷が痛む。事故で残った大きな背中の傷を、私はあえて目立つままに残しておいた。

女の子なんだから、分からないようにしたほうがいいんじゃないの……？

お医者さんや看護師さんたちの勧めは断った。

この傷は私の十字架だ。私のせいで不幸にしてしまった人たち。命を失ってしまった園長先生。みんなへの懺悔の思いを胸に抱えて、私はこれからも生きていく。

だから見た目の良さなんて関係ない。決して忘れたりしないように、体に刻み付けられているくらいが丁度いい。

次第に強くなっていく雨足が、地面を叩き始めた。跳ねた泥に、靴も足も茶色く染まっていくな。伸ばしっぱなしの長い髪を伝って、雨が滴り落ちる。

全身ずぶ濡れになって歩きながら、ホッと安堵した。

止めようとしても溢れてくる涙。母と暮らした、紅君と自転車で走ったこの町は、どこに行っても何を見ても、思い出が多すぎる。

一人取り残された私には、その思い出が重過ぎる。

我慢出来ない涙を隠してくれる雨は、きっと天からの贈り物だ。いつも私の事を心配してくれていた母や園長先生からのプレゼントだ。

（だから……だから今だけ……！）

大きな雨音が全てをかき消してくれる事を祈って、俯いたまま歩きながら私は泣きじゃくった。涙で頬が濡れているのか、雨で濡れているのか、誰が見たって見分けなんかつかない事に感謝して泣いた。

今日でこれまでの自分とは全て別れなんだと心して、声を上げて泣いた。

「いらっしゃいませ」

古いガラスドアが引き開かれる重い音に、反射的に顔を上げて、機械的に同じ言葉を繰り返す。

入って来るお客は、時に初めての顔で、時に良く見慣れた顔で、いくつかの決まったメニューの中から好きな物を注文する。

出来上がるまでの短い時間を過ごす店内は、腰掛ける場所さえないほどに狭い。

商店街の外れの小さなお弁当屋。——そこが十二歳からの私の居場所だった。

父の従兄妹だという叔母夫婦は、優しい人たちだった。不幸な事件で母を亡くした私の事も、何も言わずに受け入れてくれた。

何もしないで居候しているのは、千紗ちゃんだって居心地が悪いだろうから　と、時々家業のお弁当屋を手伝わせてくれ、こんな私でも少しは役に立っているんだという自負も与えてくれた。

叔母たちのもとから、知り合いは誰もいない小学校と中学校に通い、私は十六歳になった。友達は一人も作らなかった。

自分の事を何も話さず、休み時間になるとふらっと教室からいなくなってしまう変な転校生を気にかけて、声をかけてくれる優しい子も、都会とは違ってこの小さな町では多かったが、いつまでたってもちつともみんなに馴染もうとしない私とクラスメートの間の溝は、時が経つにつれ深くなっていくばかりだった。

人と交わるのが面倒だったわけではない。話しかけてもらえるのは嬉しかったし、優しい子たちに囲まれているのは正直幸せだった。しかし、楽しい事や面白い事に出会うつと、何よりも先ず真つ先に頭に思い浮かんでしまうのだ。——あの子たちは今どうしているのだろうか。

希望の家　が無くなってから、そこで暮らしていた子供たちはみんなバラバラに違う施設に引き取られた。中には暴力が原因で別に暮らしていた親と、再び暮らすようになった子もいる。

（鈴ちゃん泣いてないかな……和真君は新しいお母さんと上手いっってるんだろうか？）

本当なら優しい園長先生のもとで、まだみんな一緒に暮らしていたらとう事を思うといたたまれない。

（いつか……いつか一人一人みんなのところを訪ねて、謝りたい）それが私の心からの願いだった。そして――。

（いつか私も、園長先生のように行き場のない子供たちの避難場所を作ってあげたい）

いつしかそれが、生きる目的さえ無くしていた私の小さな目標になっていった。そのために、本当は行くつもりがなかった高校にも、夜間ではあるが通う事にした。

大学受験の資格をとって大学に進学し、福祉や教育について学ぶ。そしていつか園長先生のように、本当に子供たちを大切に思いやれる施設を開く。

そのために母が残してくれた貯金にも保険金にも私は手をつけてはいなかった。

あんなに傷ついて、もう一步前には踏み出せないと思った事件から四年。私は背中に十字架を背負いながらも、一歩ずつ小さな歩幅で、確かに前に進もうとしていた。

「いらつしゃいませ」

私がお弁当屋の店頭に立つ夕方に、店を訪れる客は半分は常連客だ。

「千紗ちゃん、いつものヤツ」

「はい」

仕事帰りのサラリーマン。二人暮しの新婚さん。母と同じように女手一つで小さな子供を育てている若いお母さん。

特別に会話は交わさなくても、毎日のように同じ顔を見るのは嬉しいし、会えない日には 今日はどうしたんだろう？ と心配したりもする。

そんな中でも彼は特別だった。

毎日決まった時間に、毎日同じ一番安いお弁当を決まって三つ買っていく若い男の人。叔母さんたちとの会話で、最近近くの診療所に赴任して来たお医者さんの息子さんなんだと知った。

「医者って言っても安月給で……その上僕が大学に進学したばかりだから、うちってもの凄く貧乏なんですよ……」

ボサボサの髪をかきあげながら、大きな眼鏡の向こうで笑うその人は、言葉とは裏腹にいつも笑顔だった。

野暮ったい大きなシャツを着て、いまだき珍しい分厚い眼鏡をかけたその人は、どちらかと言えば無愛想に店頭に立つ私にも、屈託なく笑いかける。

「千紗ちゃん、今日もお得弁当三つね」

いつも通りの注文に、仕切りの向こうの厨房から叔母が声を張り上げた。

「蒼ちゃん！野菜も食べないといつか具合が悪くなるよ！あんただって医者のお卵なんだろ……？千紗、私のおごりでいいから今日はサラダも付けといて！」

「はい」

頷いた私に、その人——蒼之さんは慌てて財布を取り出した。

「待って！お金ならちゃんと払うから！いやあ、おばさんにはかなわないなあー」

人の良すぎる笑顔で笑う蒼之さんは、毎日休みなく働くお父さんを助けるために、自分も医者を目指しているんだといつか言っていた。

きっと患者さんや看護師さんたちに怒られながらも、ニコニコ笑っているような優しいお医者さんになるんだろう。

（うん……ぴったりだな……）

財布の中身を必死に探っている様子を頭の上から見ていたら、

「なに？」

上目遣いに見上げられてドキリとした。

いつも分厚い眼鏡の向こうにある蒼之さんの目は、眼鏡のない位

置から見ると私の良く知る人にとても似ていた。——どんなに忘れようとしたって、決して忘れる事なんて出来ない人——紅君。

「なんでも……」

慌てて視線を逸らすと、その先にわざわざ移動してまで顔を覗き込まれる。

「千紗ちゃん……？」

どちらかと言えば面長の顔も、細すぎるほどに華奢な体つきも、真つ黒でちよつと硬そうな髪も、蒼之さんは全然紅君に似てなんかいない。

でも時々チラリと見える目元だけ、いつも笑顔なところと、相手の心の動きに敏感なところだけ、とてもよく似ている。

「なんですか？」

失礼にならない程度にぶっきらぼうに答える私にも、蒼之さんの笑顔は崩れない。

「うん……なんでもない。また、明日ね……」

ニツコリ笑って後ろ手に手を振る姿が、また忘れられない少年のそれと重なって、私はブルブルと首を振った。

「千紗……？」

叔母が訝しげに問いかける。私の周りにいる人はどうしてこんなに優しいんだろう。私自身は何も恩を返せないどころか、迷惑ばかりかけているというのに。

「もうすぐ学校に行く時間だろ？今日はもう上がりな……一人でも面倒臭がらずにちゃんとご飯食べるんだよ……？あんだだって蒼ちやんと変わんないくらい、食事には無頓着なんだから……」

「……はい」

叔母が苦笑する気配を背後に感じながら、私はつけていたエプロンを外した。

夕食用にと叔母が準備してくれていたお弁当を持って店から出ると、裏口近くの塀の横に、その蒼之さんがしゃがんでいた。

「あーあ、そんなにがつつくなよ……今日はちゃんとたくさん持つ

て来たからさ……」

背中越しにそおつと覗いてみたら、五匹もの野良猫が彼の前に集まっていた。

買ったばかりのお弁当は猫に届かない塀の上に置いて、彼が手にしているのは煮干しの袋だろうか。

にやあにやあと懐っこく鳴く猫と、それに律儀に返事を返している蒼之さんの姿に、思わず頬が緩む。

（本当に優しい人……きつと誰が見ていても見ていなくても、変わらずに優しい人……）

気がついたら蒼之さんが、しゃがんだ体勢のまま、私を振り返っていた。

「千紗ちゃん……！」

ニツコリと笑いかけられて、逆に私の表情は凍り付く。笑顔の作り方なんて、四年前のあの日に忘れてしまった。

大好きだった紅君の笑顔を思い出せば思いだすほど、私自身はどんどん笑えなくなっていく。

どことなく紅君を思い出させる蒼之さんの笑顔は、私にとっては見ているだけで心が引きつるように苦しかった。

「もう今日は帰るところ？これから学校？」

「はい」

私が笑うのが苦手な事も、尋ねられなければ決して自分からは口を開かない事も、全部分かっているかのように蒼之さんは接してくれる。

そんなところが、彼が本当に優しい人なんだと再認識させられるところであり、きっと良いお医者さんになるんだろうなと、温かい気持ちにさせてくれるところでもあった。

「こんな所で猫を集めてたらやっぱダメかな……お弁当屋の裏だもんね……」

私の出て来た裏口と幸せそうに煮干しをほおばる猫たちを代わる代わる見ながら、蒼之さんはちよつと慌てたように私に問いかける。

私はゆつくりと首を横に振って、彼の隣にしゃがみ込んだ。

「大丈夫ですよ……叔母さんも叔父さんも野良犬や野良猫を放つとけない優しい人だから……行く所のない私を拾ってくれたくらいに……」

「千紗ちゃん……」

思わずハツとした。穏やかな蒼之さんの雰囲気ホッと安心して、あまりに彼の隣が居心地がよくて、ついつい錯覚を起した。まるで昔に戻ったような、紅君の隣にいた頃のような感覚で、余計な事を話してしまった。

「私……！」

立ち上がって急いで彼に背を向け、走り出そうとした背中に声がかかった。

「千紗ちゃん！ 実際三つ年上なわけなんだけど……ご覧の通り僕は頼りないし、君ほどしっかりもしてないから、さんはいらないよ……敬語もいらない……！」

振り返ったら蒼之さんも私と同じように立ち上がってこっちを見ていた。

途方に暮れた子供のようにこっちを見ている姿は、確かに彼が言うようにあまり年上らしくはない。でもだからといって、さん付けじゃなければ、なんて呼んだらいいんだろう。

「蒼ちゃん……？」

叔母が彼を呼んでいるままに呼んでみたら、蒼之さんがニコリ笑った。それは、私が思わずドキリとせずにはいられない、紅君にどこことなく似た満面の笑みだった。

「うん。それでいいよ。千紗ちゃん……」

紅君を初めて名前で呼んだ時のあのドキドキが、なぜだかその瞬間私の胸に甦った。

ありありと甦った。

第二章 2

「今日は特別にキャットフードの差し入れだぞ……栄養バランスを考えたらたまにはこういうのも食べなきゃなんて、千紗ちゃんは優しいよ……感謝しろよ、お前ら……」

まるで相手が人間であるかのように、こんこんと話して聞かせながら猫を撫でる細身の背中に、思わず叫んでしまう。

「優しいのは……私じゃなくて、蒼ちゃんだよ……！」

しゃがんだままゆつくりと、彼が私を振り返った。

「いや、千紗ちゃんは優しいよ……」

満面の笑顔で繰り返し返されて、泣きそうな気持ちになる。

お弁当屋から叔母たちの家へと一人で帰る夕暮れ。裏口のところで蒼ちゃんと一緒に野良猫にご飯をあげるのが、私の毎日の日課になりつつあった。

毎日決まった時間に、決まったお弁当を三つ買いに来る蒼ちゃんと、夜間の高校に通うため、昼間働いているお弁当屋からいったん家へと帰る私の帰宅時間はいつも同じ。

特に約束をしたわけでも、そうしようと決める何かがあったわけでもないけれど、自然と毎日ここで少しの時間を共に過ごした。

家に帰って一人で食べる夕食は寂しくて、私は店の裏に放置された古い椅子に座って、猫たちと一緒にここでお弁当を食べる事になっている。

蒼ちゃんは、自分が買ったお弁当は塀の上に置いて、いつもニコニコしながら私たちをただ見ていた。

「早く持って帰らなくていいの？」

塀の上のお弁当を指差すと、彼は困ったようにボサボサの髪をかき上げる。

「ほんとはまだ、父は時間外診療中なんだ……だからもうちょっとしてから、あつため直して食べる。ごめん……出来立てが美味しい

って事は分かってるんだけど……」

私は大慌てで手を振った。

「うん。そんなつもりじゃないの！ごめんなさい……でも……だつたらもう少し遅い時間買いに来たらいいんじゃない……」

蒼ちゃんがクルリと私に背を向けた。キャットフードを食べ終わって、その場に丸くなるうとしていた猫を一匹抱き上げる。

「それじゃ千紗ちゃんには会えない……」

ドキンと心臓が跳ねた。

（それって……どういう意味だろう……？）

焦る私の様子がわかったかのように、蒼ちゃんは振り向いた。

「こいつらが寂しがるだろ？」

腕に抱えていた猫を高くかかげて、ニツコリと笑う。

蒼ちゃんの分厚い眼鏡に夕陽が反射して、キラリと眩しかった。

その輝きよりも彼の笑顔はさらに眩しかった。

真っ直ぐに見ているのが辛くて、私は膝に抱えたお弁当に視線を落とす。叔母が私のためにと、あれもこれもたくさん詰め込んでくれたスペシャル弁当。

お弁当屋のメニューにはないものだが、本当は一番安価なはずの蒼ちゃんのお得弁当の中身が、限りなくこれに近いという事を私は知っている。

「お父さんは遅いんだつたら、蒼ちゃんも今、ここで食べたらいいのに……」

ポツリと呟くと、彼は私の前にしゃがみ込んだ。

「うん。いつかそうできたらいいなって、僕も思う。でも今はまだ……弟と一緒に食べてやらなきゃ……」

私はハッと顔を上げた。

「弟さんが待つてるの？だつたらすぐに帰らなきゃ！」

彼の口調から、まだ小さな子なんだろうと思ったのだ。しかし私の予想は外れていた。

「大丈夫だよ。弟って言うてももう中三で、今度高校生になるんだ

……それに僕、ここにはいつも三十分もないだろ？千紗ちゃんとかいつらが夕ご飯を食べる間ぐらい、弟だって待っててくれるよ……ひよっとしたら僕が帰らなくて、一人きりの方がいいって思ってるかも……」

「蒼ちゃん……？」

いつもの笑顔がほんの少し寂しそうになった気がした。眼鏡の奥の蒼ちゃんの優しい瞳が、なんだか今までに見た事もない感情に揺れた気がした。

「変な事言つてごめん……中三つて言っただけど、あいつ、年は千紗ちゃんと同じなんだ……小学生の頃に事故にあつて、一年ブランクがあるから……」

「そう……」

普段は痛みなんかまるで感じない背中への傷が、ズキリと痛んだ気がした。

「ずい分ひどい怪我で、長い間入院してて……それに他にも……他にも本当にいろんな事があつて……弟はあんまり食事に対する意欲がないんだ。僕と一緒にじゃないとご飯を食べない……」

「……………！」

何も言えずに息をのんだ私に、蒼ちゃんが慌てて笑いかけた。まるでそんな事なんでもないというふうな、今度の笑顔には一点の曇りもなかった。

「大丈夫！ほんとに、一時期よりはずい分ましになったんだ……！この町に来て、無理に勧めなくつてもあいつが自分から食べてくれる美味しいお弁当屋さんも見つけたし！」

大きな声で胸を張りながら、叔母たちの店を指差す笑顔に、一瞬、小さな少年のそれが重なる。

胸に痛い面影を、首を横に振って追い払っていると、頭の中に甦る言葉があつた。

——希望の家 に初めて行った日。私を送る車の中で、園長先生がかけてくれた言葉。

自分が辛い思いをした事がある子は、他の人に対して優しいデス……あなたやコウもそう……

(そうか……そうなんだね……)

蒼ちゃんの優しさは——猫にも私にも、誰に対してだって掛け値なしに発揮される優しさは——きっと彼がこれまで、それだけ辛い思いをしてきたからこそなんだ。

彼のお母さんは、彼がまだ小さな頃に亡くなったんだと、噂好きの近所のおばさんが教えてくれた。お父さんは睡眠時間も休日も削って、医者として懸命に働いている。

そんな中で事故にあつて大怪我をした弟を、きっと蒼ちゃんが一人で守ってたんだ。

ひよつとしたら落ち込んだり、自暴自棄になったりしたかもしれない弟の心を、この笑顔ですつと守ってたんだ。

——大丈夫。大丈夫だよ。きつと良くなるよ。

ついこの間親しくしゃべるようになったばかりで、よく知ってると言える仲でもないのに。ましてやその場にいたわけでもないのに、蒼ちゃんのそんな姿は、あまりにもリアルに想像出来た。優しい声まで聞こえて来るかのようにだった。

「千紗ちゃん……？」

呼びかけられて初めて、自分が泣いている事に気がつく。慌てて手の甲でグイッと頬を拭った。

「ごめん、蒼ちゃん……」

泣きたいのは私ではない。蒼ちゃんの方だろう。きっと彼はこれまで涙なんか誰にも見せずに、笑って、笑って、実際心の中では一人で泣いて来たんだろう。

我慢しなくつてもいいんだ。辛かったら、悲しかったら泣いていいんだ

紅君にもらった大切な言葉が心に甦る。

そう言ってもらえて、紅君にギュッと抱き締めてもらって、十一歳の私は生まれて初めて人前で声を上げて泣いた。

（私……！）

出来るなら、蒼ちゃんにもそう言ってあげたい。紅君が私の心を軽くしてくれたみたいに、私も蒼ちゃんのために何かが出来んなら、それはなんて嬉しい事だろう。だけど――。

蒼ちゃんに向かって無邪気に手を伸ばすには、十六歳の私は、もうあまりにも大人で。

他意なく抱き締めてしまうには、彼に対する私の感情は、自分でももうよく分からないくらいに、ぐちゃぐちゃで。

そして絶対に叶う事はないと自分でもよく分かっているのに、捨てる事の出来ないたった一つの約束を、私はやっぱり忘れる事が出来なかった。

（紅君……！）

必死に記憶の欠片を繋ぎ合わせなければ、今では思い浮かべる事すら難しくなりつつある面影を、心の中で抱き締める。

（紅君！）

俯いた私の頭を、蒼ちゃんがポンと軽く叩いた。

顔を上げたら、優しい笑顔が私を見下ろしていて、その笑顔のおかげで、私はまた紅君の顔をありありと思い出す事が出来た。

私はなんてひどい人間なんだろう。自分勝手な人間なんだろう。なのにそんな私の事でさえ気遣って、蒼ちゃんはまた笑ってくれる。

「ごめん……この話はもうおしまい！いつか千紗ちゃんも、弟に会わせてあげるから。そしてらもうそんなに心配する事ないって、分かると思うから！だから大丈夫だよ……」

夕焼けに染まる空を笑顔で見上げた蒼ちゃんの横顔は、凜としていて強かった。

僕は頼りないから……なんていつも優しげに笑っている蒼ちゃんの強さを、私は胸に痛く思い知った。

その強さに、私も 彼 も大きく大きく守られていた事だけには、

その時はまだ気付かなかったけれど――。

第二章 3

小さな町が夕焼けに染まる頃、電車に乗って登校する私の高校は、隣町の繁華街の中心にある。

普通に昼間に通う高校だったら住んでいる町にもあったが、進学先に夜間高校を選んだから、週に五日、こうして十分ちよつとの間を電車で揺られる事になっている。

入学してもうすぐ一年になるが、昼間の学校に通えばよかったと後悔した事は、これまでに一度もない。

大勢のクラスメートの中に紛れて、学校行事にも部活動にも特に積極的に参加しないまま過ごした中学三年間は、私にとって苦痛でしかなかったから。

それぞれが微妙に距離を取り合って、変にお互いの事を詮索したりしないぐらいの今の友人関係が、私には心地よかった。

あまり多いとはいえないクラスメートは、昼間はそれぞれに仕事を持っていて、それでも勉強がしたくて夜学に通って来るくらいだから、余分な時間もお金も持っていない。

教室に一緒にいる間は楽しくおしゃべりもするが、それ以外での接触はなかった。そんな割り切った関係が楽だった。

「おはよう。千紗」

「おはよう」

夕方なのに おはよう なんてと、最初は照れ臭かった挨拶にもすっかり慣れた。

十五人しかいない教室。一人で二、三席は使えるぐらいに机は余っているが、女の子四人はいつも決まって、近くにくっついて座っている。

「どうしよう……！私、今日は絶対当たるのに、予習してないよ！」

「そんなの誰だってしてないよ……」

「千紗！千紗さま！お願い、急いでこの問題解いて！」

授業と授業の間の短い休み時間に交わされる会話は、中学時代によく耳にしていたそれと全く変わらない。

でも、どんな事にも めんどくさい なんて不満は絶対口にせず、真剣に向き合う彼女たちが、私は好きだった。

「うーん……解けるかな……？」

「千紗に解けなきゃ誰に解けるのよ！」

これまで教室の隅でひっそりと学校生活を送ってきた私を、彼女たちはかなりかってくれている。

裏表なんてまるでない素直な褒め言葉が、照れ臭いながらも嬉しかった。

ついついらしくもなく、本来の自分の能力の限界を越えて頑張っ
てしまおうかな、なんて気がおきる。

「うん……じゃあ解いてみよう……」

夢に向かって努力しようと私が前向きになれたのも、ひよつとすると今のこの環境のおかげかもしれないかった。

高いビルの向こうに夕陽が姿を消し、教室の窓から見える風景は、瞬きする間にも黒く塗り潰されていく。代わりに輝き始めるのは色とりどりのネオン。

それさえ霞むほどに明々と電気が付いた夜の教室で、私はこれまでで一番自分らしく、学校生活をおくっていた。

「ふーん。それじゃあ、圧倒的に男子の方が多いんだ……？」

「うん。毎日全員が揃って訳じゃないけど、少なくとも女子の三倍はいるかな……」

「そうか……」

夕方のいつもの時間。お弁当屋の裏で猫たちにご飯をあげながら、蒼ちゃんが私の学校について聞いてきた。

高校には進学しないと言い張っている弟さんに、私の通う夜間高校を勧めてみようかと考えているらしい。

「あまり人と関わりあいたくないって言うんだ……通信制の高校って手もあるけど、それじゃあいつ、ほんとに滅多に家から出ない事になっちゃうからなあ……」

しゃがんだ格好のまま私を見上げる蒼ちゃんは、しっかりとお兄ちゃんの顔をしていた。

「今は嫌々でも……友だちと結んだ絆が、いつかあいつを助けられる日が来る……きっと来ると思うんだ……友だちってさ……いろいろ煩わしい事はあっても決して不必要なものではないよね……」

一言一言ゆっくりと語られる言葉は、まるで私に向かって発されているもののように、思わずコツクリと頷き返す。

パツと輝くように、蒼ちゃんが笑顔になった。

「千紗ちゃんは素直だ。あいつも……弟も……ほんととはとっても素直な奴なんだ。……うん、決めた。ちよつと話をしてみよう……」

すつくと立ち上がった蒼ちゃんは、私に向かって右手を差し出す。

「あいつが入学するって決めたら、その時はどうぞよろしく。先輩」

「うん」

私も手を出して、蒼ちゃんの手をそつと握る。ギュツと力強く握り返されてドキリとした。

私に向けられる蒼ちゃんの笑顔は、どうしたって固く閉ざそうとしている私の記憶の蓋をずらしてしまう。

（紅君……）

あの頃、確かに自分に向かって差し出されていた小さな優しい手を、まざまざと思い出した。

（今どうしてるんだろう？……元気にしてるかな……？）

蒼ちゃんはいつだって私の事を真正面から見てくれているのに、私はすぐに違う人の事を考えてしまう。

何を聞いても何を目にしても、思考の一番深いところではいつも紅君の事だけを考えている。

そんな自分が申し訳なくて、私はぎこちなく目を逸らした。

まるで私の心の葛藤が分かったかのように、蒼ちゃんも握ってい

た手を放す。

「じゃあ、また明日。学校……気をつけて行っておいでね、千紗ちゃん」

「うん」

ごく短い返事しか返さない私にも、それでもいつも笑顔で接してくれる優しい人。

——優しい、優しい人。

私が抱えている複雑な思いを、全部察してくれているわけではないだろうが、何も聞かず何も言わず、ただホッとするような優しい時間だけを惜しみなく与えてくれる。

（ごめん蒼ちゃん……ありがとう……）

その居心地の良さに自分が甘え切っているという事だけは、私にだって分かった。

朝早くの仕込みも、厨房での製造も、店頭での販売も、叔母たちの小さなお弁当屋では叔母と叔父と私の三人で行なっている。

昼間の配達的时间だけバイトの人を雇っていたが、その日は体調が悪いという事で、急に来れなくなってしまった。

「ごめん、千紗。今日はもう新しい注文は受けないけど、それだけはずい分前から予約をもらってたやつだから……」

「はい。大丈夫……すぐ近くだし、急いで行って来て店番代わるから……」

「そんな事にしなくていいから、気をつけて行くんだよ？」

まるで小さな子供にお遣いを頼むかのように、私を気にして何度も何度も念を押す叔母は、私が交通事故にあってから車が恐くなつた事も、配達先へと続く大通りをいつもは決して歩いたりしない事も、みんな知っている。

だから心配して、必要以上に声をかけてくれる。

「うん。大丈夫……」

まるで自分自身に言い聞かせるかのようにもう一度繰り返して、私は両手に大きなビニール袋を下げて店舗を出た。

行き先は店からそう遠くない大学の研究室だった。

小さな町には不似合いなくらいに大きな総合大学は、周囲をぐるりと樹木に囲まれている。

正門へと続く大通りにも左右には大きな街路樹が植樹されていて、木陰が多い心地よい場所ではあったが、そこへと向かう大通りが私はどうにも苦手だった。

たくさん車がひっきりなしに通る道路を、耳を塞いで駆け抜けたいくらいの気持ちで早足で歩く。

（ここはあの場所じゃない！違う！違う！）

必死に心の中で唱えながら、逃げ込むように大学の構内に入った。せわしく車が行き来していた往来とはまるで別世界のように、ここでは時間がゆっくりと流れていた。

煉瓦が敷き詰められた舗道や緑の芝生を歩く学生たちは、みんな輝いて見える。

楽しそうに数人で談笑している女の人たちも、一直線に目的地に向かっている男の人も、私といくつも違わないはずなのにずい分大人のように感じた。自分がなんだかひどく場違いな所に迷い込んでしまったような気がして、不安になる。

（早くこれを届けて帰ろう……）

場違いなのは年齢のせいだろうか。それとも眩しすぎるくらい太陽の下で、楽しそうに笑う女子大生には、やっぱり自分はなれそうにないように思えるからだろうか。

四年の高校生活を終えるまでには答えを見つけなければならぬ。苦しい問いを、必死に考えながら早足で歩いていたら、よく見慣れた背中を見つけた。

周りの人とはなんだか違うスピードで、周りに目を向けたり空を見上げたりしながら建物に向かって歩いている背中。

（蒼ちゃん……！）

今すぐ駆け寄って、不安な気持ちを拭い去ってしまいたいと強く感じて、そして初めて気が付いた。

蒼ちゃんだってこの大学に通う大学生なのに、私は彼に対して気後れを感じた事などなかった。

初めから懐っこく話しかけてくれたからだろうか。彼独特の優しく穏やかな雰囲気のせいだろうか。それとも他にまだ理由があるのだろうか。

考え込んだおかげで走り出すのが遅れ、彼の名前を声に出して呼ばないで良かったと、次の瞬間心から思った。

「蒼之！」

建物から出て来た女の人が蒼ちゃんに向かって手を振った。

「やあ」

蒼ちゃんも手を上げて返事をして、私の胸はドキリと跳ね上がる。

（な……に……？）

蒼ちゃんに歩み寄った女の人は笑顔で何かを話して、まるで当たり前のように彼の隣に並ぶ。蒼ちゃんの腕に腕を絡めて、少し寄せられた綺麗な巻き髪の手を私はぼんやりと見ていた。

いつの間にか足は止まっていた。ほんのさっきまで重さなどまるで感じなかった両手のお弁当が、腕が痛くなるほどに重かった。

慌ててエプロンを外して店から出て来たままの普段着。履き慣れた古い靴。軽く梳かして後ろで一つに縛っただけの髪。もちろん化粧っけなんてまるでない素顔。

これまで気にとめた事もなかった自分の何もかもが、やけに野暮ったく感じる。

蒼ちゃんに寄り添って去って行く女の人の、綺麗な笑顔と綺麗な服装が、胸に痛くてたまらなかった。

（早く！早く！）

さっきまでよりなおさら強く、ここから逃げ出さなくてはならない。一向に歩き出す気配のない自分の足を叱り飛ばすように、心の中で繰り返した。

（早く帰ろう！配達を済ませて、急いでここから帰ろう！）
蒼ちゃんと女の人が向かっている入り口とは別の入り口に向かって、私は駆け出した。

指定された部屋に辿り着くまでには結構時間がかかった。大学内の建物は学部や学科によっていくつにも分かれていて、案内板も受け付けも全く利用せずに探し回った結果、思っていた以上に遅くなった。

叔母が早い時間に送り出してくれたおかげで、指定時間には遅れなかった事に感謝する。

「お待たせしました」

頭を下げながら入った部屋の中にいた四、五人の中に、さつき蒼ちゃんと一緒だった女の人がいて愕然とする。

蒼ちゃんはいなかった事に少しだけホッとしながら、私は持つて来たお弁当を部屋の中央に置かれた大きな机に載せた。

「ごくろうさま。ありがとう」

ニコリとせずと言った女の方は、さつきとはなんだか様子が違った。綺麗に整えられた眉を寄せて不機嫌そうな顔で煙草を吸っているからだろうか。一瞬別人かもと思う。だけど――。

「まったくイライラするわあの男」

「あの男って？」

「蒼之よ蒼之！決まってるじゃない！」

周りにいる女の人たちとの会話の中に、彼の名前が出て来たのでやっぱりさつきの人に間違いない。

「親は医者だし、本人も医学部だし……今のうちにものにしようと思ったのに、全然ダメ……！」

「ハハハッ、そりゃあんたがタイプじゃなかったんじゃない？」

「冗談じゃないわよ！こっちはレベル落としてやってんのよ！まあ背は高いし、元の顔はいいから磨けばどうにかなるかもしれないけ

ど、今のままじゃただのダサ男じゃない……」

「ハハッ言えてる」

「なに……？あんたが変身させてやるんじゃないの？そう言っ
てたじゃない」

「だから全然ダメなんだってば！いくら言っただってヘラヘラ笑って
るだけで、私の話、聞いてんだか、聞いてないんだか、まったく分
かんないのよ！」

「ハハッ、そりゃダメだわ」

「くそっ！腹が立つ……！」

頭がぼうつとする。耳の奥でガンガン鳴り響いている耳鳴りを誰
か止めて欲しい。そうじゃなければ、彼女たちの会話がこれ以上聞
こえないようにして欲しい。

「もうやめちゃえば？」

「は？半年も時間かけたのに？冗談じゃないわよ！やめるんだっ
たらたっぷり貢がせてからよ！」

「えー……？美奈子って鬼！」

「ほんと、ほんと」

キヤアキヤアと笑っている周りの人たちは何が面白いんだろう。

私には分からない。分かるはずがない。

ギリギリと締め上げられるように胸が痛くて痛くて、受け取った
代金をしまつてすぐに部屋を出て行こうと思うのに、また足が動か
ない。一歩も動けない。

「ま、ちよつと不幸な話をでっち上げれば、すぐに同情して金でも
物でも出すって事は分かっているからね」

バアアアンと大きな音が鳴って、部屋にいた全ての人が動きを止
めた。みんな呆気にとられたように音がした方に視線を向ける。

私だつて何が起きたのかと驚いた。ビリビリと痺れるほどに自分
の右手が痛んでるのでなければ、こぶしで力いっぱい机を殴りつけ
たのが自分だとは分からなかった。

「もうやめて……」

何がおきているのかも分からないままに、私は搾り出すような声で呟いていた。

ポロポロと涙を零しながら、俯いていた。

「何も知らないくせにそんなふうに言わないで……」

ザワツと彼女たちが動き出す気配がする。顔を下げているから見えないけれど、私に向けられた視線が、突き刺すように鋭くなっているのだけはよく分かる。

「あんた誰？何言ってるの？」

いかにも不機嫌そうな声は、あの人だ。笑顔で蒼ちゃんの名前を呼んだくせに、陰では悪し様に罵っていた彼女。

まだズキズキと痛む右手をギュツと握り締める。悲鳴が漏れるほどに体を痛めつけていないと、感情が高ぶった時に自分が何を言いつ出すか、何をし出すか、私には本当に予想もつかない。小さな頃から、いつもいつもそうだった。

「蒼ちゃんを傷付けないで……」

そうでなくてもきつとたくさんの痛みを抱えて。それでも笑って笑って。いつだって懸命に頑張ってる蒼ちゃんを――。

（傷付ける人は許せない！私が許さない！）

かつて母の無事を祈って澤井にだって向かって行った時のように、決意を込めて私は顔を上げた。

「何？蒼之の知り合いなの？妹はいなかったよね……まさか彼女？」

驚いたよりはバカにした感の強い言葉に向かって、こぶしを振り上げようとした時、背後から抱き締められた。

「いや……僕の好きな子だよ……」

全身の毛を逆立てた猫のようだった私の体から、一気に力が抜けた。頭の上から聞こえた優しい穏やかな声が、怒りでガチガチに凝り固まっていた私の心を解かした。

（蒼ちゃん！）

感情のままに手を上げようとしていた自分が恥ずかしくて、この場から逃げてしまいたいのに。私が知らない場所での蒼ちゃんなん

て、もうこれ以上見たくはないのに。

動けない。抱き締められた腕の中から一步も動けない。

好きな子　だと私の事を言い表してくれた蒼ちゃんに背を向けて、その言葉をなかった事になんてしたくない。

「騒がせちゃってごめん……この子は連れて帰るから……」

自分の背中に隠すようにして、蒼ちゃんは私を部屋の外に押し出す。自分自身も部屋から出て扉を締めながら、中にいる人たちに向かって笑った。

「梁瀬さん……医者って言うてもうちは本当に貧乏なんで、僕はご希望通りに貢げるかどうか分からないな……今までどおり、困った事があつたらいつでも相談には乗るけど……？」

「そんなもん、いらないわよ！」

ヒステリックな叫びにもキチンと頭を下げ、蒼ちゃんは扉を閉めた。

それから傍らに立つ私の両肩に手を置いて、じつと瞳を覗き込む。分厚い眼鏡の奥の綺麗な瞳は、悲しそうなんかじゃなく、辛そうなんかじゃなく、いつもと同じ優しいままだった。

「僕は傷つかないよ……誰に何を言われたって、何をされたって傷ついたりなんかしない……それが君からじゃなけりや」

ドキンと胸が跳ねた。

私の手を引いて蒼ちゃんは歩き出す。無言のままずっと歩き続けて、建物から外に出、あまり人のいない芝生の真ん中の大きな木の下まで来て、ようやく止まってくれた。

「千紗ちゃん……今までと同じでいいから、これからも僕の傍にいてよ……ずっといてよ……」

後ろ姿のまま告げられた言葉に胸が逸る。どうしようもなくドキドキと心臓が脈打つ。

「私……」

即座に頭に浮かんだ紅君の笑顔に首を振るべきなのか。繋いだままの手にギュッと力を込めた蒼ちゃんの手を振り解くべきなのか。

分からなくなる。

一生胸に抱えて生きて行く事を、これまで一瞬だって迷った事になかった紅君との約束だったのに――。

「でも私は……！」

やっぱり捨てられはしないと。どんなにバカみたいな選択でも、そんな可能性は1パーセントもなくても、たった一つの約束を捨てられないと告げかけた時、蒼ちゃんが振り向いた。

繋いでいた私の手を引き寄せて、今度は正面から私を抱き締めた。「うん、分かってる。きつと千紗ちゃんには僕より大切な何かがあるんだろうつて事はちゃんと分かってる……だから……！」

ギュツと息も出来ないくらいに強く強く抱きすくめられた。

「傍にいてくれるだけでいい……僕が邪魔になったら、いつでも言うってくれていいから……！」

「そんなズルイ事出来ない！出来るわけないよ！」

「いいから！僕はそれでもいいから……頼む……」

私の頭に頬を寄せるように、俯いた蒼ちゃんの声が震えている。

ひよっとしたら泣いているんじゃないかと思つて、私は恐る恐る呼びかけた。

「蒼ちゃん……？」

抱き締める腕を緩めて、何？と私に向けられた顔はいつもの笑顔だった。蒼ちゃんの眩しいくらいの笑顔。

――でも瞳だけが揺れている。悲しみか不安か。きつと笑顔とは間逆の感情で揺れている。

私にはその事が分かってた。出会つてすぐの時から、本当はずつとずっと分かってた。

「蒼ちゃん！」

たまらず腕を差し伸べた。ずっとそうしたくて。でも出来なくて。いつか告げる事が出来たらどんなにいいだろうと思つていた言葉を、私はついに口にした。

「我慢しないでいいよ。辛かったら、悲しかったら泣いていいよ！」

さつき彼が私を抱き締めていたのと変わらないくらいの強さで、彼の体を抱き締めたら、すぐにまた抱き返された。

「千紗……！」

震える声が嗚咽に変わったのかどうかは分からない。どちらがどちらを抱き締めているとも言えないような体勢のまま、私もいつの間にか蒼ちゃんにすがって泣いていた。

——蒼ちゃんはああ言ってくれたけど、やっぱり紅君との約束はもう忘れようと。紅君を思って泣くのはもうこれが最後にしようと。心して、私は蒼ちゃんの胸で泣いた。

第二章 4

今までと同じでいいから…… という蒼ちゃんの言葉通り、あんな事があつたというのに、私たちの関係は少しも変わらなかった。毎日ほんの短い時間を、お弁当屋の裏の狭い場所で共に過ごすだけの関係。

あの日——蒼ちゃんに向かって夢中で手を差し伸べた瞬間、私の中では確かに何かが変わったと思ったのに、それがなんだったのかさえ今はあやふやだ。

泣きながら蒼ちゃんを抱き締めた私の想いを、彼がどんなふうに解釈したのか。それだって結局は彼にしか分からない。

けれどこれまでと同じように向けられる笑顔が、穏やかに過ごす二人だけの時間が、私にとって大切である事には変わりなく、失くさずに済んで良かったというのが、正直、一番の本音だった。

「千紗ちゃん……ばーっとしていると学校遅れるよ……？」

猫と戯れる蒼ちゃんの姿を見ながらお弁当を食べる夕暮れ。

古びた椅子に腰掛けた私は、いつの間にか考える事に没頭しすぎて、手の方がすっかり止まってしまっていた。優しく指摘されて、慌てて再び箸を動かし始める。

「そつえば……決まったから、弟が千紗ちゃんと同じ高校に行くって事……」

「えっ、そうなの？」

「うん」

勧めてみようという蒼ちゃんの決意は知っていたが、その後どうなったのかは聞いていなかったの、ちょっと驚いた。

「四月からは千紗ちゃんの後輩になるよ……よろしくね」

「うん」

今と同じセリフを言った蒼ちゃんと、以前固い握手を交わした時から、私の心はとつくに決まっている。

（蒼ちゃんの弟は私が守る……蒼ちゃんがずっとそうして来たように、学校の中では私が守る！）

壮大な決意を込めて、笑顔の蒼ちゃんに向かって真剣に頷く私は、それが自分にとってどんなに難しい事なのかなんて、まるで分かっていなかった。

「ごめん千紗……本当に悪いんだけど……これを大学の事務室まで届けてくれるかい？」

お昼時でいつもより客足の多い正午過ぎ。

厨房の中でお弁当を作る作業にまわっていた私に、店頭に立っていた叔母はわざわざ近くまでやって来て、ビニール袋を持ち上げて見せながら尋ねた。

「えっ？……今？」

まだこれから作らなければならない注文の山と、私たちの会話には耳だけを傾けながら黙々と調理を続けている叔父の姿に、思わず目を向ける。

叔母も同じように狭い厨房の中を見まわしながら、困ったように眉根を寄せた。

「バイトの山本君に電話してるんだけど繋がらないんだよ……繋がったとしても、時間ギリギリ間に合うかどうかってぐらい、先にたくさん配達頼んじゃってるしね……」

はああつと叔母は大きなため息をついた。

「注文間違いだってさ……こっちは確かにから揚げ弁当四つ・とかつ弁当三つって聞いたのに、逆だったって言うんだ……どうしても取り替えてくれて事だから、悪いんだけど……」

叔母が言い終わる前に、叔父が口を開いた。

「ここはいいから行って来てくれ、千紗」

「うん……」

私は急いでエプロンを外した。中から現われたいつもの普段着に、

この間大学に行った時の気後れするような気持ちを思い出して、ほんの少し胸が痛む。

けれど後ろで束ねていた髪を解いて、それだけで後は気にしない事にした。

「じゃあ、急いで行ってくるから！」

慌てて走り出した背中に、叔母の声がかかった。

「急がなくていいから！気をつけて！」

こんな時でも私の身の安全と、大通りが苦手な気持ちの方を優先してくれる叔母の優しさがありがたかった。

（でも……時間をかけてゆつくりと歩くより、一気に走った方がまだいいかもしれない……！）

片手に下げたお弁当のビニール袋が傾いてしまわない程度の速さで駆けながら、私はそんな事を思った。

ゆつくりと時間を過ごしているから、余計な事を考える。思い出したくない事を思い出す。だから真っ直ぐに前だけを見て、さつさと目的地についてしまおう。

そう思っていたのに、大学の正門が間近に迫った辺りで、隣接する公園に目を向けたら、思わず足が止まってしまった。

桜の開花にはまだ早い三月の半ば。

公園に植えられた桜の木は寒そうな茶色い幹だけで、まだ蕾の出る気配さえないと思っていたのに、中にたった一本だけ、ずいぶんと気の早い木があった。

ポツリポツリと開き始めた桜の花の小さな集まりが、まるで雪が積もったかのように細い枝のあちこちに乗っている。

その木の下に、花を見上げて立ち尽くす若い男の人がいた。

（さくら……）

どこからか飛んで来た花びらを追いかけて、遅咲きの一本を探し出し、紅君と木の下に寝転んで花びらの落ちて来る様子を眺めたあの春から、桜の木は私にとって特別な木になった。

風に吹かれて花びらが舞い散る頃になると、懐かしくて、悲しく

て、切なくて、見ている事さえ辛くなる。

さくらはこうやって見上げるんだ

紅君の声がどうしようもなく耳に甦って、思い出の中に引きこもってしまいたくなる。

（紅君……）

繰り返し繰り返し頭の中で思い出す面影を、私はいつも無意識に桜の木の下にも探していたから、幻を見たのかと思った。

もう一度会えた！ と大喜びした途端目が覚める夢のように、本当はそこには誰もいないのに、私だけにその人が見えたのかと思っただけ――。

一本だけ花を付けた桜の下にたたずむ背の高い人影は、何度目をこすっても消えない。

（そんなはずない……そんなはずない……！）

心の中で否定すればするほど、紅君に似ているように思えてならないその人が、ゆっくりとこちらに目を向けた。

分厚い眼鏡の向こうに時々見える蒼ちゃんの目によく似た澄んだ瞳が、真っ直ぐに私の方を見た。

風に揺れる薄い色の髪も、ちよつと小首を傾げて私を見る癖も、きりつと引き結んだ口元も、その人は何もかもが紅君にしか見えなかった。

（紅君！）

息をのんで両手で口を覆った私から、でも次の瞬間、彼は目を逸らした。

こつちを見た時も、目を逸らした時も、行動にも表情にも何もおかしいところはない。ただ何気なく目を向け、それが知らない相手だったので、特に何の反応もせず目を逸らす。これが初対面の相手であるならば、ごく当たり前の態度だ。

しかし彼が紅君だと思えて仕方ない私にとっては、彼の取った行動は雷に打たれたかのように大きな衝撃だった。

（どうして……？）

なぜだろう。彼が紅君である事に、私は全く疑いを持っていない。
——私が紅君を間違えるはずない。

その思いはとてつもなく大きく強い。私の中でも最も自信を持つて、そうに違いないと言い切れる部分だ。

でも、だったら、なぜ彼は私から顔を逸らしたのだろう。

考える事が恐くて、答えを導き出す事が辛くて、私はいつの間にか歩き始めていた。

紅君に違いないと——そう思った人に背を向けて、本来の目的地である大学に向かって歩き始めていた。

ヨロヨロとした足取りはあつという間に速くなり、駆け足へと変化して行く。鋭い刃物で斬りつけられたかのように痛む胸をこらえて、私は大学の敷地内に逃げ込むように駆け込んだ。

（紅君！……紅君！）

必死になつて探せば見つける事が出来たはずの彼の居場所を、なぜ自分は探そうとしなかったのか。——その本当の理由に気がついた。

自分のせいで紅君をひどい目にあわせて、申し訳なかったという思いも確かにある。

会わせる顔が無かつたという事も。

でも何よりも一番に、おそらく本気で彼と会う事を回避しようとした理由は、きっと、こんなふうに紅君に背を向けられなくなつたからだ。

いつだって私に笑顔を向けてくれていた紅君の冷たい表情なんて、私は見たくなかつた。だから逃げた。あの事件をきっかけに自分と紅君の関係が変わってしまうのが恐くて逃げた。

（だからこれは……きつと罰だ……！）

私に与えられた罰だ。まるで知らない相手のように、私の事を見た紅君の反応は、私が最も恐れていたもの——そのままなのだから。無我夢中で走る私を、呼び止める声があつた。

「あれっ？千紗ちゃん？」

紅君の反応一つで、まるで世界の何もかもに背を向けられたかのようにだった私の心の中に、ポツと小さな明かりが灯った。

「蒼ちゃん……！」

大学の建物の中から出て来たばかりの蒼ちゃんは、笑いながら私に歩み寄って来る。

「今日も配達に来たの？ だったら僕も頼めばよかった」

子供の頃の紅君によく似た満面の笑顔。 たった今、永遠に失ってしまったような気持ちでいたその笑顔に、引き寄せられるように私は立ち止まった。

「蒼ちゃん……」

「なに？」

呼べば優しい声で返事されるから、もう一度呼ぶ。

「蒼ちゃん」

「ん？」

何度呼んでも、蒼ちゃんの笑顔は崩れない。私を見下ろす優しい目も変わらない。これが現実なんだと、私が今生きている現実の世界なんだと感じて、心からホッとした。

（きつと……さくらの木の下に幻を見たんだ……！）

いつかはそうなって欲しいと、でもそうなって欲しくないと、心の中にずつと抱えていた想いが、私に優しく悲しい幻を見せた。

（会いたい……でも会いたくない……！ せめて謝りたい……その思いは本当なのに、怖い……）

心の中で複雑に絡み合った感情が、胸に痛くて痛くて。思わず涙が溢れ出す。

「どうしたの、千紗ちゃん！」

蒼ちゃんは訳もわからないまま、ちょっと困ったように私の頭を撫でる。その手に自分がいつも甘えているという事は分かっている。分かり過ぎるほどに分かっているけれど、ポロポロと零れ落ちた涙は止まらなかった。

一歩だけ蒼ちゃんに近付いて、そっとシャツの裾をつかむ。それ

以上近付くには、私の気持ちは矛盾だらけで、蒼ちゃんに申し訳ない。あまりにも申し訳ない。

そんな思いさえ分かってきているかのように、蒼ちゃんはただ優しく、私の頭を撫でてくれた。それ以上もう訳は聞かずに、ただ撫でてくれた。

事務室にお弁当を届けて、間違って渡してしまった方を返してもらい、私は急いで大学を後にした。

ちようどお昼を食べに外に出る予定だったという蒼ちゃんと一緒に歩く。

「良かったら……これ、いる？」

回収したお弁当を持ち上げて見せた私に、蒼ちゃんはニツコリ微笑んだ。

「ありがたく……って言いたいところなんだけど、今日はこれから弟と待ち合わせるんだよ……ごめん」

私は慌てて蒼ちゃんから一步飛び退いた。

「私こそごめんなさい！蒼ちゃん、急いでたんじゃないの？」

パツと光が射すように、蒼ちゃんが満面の笑顔になった。

「いいや。約束の時間にはまだ早いから……とは言え、時間なんてあんまり関係ないような人間なんだけどね、うちの弟は……」

「……………」

よく意味がわからなくて首を傾げた私の顔を見て、蒼ちゃんも一度笑った。

「会えば分かるよ……せつかくだからちよつと会って……急いでるのにごめんね」

「うつん。私こそごめんなさい……」

謝りあつてばかりの自分たちがちよつぴりおかしかった。

蒼ちゃんもそう思ったのだろうが、笑い含みの声で話題を変える。「弟はさ……小学生の頃に事故に遭ったって言っただろ？その時に、

それまでの記憶を無くしちゃったんだ……だから過去は関係ない、未来の事も考えない、今ここにいる自分だけが全てっていう変わった奴なんだよ……自分の弟ながら、格好いいなとも、強いなとも思う。……って言っても事故までは別々に住んでたから、あいつが元々そういう奴だったのか、事故に遭ってから変わったのか、僕にも分からないんだけどね……」

カチリとどこかで、バラバラだったジグゾーパズルのピースがみ合うような音がした。

事故。無くした記憶。別々に住んでいた弟。

蒼ちゃんの紡ぎ出した言葉が、私の頭の中で他の人には到底予想出来ない形に結び付いて行く。

（まさか……そんな……）

そんな事なんてあるはずないと思う一方で、真っ直ぐに進行方向に目を向け直した蒼ちゃんがどうやら大学横の公園に向かっていらしいと知り、どうしようもなく鼓動が早くなる。

（そんなはずない！そんなはずないよね……？）

泣きたいくらいの期待と不安に、蒼ちゃんに何も言葉を返せないまま、私がただもう一度彼のシャツの裾をすがるようにギュツとつかんだ瞬間、蒼ちゃんが片手を高く上げて朗らかな声を出した。

「紅也！お待たせ」

（紅也……！）

やはりと思う気持ちと、まさかと思う気持ちが混ざり合ったまま、私は蒼ちゃんの背中に半分隠れた位置から視線を上げた。

一本だけ花を付けた桜の木の下に、やっぱり彼はさっきと同じように立っていた。

（紅君！やっぱりそうだったんだ……）

そうに違いないと思った私の予感に狂いはなかった。会いたくて会えなくて。ずっと私の心から消える事は無かった人が確かにそこにいた。

無事だったと聞いて、少しずつ回復に向かってしていると教えてもら

って、それでも心配でたまらなかった心が、彼が元気にそこに立っている姿を見て、やっと救われていくのを感じる。

だけどさつき蒼ちゃんに聞かされた それまでの記憶を無くしたという話が、紅君の身に起こった事なんだと改めて思い返され、ヒヤリと背筋が冷えた。

（じゃあ、全部覚えてないの……？「希望の家」の事も、みんなの事も、園長先生も、私に聞かせてくれたお母さんの話も、学校の事も……）

いつだってみんなの中心にいて、光り輝くように笑っていた紅君。私の心の中に今でもずっと住んでいる少年は、本当にもう二度と会えないに幻になってしまった。そして――。

（私の事も……？あの約束も……覚えてない……？）

叶うはずなんかないって分かってたのに。あの事故に遭った日から、もう絶対に叶わないって何度も何度も自分自身に言い聞かせたのに。

それでもどうしても諦める事の出来なかった私にとってのたった一つの約束が、碎けて消えた。

「兄さん……！」

私の良く知る声とよく似た響きの声が蒼ちゃんを呼ぶから、自然と蒼ちゃんのシャツを握っていた手を離してしまう。

だらんと力なく落ちた手を、私はギュッと握りこぶしに変えた。

こちらを見る紅君の目に映っているのは蒼ちゃんの姿ばかりだ。

やっぱり私を見ても、彼は全然表情を変えない。

「紅也。ちょうど千紗ちゃんが大学に来たから、紹介しとくよ。長岡千紗さんです。四月からはお前の先輩。千紗ちゃん……こっちは俺の弟、片桐紅也です」

「初めまして」

差し出された手は、私の良く知るそれとは比べ物にならないくらい大きかった。ブルブルと震えだしそうな自分の手を必死に普通に動かして、私は軽く紅君と握手した。

「初めまして……」

本当は初めてなんかじゃないと叫ぶ自分の心を押し殺して、私は彼の顔を見上げた。

「よろしくね千紗ちゃん」

何も言葉を発さない紅君に代わって、蒼ちゃんが私に笑いかける。いつも通りの笑顔の蒼ちゃんとはまるで正反対に、紅君は笑わなかった。何を映しているのか私には分からないような不思議な色の瞳で、私の事をただじっと見ていた。

（紅君……？）

思わず呼びかけてしまいそうになる自分を、必死に抑える。

（どうしたの……？）

彼が私の事を忘れてしまっているという事も、蒼ちゃんが驚くという事も忘れて、本当は問いかけてしまいたかった。

紅君が笑わない。いつでも誰にでも、輝くような笑顔で笑いかけていた紅君が笑っていない。

それが私に対してだけだったらしい。たとえ記憶は失っても心のどこかでわだかまりを残しているのかもしれない私に対してだけだったら、それはそれで構わなかった。だけど――。

「紅也……笑顔！笑顔！父さんがいつも言ってるだろ……？」

「……………！」

ハッとしたように紅君は私の手を離し、私と蒼ちゃんから二、三歩後退った。

蒼ちゃんはまるでそんな紅君の姿を私の視界から隠すように間に入り、ニツコリと笑った。――そう、きっと紅君の分も笑った。

「俺と違って照れ屋な弟でごめんね……でも俺よりずっといい男でしょ？」

「兄さん！」

それまで全然表情の変わらなかった紅君が、ちよつと怒ったような照れたような顔で、蒼ちゃんを呼んだ。

そんな弟の様子を振り返って、蒼ちゃんはそれはそれは嬉しそう

に笑う。

「それにとつてもいい奴なんだよ……」

ほのかに赤くなってブイツとそっぱを向いてしまった紅君を確認してから、私は蒼ちゃんに頷いた。

それはよく知っていると——決して口に出しては言えない言葉を伝えるかのように何度も何度も頷いた。

「ちよつと左足が悪いけど、日常生活には支障ないから……なんなら学校の行き帰りのボディガードにしてもいいよ？」

「兄さん！」

咎めるような紅君の声と同時に、ドキリとどうしようもなく心臓が跳ねて、私はもうこれ以上、自分が普通の顔を作っている事が出来そうにないと気がついた。

（足……？事故のせい……？）

苦しい。息をするのが苦しい。込み上げてこようとする涙をこらえる事がもうどうにも苦しくて、私は蒼ちゃんに頭を下げた。

「ごめんね、蒼ちゃん……私……」

蒼ちゃんはすぐに、私の頭をポンと叩いた。

「うん。急いでたのにごめん。紅也と会ってくれてありがとう」

「うん……」

もう一度顔を上げて蒼ちゃんの顔を見る事が出来なくて、私は俯いたまま彼に背中を向けた。

本当はもう一度見たい——だけど見たくない紅君の事も、振り返らなかつた。

「さよなら……」

逃げるように走り出した私に、蒼ちゃんが叫んだ。

「また後で！」

人の心の機微に聡い蒼ちゃんの事だから、何か気がついたかもしれない。変に思ったかもしれない。

でもそれを上手く誤魔化す心の余裕なんて、私にはなかつた。

（紅君が笑ってない……！そして……足が……！）

どうしても我慢できなくて、公園を走り出て、少し進んだ繁みの陰に隠れるように座り込んだ。膝を抱えてその上に顔を突っ伏して、なりふり構わずに声を押し殺して泣いた。

（紅君……紅君……紅君！）

彼から笑顔を奪ったのは私だ。あんなに大好きで、遠くから見ているだけで幸せな気持ちになれたあの笑顔を壊してしまったのは私だ。

いつも見てた。いつもいつも見てた。誰よりも早く走って、軽やかに飛ぶ彼の姿を。その彼の足を不自由にしてしまったのだって私だ。

（ごめんなさい！紅君……ごめんなさい！）

心の中で叫んでいたのか、実際に声に出していたのか、それすら分からないような状態になっていた私は、背後に誰かが近付いて来ていた事にまるで気がつかなかった。

ふいに肩をつかまれて振り返る。涙に濡れた顔のまま振り返って、間近に心配そうに私を見つめる綺麗な瞳を見た。

一瞬、蒼ちゃんかと思った。

でも違った。蒼ちゃんの目をいつも隠している大きな眼鏡が、私たちの間には無かった。

「大丈夫……？」

囁くように尋ねられて、いつそう涙が零れる。軽く息を弾ませている彼は、私を追いかけて来てくれたんだろうか。確か左足が悪いと蒼ちゃんが言ってたのに――。

「泣いてるんじゃないかと思って……きつと人前じゃぎりぎりまで我慢して、一人になったら泣いてるんじゃないかと思って……ごめん……なんか変な事言ってるって自分でも分かってるんだけど……兄さんを差し置いて俺が出る幕じゃないって事も分かってるんだけど……」

私を見ても顔色一つ変えなかった紅君の瞳が揺れている。きつとよく理解出来ない自分の感情に戸惑っている。

私だって分からない。紅君に会う事をあんなに恐れていたのに。自分が彼から本当にいろんなものを奪ってしまったと知って、申し訳なくて、もう会わず顔さえないと思うのに。自分が自分で絶対に許せないのに。

それなのに一目見ただけで嬉しい。声を聞けた事がこんなに嬉しい。

「泣かないで……」

そんなに優しくしないで。私にはそんな価値なんか無い。紅君に優しくされる資格なんか、もうとうの昔になくした。

うつん。そんなもの本当は最初から持ってなかった。同級生の女の子たちが言っていたように、私には紅君の傍にいる資格なんか最初からなかった。

ただ紅君が望んでくれたから——いっしょにいようとってくれたから、短い夢を見たんだ。

（でもそれももうない……紅君は私を覚えていない……）

その事が悲しくて悲しくて、本当はずっと泣きたかった。だから――。

「ごめん……本当は泣いたっていいんだ。泣きたいんだったらちゃんと泣いた方がいいって、俺はそう思う。だけど、一人で泣いちゃダメだよ……」

私の両肩に手を載せた紅君が、私の目を覗き込むようにして笑った。小さな小さなどこか寂しそうな笑顔だった。

以前とちつとも変わらない紅君の考え方と、全く変わってしまった笑顔。そのどちらも胸に痛くて、痛くて。

私は自分で自分を抱き締めるようにして泣いた。

「千紗ちゃん？……紅也？」

私たちを探す蒼ちゃんの声が少しずつ近付いて来るのが、ホッと嬉しくて、ほんの少し苦しかった。

第三章 1

「大丈夫？千紗ちゃん……」

繁みの陰にうずくまる私と、その前に座り込んだ紅君の姿を見つけた蒼ちゃんは、ちよつと戸惑ったような声で問いかけて来た。

顔を上げて見なくても、ザツと紅君が立ち上がった気配がする。

まるで自分が今までいた場所を蒼ちゃんに譲るかのように、きつと二、三步私から遠退いた。

「ちよつと……なんて言つて突然走り出すなよ、紅也……驚くだろ？お前はいつも言葉が足りなさ過ぎ……何？千紗ちゃんがどうかしたの？」

「いや……俺にもよく分かんないけど……なんとなく……」

紅君は困ったようにそれつきり沈黙した。

蒼ちゃんが私の前にしゃがみ込んだ気配がする。

「どうした？……紅也がなんかした？」

私は慌てて顔を上げた。涙でぐちゃぐちゃの顔。でも蒼ちゃんにはいつも泣き顔ばかり見せているから、どんなにひどい顔でも呆れたりせずに真っ直ぐ見つめてくれると分かっている。

ほらやつぱり今も、優しい眼差しを注いでくれていた。

「うつん！違う！そんなんじゃない！」

言葉が足りないのは私のほうだ。いつだって、自分の気持ちの一番大まかな部分しか相手に伝える事が出来ない。

それなのに紅君は、昔からいつも不思議なくらいに私の気持ちを分かってくれていた。

そして今蒼ちゃんも、まるで全部理解したかのようにニッコリ笑つて、私の行動の何もかもを受け入れてしまう。

「送るよ、お店まで。でも……とか、ごめんなさいは無しね。僕が……それから紅也も千紗ちゃんが心配だから……！」

背後を振り返った蒼ちゃんにつられるように、私も紅君に目を向

けた。

私たちから目を逸らして、少し離れた木の下に所在投げに立っている背の高い男の子。

会えなかった四年の間に、ずい分背が伸びた。並んだらきつと、もう私なんて肩のあたりぐらいまでしかない。

自転車の後ろに座ってドキドキしながらしがみ付いていた背中も、まるで知らない人みたいに大きくて広い。

でも私たちの視線に気がついてこちらを向いた瞳を見たら、やっぱり懐かしくて嬉しくて泣きそうになった。

ちい　と彼だけが呼んでいた私の名前を呼んで、差し出されていた小さなてのひらが、今も目の前に見えるような気がする。

（紅君……）

また涙が浮かんできたので、慌てて顔を伏せた。蒼ちゃんの言葉どおり、心配そうに私の事を見下ろしてくれた紅君から、私は目を逸らした。

「帰ろう、千紗ちゃん」

今私に向かつて差し出されるのは、蒼ちゃんの手。いつだって優しく私の頭を撫でってくれる手。これが今の私が生きている現実だ。

でも私は、自分に向かつて差し伸べられた蒼ちゃんの手をつかむ事が出来なかった。

一瞬のためらいを蒼ちゃんがどんなふうに解釈したのかは分からない。執拗に迫ったりする人ではないから。すぐにもっと違う形で私を助けようと思えるような、聡い人だから――。

「早く帰らないと、おばさんたちのお店が大変だよ？」

腕時計の文字盤を私の目の前に示しながら、ちよつと悪戯っぽく笑う蒼ちゃんの笑顔に救われる。

どう考えてもおかしな私の態度も。こんな所で隠れるようにして泣いていた事も。差し出された蒼ちゃんの手を取らなかった事も。全てを無かった事にして、それでも私に笑いかけてくれる優しい人。どうしてこんな人が、私なんかの事を大切にしてくれるんだろ

う。

「うん」

涙を手の甲でぐいっと拭い、立ち上がった私の先に立って、蒼ちゃん は歩き始めた。

「早く行つて、帰って来ないと……今度は僕が午後の講義に間に合わなくなっちゃうからね……」

「蒼ちゃん！」

だったら私を送ったりなんかなくてもいいのに……と言おうとした私の頭の中なんて、まるで全部お見通しのように、蒼ちゃんはハハハッと朗らかに笑った。

「千紗ちゃんのおばさんの店でお弁当を買って、公園で食べるから大丈夫だよ。どっかに行くよりその方がいいって、紅也の顔に書いてあるんだから、千紗ちゃんは何なんにも気にしないで……」

「兄さん！」

私と同じように咎めるような口調で紅君も叫ぶから、蒼ちゃんは笑いながら今度は紅君に目を向ける。

「何？桜の下で食べたいんだろ？ちよつと気が早い花見だけど……いいよ。付き合つよ」

またクルリと私たちに背を向けて踊るように歩き出した背中を見ながら、紅君が呟いた。

「まったく兄さんは……」

言葉とは裏腹に嬉しそうな声。思わず隣に並んだ彼の顔を仰ぎ見る。

蒼ちゃんに負けにくいくらい優しい顔で、紅君は蒼ちゃんを見ていた。

「凄いや……」

「うん……」

四年ぶりに初めて、紅君との会話が成り立った。

きつと私たち二人は、その時同じ気持ちを感じていた。蒼ちゃんへの抱え切れないくらいの感謝の気持ち。

その思いを大切に抱き締めながら、私たちはやっと一步を踏み出した。

「千紗。ねえ千紗！一年生のあの格好いい子と知り合いだって本当？」

「絶対本当だよー。だって毎日一緒に学校来て、一緒に帰ってるもんねー」

「本当にっ？」

夕方からの教室。二年生に進級してもちつとも変わらないクラスメートの面々は、くっ付けた机から乗り出すようにして、三人が三人とも私に顔を近づけて来た。

四月を迎え、私の通う夜間高校にも少数の新生が入学して来た。入学式から早一週間。紅君の、どこにいてもみんなの視線を集めてしまふところは、やっぱり変わっていなかったらしい。新学期早々、すっかり話題の人になってしまっている。

「紹介して！ねえ私に紹介してっ？」

「待ちなよ美久……千紗の彼氏だったらどうするのさ」

「ええっ！そうなの！」

勝手に盛り上がって勝手に驚いている三人がおかしくて、私はクスクス笑い出した。

「違うよ……知ってる人の弟なの……」

紅君の事をそんなふう言い表して、笑っていられる自分が不思議だった。

「知ってる人って……はーん、そっちが千紗の彼氏か……じゃあ彼氏の弟？」

「ち、違っ！蒼ちゃんと私はそんなんじゃない……！」

なのに話が蒼ちゃんの事に及ぶと、大慌てで余計な事まで口走ってしまう。

「なるほどなるほど、彼氏は 蒼ちゃん って言うのか……で？弟

君は？」

「……………」

思わず頭を抱えて机に突っ伏した。

以前、 僕の好きな人 と蒼ちゃんが私の事を言い表してくれた事は確かだが、私はその言葉になんの答えも返していない。

蒼ちゃんは答えなんて求めなかった。ただ私に、 これまでと同じように一緒にいて欲しい と言った。

だから私はその言葉通り、何も変わらずただ毎日ほんの少しの間を彼の隣で過ごしている。

（これって何て言ったらいいんだろう……？ 蒼ちゃんが私の彼氏……？ それってなんだか違う気がする……）

急速に高鳴り始めた鼓動と、一気に顔に集まり始めた大量の血液に頭がクラクラする。

「名前は紅也君。片桐紅也君……でも本当に私と蒼ちゃんはそんなんじゃない……！」

真っ赤になっているだろう頬を押さえながら、必死で繰り返す私に、隣の席に座る美久ちゃんがちよつと真剣な顔で手を合わせた。

「ねえ……千紗が構わないんだったら本当に紹介して？ 弟君の方……」

（紅君を……？）

途端にどうしようもなく胸が痛んだ。

好きです。俺の彼女になって下さい！

紅君自身は忘れてしまった言葉を、私は今でもこんなにありありと覚えている。真剣な表情も。私に向かって深々と下げられた茶色い髪の毛も。私の手を包み込むように握り締めた小さな両手も。

忘れた事など無かった。

俺は絶対にちいを忘れないから！……きつと会いに来るから！ちいが寂しくなったらいつだって飛んで来るから……だから、いつか迎えに来てもいい？俺がこれから住む町に……いつか、ちいも連れて行ってしまってもいい？

小さな紅君があの時必死で私に伝えてくれた決意は、悲しい事に現実にはならなかった。私のせいで叶えられなかった。でも――。

好きです、紅君。大好きです

いっぱいいっぱいと思いであの時自分が口にした言葉と、彼が私に向けてくれた満面の笑顔。そして――。

うん。俺も大好き。ちい

私だけにくれた言葉はやっぱり捨てられない。どうしても捨てられない。

気がついたらガタンと椅子を鳴らして、私は立ち上がっていた。

「嫌だ……ダメ……」

（紅君を他の人に紹介するなんて……私には出来ない！）

言葉足らずで、自分の思いをそのまま口に出すばかりの私の言葉に、これまでも腹を立てた人は多い。

もし自分が平凡な普通の家庭に育っていたとしても、やっぱり親しい友人なんて出来なかったのじゃないかと思えるぐらい、私はいつもぶつきらばうな口のきき方しか出来ない。

なのに彼女は――昼間は美容室で働くおしゃれで可愛い美久ちゃん、表情を強張らせたりせず、プウツと頬を膨らませて、私の背中をバシンと叩いた。

「なによお、千紗のケチ！」

「ケ、ケチって……」

「さては……お兄ちゃんの方も、弟君の方も独り占めする気だな！」
後ろの席からも、その隣の席からも手が伸びてきて、背中をバシバシ叩かれる。

「いいなあ、千紗！」

「いいな、いいな！」

冗談交じりにかけられる言葉に、内心嬉しくて涙が浮かんで来そうになりながらも、私は必死で反論を始めた。

「違うわよ！そんなんじゃないんだから！」

「いいな――」

キャラキャラと笑う彼女たちの笑顔は、以前蒼ちゃんが言っていたように、本当に今の私を支えてくれるかけがえの無いものだった。

ネオンの輝く街を出発した列車は、五分も経たないうちに都会を離れ、闇に沈む静かな町へと私を連れ帰ってくれる。

片道十五分ほどの電車での通学時間を、私はこの春から紅君と一緒に過ごす事になった。

ボディーガードにでもしたら？ という蒼ちゃんの言葉を間に受けたわけではない。でも新学期の初日に偶然駅のホームで一緒になってから、自然と毎日同じ電車の同じ車両に乗っている。

とは言え、美久ちゃんたちが羨ましがっていたような何かがあるわけではなかった。

紅君と私は並んで座っているわけでもないし、特に言葉も交わさない。だけど私にとっては、ただそこに彼がいてくれるだけで安心出来る。ホッと落ち着く。

彼がどんなふうにいるのかはよく分からなかったが、私にとって紅君は、やっぱりそんな特別な存在だった。

「ねえねえ……いつもこの電車に乗ってるよね？高校生？」

真つ暗な窓に映る紅君の姿を、ただぼんやりと眺めていた私にふいに声をかけてくる人がいた。大学生くらいだろうか。ちよつと長い髪にピアスを付けた派手目の服装の男の人。

（嫌だな……）

返事を返さないでいると、ますます近付いて来る。

「街に毎日通ってんの？今度一緒に遊びに行かない？いい店知ってるよ？」

黙ったまま首を横に振ると、馴れ馴れしく隣に座ろうとした。

「えー？いいじゃない……？」

でも私の隣の席には、一瞬早く別の人が座った。肩が触れるくら

いすぐ近くに腰を下ろした茶色い髪を見て、心臓が止まるかと思った。

（紅君！）

紅君は私の背中後ろに腕をまわしてから、目の前に立つ男の人に視線を上げた。

「いくら誘ったって無駄ですよ？」

痛いくらいの力強さで、ぐっと紅君の近くに体ごと引き寄せられて、息が止まる。

「なんだよ……男連れかよ……」

舌を鳴らしながら去って行く男の人の何倍も何十倍も、私の方がずっとずっと驚いていた。

（紅君……？）

戸惑いながら見上げた紅君の顔は、私とごくごく近い位置にあった。困ったように眉根を寄せている、綺麗な顔。

「明日からしばらく電車の時間を変えたほうがいいな……もう一本遅くなっても平気？」

思わずコックリと頷いてから、私は慌てて首を横に振った。

「そんな……紅君が私に合わせる事は無いよ！私は一本遅らせるから、紅君は気にしないで……！」

「なんで？そっちこそ気にしないでいいよ。俺は兄さんに頼まれてるんだから……」

ズキリと胸が痛んで、舞い上がっていた心が一気に現実引き戻された。

（そっか……蒼ちゃんに頼まれたから助けてくれたんだ……）

嬉しいのに悲しい。自分でもよく分からない複雑すぎる感情。

「俺だって、他の奴が隣に座つてるところなんて見たくないし……」

「紅君……？」

彼はいつだって、思いもかけないような事を突然言い出すから、余計に訳がわからなくなる。

私の肩を抱いていた腕を離して、少し距離を置いて座りなおした

紅君は、私にもう一度顔を向けた。

「その呼び方……」

指摘されて思わず、ハツとする。いつの間にか私は、彼を昔のまに 紅君 と呼んでいた。これまでずっと 紅也君 で通していたのに――。

（バカだ！なにやってるんだろう、私！）

慌てて言い訳を探そうとする私に、紅君は真顔で呟いた。

「俺には記憶がないから……お前は 紅也 だよって何度も言われても、なんだかピンと来なくて……」

「紅君……？」

思いもよらないような話に、また無意識に彼を昔の呼び名で呼んでしまつて、私はハツと手を口に当てた。

「いいよ。そのままでもいい。そんなふうに呼ばれて……初めて自分は 紅也 なんだって実感した。不思議だ……なんだか納得がいった……！」

紅君が思いがけず笑顔を見せる。小さなものではあったが、ほんの少し昔の彼を思い出させるような笑顔に、またチクリと胸が痛んだ。

（そうだよ！あなたは間違いなく紅君なんだよ！）

口に出しては言えない言葉を、心の中だけで叫ぶ。

「だからいいよ……これからもそんなふうに呼んで……そして兄さんが一緒にいれないところでは、本当に兄さんの代わりに俺をボーダーガードに使つてよ……ね？」

蒼ちゃんの冗談交じりの言葉を、紅君が本当に実行しようと決意していた事はすぐに分かった。

似ているようで似ていない。似ていないようで似ている兄弟の共通点は――優しいという事。

園長先生の言葉を借りるならば 自分が辛い思いをした事がある人間だから、相手にもとても優しく出来るという事。

自分にはもったいないくらいの申し出に、私はいつも蒼ちゃんに

そうしているように ごめんね と謝りはせず、本当の想いのままに、紅君に向かって頭を下げた。

「ありがとう……」

守ってくれて。そんなふうに言ってくれて。笑いかけてくれて。本当に本当に――。

「ありがとう」

繰り返す私に紅君の笑顔は大きくなる。

いつか蒼ちゃんや昔の紅君にも負けないくらいの満面の笑みになるんじゃないかというほどの鮮やかな笑顔が、胸に痛くて眩しかった。

第三章 2

「紅也に高校に行く事を勧めてよかったよ。最近なんだか楽しそうなんだ……」

われ先に膝に乗ろうとする猫を順番に腕に抱えながら、蒼ちゃんはしゃがんだ体勢のまま呟く。

蒼ちゃんの口から紅君の話が出て来るたびドキリとせずにはいない私は、彼が背を向けてくれている事に内心ホツとしながら、いつものように短い返事を返した。

「そう……」

「友達も出来たみたいだし……でも紅也の友達第一号は、なんといつても千紗ちゃんだけだね……ありがとう」

なんの疑いもなく、いや優しい蒼ちゃんの事だからひよつとした何か感じるものがあっても、あえて気がつかないフリをしてきているのかもしれないが、向けられる感謝の言葉を、素直に受け取る事は難しかった。

——だって私は、蒼ちゃんに大きな秘密を抱えている。

紅君に会ったのは初めてではないと、彼が昔住んでいた街で同級生として同じ学校にも通っていたのだと、紅君を紹介されてから一ヶ月が経った今でも、まだ蒼ちゃんに伝えていない。

私と紅君がもし本当に単なる同級生だったなら、躊躇する事は無かったのかもしれない。

昔はこんな様子だったと、紅君本人にも話す事が出来て、ひよつとしたら彼が記憶を取り戻す手助けだって出来ていたのかもしれない。

けれど記憶を無くすきっかけになった事故に直接関係している私には、平気な顔をして当り障りのない話だけ彼らに伝える事なんてとても出来なかった。

昔の紅君の生活に深く関わり合っていた事も、なおさら私の口を

重くしている。

——だって、もし記憶を取り戻した紅君がもう一度会いたいと願っても、あの優しかった園長先生はもうどこにもいないのだ。

彼があんなに大切に守っていた 希望の家 の子供たちだって、みんなバラバラになっちゃってしまっている。

その事実を知った時、紅君がどんなに悲しんでどんなに傷つくか、実際に自分が苦しい思いを抱えている私にはよく分かる。だから――

（いつその事……思い出さないままのほうが、紅君にとっては幸せかもしれない……）

彼の意志や思いなんかは確かめないままに、私はそう結論付けていた。

楽しかった思い出も一緒になくしてしまった事は悲しいが、それでも辛い事実を知る事と天秤にかければ、仕方がないと思える。

（きっと傷ついてしまっただろうから……今でも悲しげな紅君の笑顔が、きつともつと悲しくなっちゃってしまっただけ……）

昔の自分たちの関係と一緒に、辛い事実も封印してしまおうと、私はそう心に決めていた。自分勝手に決めていた。

「千紗ちゃん……そろそろ時間だよ？」

地面をじつと見つめたまま、考え込んでいた私をいつの間にか蒼ちゃんが振り返っていた。

「お迎えが来ちゃうよ。学校の準備しなくちゃ……」

冗談めかして笑う蒼ちゃんの笑顔が胸に痛い。

再会したばかりの頃よりは少し分表情が和らいだとは言え、やっぱりこんな屈託の無い笑顔とはほど遠い紅君の笑い顔を思い出すと、なおさら痛かった。

「ほら……来た……！」

まだ遥かに遠い人影を見て、蒼ちゃんは立ち上がる。自分と同じようにスラリと背の高い弟に向かって、猫を片手に抱いたまま、大きく反対の手を振る。

「紅也！」

顔も見えないぐらいに遠い人影が、かすかに身じろぎしたように見えた。

ゆっくりと一歩ずつ近付いて来る足取りは、通常の人の二倍ほども遅い。

よく見なければ分からないほどに左足を引き摺って歩く紅君は、片足が不自由だと分からないように、歩く速度をいつもかなりゆっくりにしていた。

傾きかけた夕陽に、薄い色の髪が輝く。どんなに遠い所からでも真っ直ぐにこちらに顔を向けて、肩に掛けた鞆を何度も左右に掛け直しながら、一歩一歩地面を踏みしめるようにして近付いて来る姿を目にすると、いつも泣きそうな気持ちになる。

確かにもう一度会う事が出来たんだと、何度も何度も確認して、それでも一目見ることに、私の胸にはやっぱり毎回熱いものが込み上げた。

「兄さん……」

紅君は決して私の名前を呼ばない。真っ直ぐに見ているのは蒼ちやんの姿だけ。

それでもよかった。ぎこちない笑顔を浮かべて、心から信頼し切ったように蒼ちゃんを見る紅君を見ると、ホッと安堵する。

この四年間、新しい環境で私に叔母たちがいてくれたように、紅君には蒼ちゃんがいてくれたんだと、確認出来て嬉しくなる。

「行つてらっしゃい」

蒼ちゃんが私を振り返って笑った。分厚い眼鏡の奥の優しい瞳が、夕陽よりも眩しく輝く。

「行つて来ます」

目にうつすらと浮かんでいた涙を、太陽が眩しいからだと自分で自分に言い訳して、私は蒼ちゃん的笑顔に頭を下げた。

今はまだ、私は紅君以上に笑う事が苦手だ。だけどいつかは、昔みたいに笑えるようになるだろうか。

なれるかもしれない。こうして自分に向けられる蒼ちゃんの笑顔がある限り。そしていつだって遠くから見ているだけで幸せな気分になった紅君の姿を、また見ている事が出来る限り。

蒼ちゃんの前に到着した紅君が、私の方を見て小首を傾げる。

「行こうか……」

「うん」

隣に並ぶのではなく、少し離れて、一見するとはたして連れなのかどうかと判断に迷うくらいの距離を置いて、私と紅君は一緒に歩く。

彼に合わせてずい分ゆっくりとした歩調で、駅に向かって歩くこのひと時が、私にとって大切だった。あの頃と変わらずに、とても大切だった。

「さくら……もう終わりだね……」

どこから飛んで来た白い花びらを指でつまみ上げて、紅君が呟く。その姿に小さな頃の彼の姿が重なって、思わず息が止まりそうになる。

「お花見……行っただ？」

懸命に平静を装って尋ねたら、苦笑交じりにコクンと頷かれた。

「行っただよ……別にいいって言ったのに、兄さんに無理やり連れて行かれた……」

「蒼ちゃんらしい……」

不思議だ。どんな気分の時でも蒼ちゃんの話になるとあつたかい気持ちになれる。笑顔になる事はまだ難しいけれど、それと同じくらい幸せな思いにはなれた。

「さくら、好きなの？」

紅君に記憶がない事は分かってて、それでも何かしらの答えが返って来るのではないかと期待して、問いかける。

——だって彼にとって、桜の木はあんなに特別なものだったのだ。

「よく分からない…… なんだか気になつて開花するかしないかの頃からずっと見てるけど…… 満開に咲きほこる光景を見ても何かが違う気がして、スツキリしない気持ちばかりが募るんだ……」

「そう……」

ポツリポツリと語られる紅君の言葉に、耳を傾けながら歩き続けていた私の足が、ピタリと止まった。

「どうしたの……？」

すぐに振り返ってくれた紅君の顔を、ドキドキと胸を弾ませながら見上げた。

（ひょっとして……！）

桜を見上げる度に紅君が違和感を感じるわけを、私はきつと知っている。

さくらはこうやって見るんだ！

子供の頃に彼が私に教えてくれたその独特の方法を、私だったら彼に教え返す事が出来る。

「紅君！来て！」

私は夢中で、彼の先に立って歩き始めた。

紅君が無理なくついて来れるくらい。それぐらいの速さを心がけながら歩いて、まだ花が残っている桜の木を探す。

「何……？」

ちよつと戸惑ったように、それでも私の後をついて来てくれる紅君と、気がつけばいつもの通学路を大きく外れていた。

「さくら…… さくらの木を探してるんだけど……」

なかなか思うように見つからない。

道路脇に植樹されている桜じゃ、木の下に寝転ぶなんて出来ないし、四年前のあの日と同じに、本当はもう時期的には桜の花が終る頃なのだ。花びらが舞い散るほどに咲いている木なんて、ほとんど無い。

（どうしよう…… 見つからない……！）

勢い込んで歩き出したはいいものの、目的のものが見つからず気

持ちばかりが焦る私の行動を、別にもう見なくてもいいんじゃない？　なんて否定したりせずに、紅君はふいに後ろから私の腕をつかんだ。

「だったらこっち……！」

逆に私の手を引いて、今度は先に立って歩き出す。

まるで当たり前のように握られた手にビックリした。

ドキドキしてドキドキして、何が起きているんだかまるで分らなかった。

「ほら……ここ！……ね？」

指差されて目を向けた光景に、胸が熱くなる。

大きく枝を左右に広げて、いまだに満開の花に覆われている桜は、見上げるほどの巨木。

空き地の隅にひっそりと咲いているのだが、かつては誰かの家の庭の一角で、毎年開花を心待ちにされていた木だったのだろう。

それはとても立派な、大きな桜の木だった。

「綺麗……」

最初の目的も忘れるほどに感動して、思わず呟いた私に、紅君が囁く。

「うん。きつとそう言ってくれると思った。本当は見せたかったんだ……だから良かった……」

驚いて、隣に立つ彼の顔を仰ぎ見た。

「紅君……？」

彼は私の事を覚えているわけではない。昔の事を思い出したわけでもない。

なのになぜこんなに、私が大切に胸にしまっている思い出と、重なるような言葉をかけてくれるのだろう。

そんな、懐かしいほどの優しい表情で、私の事を見つめてくれるのだろう。

「……また変な事を言ってるって、自分でも分かっている……ごめん……でも本当にそう思ったんだ……」

謝られた事に静かに首を横に振って、私は桜の木に歩み寄った。
（ひょっとしたら私が今からやろうとしている行動で、紅君の記憶が甦る事もあるかもしれない……！）

その可能性に思い当って、緊張しながら木の下の地面に膝をつく。
「紅君……さくらはこうやって見るんだよ……」

柔らかな草が茂る上に横になって、桜の木を見上げた私に、紅君は何も返事を返さなかった。

横になった状態のままでは、彼がどんな顔をしているのか。果たして無くしていた何かを取り戻したのか。そんな事すら分からない（でも……分からなくて良かった……）

心のどこかでそう感じる、矛盾だらけの自分の思いをしっかりと自覚しながら、私はハラハラと舞い落ちて来る桜の花びらを見上げた。

花びらの向こうに見えるのは、夕陽の金色が混じった淡い青色の空だった。

それを背にして、背の高い男の人が、ふいに私の視界の中に姿を現す。

（紅君！）

彼の綺麗な瞳には、見る見るうちに涙が膨らんだ。そして精悍な頬を伝って一筋、地面に横たわる私の顔のすぐ横へと涙が零れ落ちた。

「え？あれ？……どうして……？」

自分の目から涙が零れた事に、紅君自身が戸惑っているようだった。

彼の表情は、いつもと比べるとかえって穏やかなくらいだ。全然悲しそうなんじゃないし、むしろ瞳は活き活きと輝いている。なのに涙は止まらない。いく筋も頬を伝い、私のすぐ近くの地面へと零れ落ちる。

「紅君……」

気付けば、私は彼に向かって手を差し伸べていた。

涙をグイツと腕で拭った紅君は、私の手に導かれるように膝を折る。なんの躊躇もなく、私の隣にゴロンと横になった。

「ほんとだ……」

すぐ隣から聞こえる呟きは、ちよつと感動に震えている。

「うん。こつやつて見上げた方が、立つたまま見るより、何倍も何十倍もしつくりくる……なんだか納得する……だけど、どうして……？」

私がその方法を知っていたのだらうと、どうやら不思議に思つたらしい。

（やつぱり……こんな事ぐらいで、記憶が戻つたりはしないんだね……）

彼に悲しい事実を知らせずにすんで、ホツとする。でもそれと同時に、それに負けにくいぐらいの勢いで、私の胸に悲しい思いが広がった。

（やつぱり……本当に覚えてないんだね……）

自分にとっては宝物のように大切な、彼との一つ一つの思い出が、私一人の心の中にだけしか存在しない事が悲しい。やつぱり悲しい。

「昔、教えてもらったの……私……ある人に……」

「そう……」

なんの感慨もない声が胸に痛い。

それはあなただと。あの頃の私にとって、とてつもなく大切で大好きだったあなただと。

伝えられない言葉は心の中だけで呟く。小さな小さな声で呟く。

頭を寄せ合っていた小さな頃とは違って、距離を置いて寝転んだ私と紅君の上に降り注ぐ桜の花びらは、私の視界の中で涙にかすむ。どうしたって零れ落ちる涙で、やつぱり見えなくなった。

第三章 3

四年前に紅君と一緒に過ごした日々は、後になって考えてみればそんなに長い期間ではなかった。

だから私はなんとなく、十六歳になった紅君とだって、まだ次の季節も一緒にいれるなんて思っていなかった。

「この時間になってもまだ暑いね……」

「うん」

相変わらずの短い会話を、時々思い出したように交わしながら向かう夕方からの学校。少し前を歩く紅君は半袖姿で、淡い色の髪も短く切ってしまっている。

彼が言うとおり、太陽が傾きかける時間になってもまだ気温は高かった。でもそんな事も感じさせないくらい、白いシャツ姿の紅君は涼しげだ。

まるで背中に羽根があるかのように駆けていた子供の頃とは、歩く速度はだいぶ違ってしまっただけで、私は彼の周りにいつだって風を感じていた。

暗く沈んだ私の心を引き上げてくれるような、爽やかで優しい風を感じていた。

「夏休みになったら、夜もお店を手伝うの？」

ふいに振り返らないままに問いかけられるから、遠い場所に馳せていた意識を今この場所に引き戻して、慌てて返事する。

「うん」

「そっか……」

そのまま会話が終わってしまいそうな気配に、ほんの少しだけ勇気を振り絞った。別に意識してやっているわけではないけど、自分から紅君に話し掛ける事はしないいつもの自分を、ほんの少し変えてみた。

「紅君は？夏休みの間どうするの……？」

突然彼が足を止めた。

いったいどうしたのだろうと、つられてついつい立ち止まった私の気配を察したかのように、ゆっくりとこちらを振り返る。

紅君の肩越し、遠くの川面に反射した太陽の光がキラリと揺れた。
「ほとんどは家にいる。でも兄さんと休みが重なる間だけは、ちょっと出かけるかな……」

すっかり身長差のついた私を見下ろして、紅君は小さく笑う。

「自分探しの旅……って言ったら、まるで学生の一人旅の常套句みたいだけど、俺のは本当にそうなんだ……忘れてしまった昔の自分を探しに行くんだから……」

ドキリと胸が鳴った。真っ直ぐに私を見下ろしている紅君に、激しく動揺した事が伝わってしまったのではないだろうか。

精一杯表情を変えないように努力する私に向かって、紅君はちょっと困ったような顔で小首を傾げる。

「ごめん……その間しばらくは、兄さんを連れて行っちゃう事になるけど……」

さっきよりもっと胸が痛んだ。

「ううん。大丈夫……」

浮かびそうになる涙を必死にこらえて、意味が通じるんだか通じないんだかよく分からない返事を返すのがやっとだった。

紅君にとっては、私は所詮、蒼ちゃんの知り合いで、彼に頼まれたからこうして一緒に学校に行っているに過ぎない。

学校の行き帰りの間、二人でいるのがいつの間にか当たり前になっ
ていて、私はすっかりその事を失念していた。

（今の私達の関係は、四年前とは違うんだ。常に間に蒼ちゃんがい
て、それでようやく成り立っている間柄なんだ）

そう思うと、手を伸ばせば届きそうなくらい近くにいる紅君が遠
かった。とてつもなく遠かった。

「会えなくて大丈夫じゃない方が、兄さんは嬉しいかも……」

ちょっと悪戯つぼく笑って、またもう一度私に背を向けて歩き出した背中にホツとする。

こっちを見られていると、いつ本心が零れ落ちてしまつか分からない自分に緊張しっぱなしだから、後ろ姿を追いかけているくらいのポジションが、やっぱり今は丁度いい。

「俺も……嬉しいかも……」

「……………紅君」

思いがけない呟きに、もう一度私の足は止まった。

紅君はこんなふうに、時々、ほんの時々思いがけない言葉をくれる。

ひょっとしたら冗談かもしれない、社交辞令かもしれない一言に、私はどうしようもなく動揺してしまって、その度に彼が自分にとってどんなに特別な存在なのかを思い知らされる。嫌というほどに自覚させられる。

（しばらく会えなくなつて……私が寂しいと思つてしまふのはどっち？……蒼ちゃん？……紅君？）

心の中で二人を比べる自分が嫌だった。

蒼ちゃん存在にあんなに救われて。彼を傷付けようとする人間はどうしても許せなくて。なんとか力になれたらと心の底から思っていたはずなのに、私という人間の基盤はやっぱり変わらない。

紅君が私の世界の全てだった四年前から少しも揺らいでいない。

例え紅君と再会出来ていなかったとしても、相手が蒼ちゃんじゃなかったとしても、きつと変わつていなかっただろう。

——遠くからでいい。ただ紅君を見ていたい。

小さな小さな変わる事のない願い。だからこそ、罪悪感を感じずにはられない。

自分には何も得はないのに私を大きく守ってくれている蒼ちゃんと、そんな蒼ちゃんを介しての繋がりがりしか私との間にはないんだと信じてくれている紅君に、申し訳ない。

（紅君が探したい「自分」だって……本当は私が一番ヒントをあげ

れるはずなのに……！）

分かっていてそう出来ない自分、しない方がいいんだと勝手に決めてしまった自分が、ひどく卑怯な人間のように思える。

（でも……！）

後について来ない私を不審に思っ、紅君がもう一度振り返った。りしないように、私は再び歩き出した。意志の力でなんとか足を踏み出した。

（あとでなんて思われたっていい……万が一紅君が記憶を取り戻した時に、酷い人間だっと思われたって……それでもいい！）

私にとっては胸を切り裂かれるほどに辛いはずのそんな状況さえも、甘んじて受け入れるほどの大きな決意を、また新たに心に刻み付ける。

（紅君に悲しい思いをさせたくない。今だっ、たくさんの方に傷つけている紅君に、私はやっぱりあの悲しい事件を思い出して欲しくない……）

だからいいんだ。私は卑怯者でいい。紅君の小さな笑顔を守るためならそれでいい。

大切な背中を少し距離を置いて追いかける私は、まったく同じ思いを蒼ちゃんも抱えているなんて、まだ知らなかった。

「紅也と？ うん、出かけるよ。でも旅行なんていいものじゃないんだ……」

数ヶ月前に初めて見た頃より、同じ時間にお弁当屋の裏に集まる猫たちはすっかり毛並みもよく、体つきも丸くなった。

たっぷりの食べ物と愛情を注いでくれる蒼ちゃんに、われ先にと群がって行く様子を見ると、ひよっとしたら私だって同類じゃないのかと思う。

紅君には、短く返事する事しか出来ない情けない自分なのに、私はいつも蒼ちゃんの前だと少しだけ饒舌になる。

「自分探しの旅だつて言つてた……」

「うん。我が弟ながら上手い事言つな。まさにそのとおりだよ」
猫に囲まれながら、蒼ちゃんが笑った。

その屈託のない笑顔にホツとする。笑い返す事はまだ難しいけれど、蒼ちゃんの前でだけ私の肩の力が抜ける事には、きつと彼だつて気がついてるだろう。

その証拠に、可愛がつている猫たちにも負けないくらいに、一番たくさん私に笑顔を向けてくれる。

たとえ悲しい言葉を紡いでいる時だつて、いつもいつも。

「事故で無くした記憶を、取り戻したいらしいんだ……俺はそんな事させたくないんだけど……」

「……蒼ちゃん？」

心の中に秘めている私の思いを、蒼ちゃんが代弁したのかと思つてビツクリした。

呼びかけた私に真つ直ぐ顔を向けたまま、表情さえ笑顔のまま、蒼ちゃんのはつきりと言い切る。

「紅也には言つてないんだけど……事故の前にあいつがお世話になっていた人は、あいつの事故と前後するようにして、ちょっと気の毒な亡くなり方をしてるんだ。思い出しても辛くなるだけだろうし、正義感の強い奴だから、きつと自分を強く責めると思う……だから僕は、紅也に思い出して欲しくない……」

顔が蒼白になつていない事を祈りながら、私は頷いた。

紅君と再会してから、彼が記憶を無くしたと知ってから、私がずっと心の中で繰り返し唱えていたのと同じ気持ちを、蒼ちゃんを感じていた事に驚いた。

「自分勝手だつて事は分かつてる……でも僕にはやっぱり紅也が大事だし……もつともつと幸せになつて欲しいと思う……あいつ自身は知りたいつて思つてるのにな……酷い兄だ」

「そんな事ないよ！蒼ちゃんは優しい！優しくつて、本当に紅君の事を大切に思っているから、本当は教えてあげられる事だつて紅君

に黙ってるんだもの！酷くなんてない！……ないよ！」

不思議だ。いつだって蒼ちゃんを庇う時の私には迷いが無い。頭で考えるのが追いつかないくらいに、次から次へと言葉が口から飛び出して来る。

その上、相手がたとえ本人だって、蒼ちゃんを悪く言われるのは我慢がならないらしい。思わすグツと涙がせり上がってくるほどに「まいったな……幻滅されたっておかしくないところなのに、そんなふうに言うから……自重しようって思ってるのにどんどん調子に乗る……」

いつもとは少し違った笑い方をして、しゃがんだ体勢のまま私を見上げた蒼ちゃんの姿に、ドキリとした。

私を見上げる蒼ちゃんの瞳は、どうしたって忘れられない面影を私に思い出させる。今は本人を目の前にしたって思い出せない――

俺もちいが好き　と告げてくれた時の紅君の顔。

「前に言ったでしょ？僕は誰に何を言われたって、それが君意外からだったら傷つかない。本当に図太い人間だから……僕を諫める事が出来るのなんて千紗ちゃんだけなのに……許すの？」

いろんな想いを秘めた蒼ちゃんの意味深な表情に、ドキドキと心臓が脈打って、頭も真っ白になって、何も考える事なんて出来ないはずなのに、私の体は私の指示なんて待ちもせずにさっさと動き出す。

「うん。私が許すなんて……そんな事言えるような偉い立場じゃないんだけど……蒼ちゃんがそう尋ねるんだったら、私はいくらだって許す。許すよ。そして手伝う！蒼ちゃんが紅君を守るのを、私も手伝うから！」

ふわりと蒼ちゃんが笑った。それは私の大好きな、紅君に――しておそらくは亡くなった私の父によく似ている笑顔だった。

「ありがとう……」

次の瞬間には、いつもの蒼ちゃんらしい満面の笑顔になってしまつて、私の心臓も少しずつ落ち着きを取り戻していったけど、しば

らくは忘れられなかった。

私を真っ直ぐに見上げた、蒼ちゃんの真摯な瞳が頭から離れなかった。

（紅君……）

その瞳の向こうに、幼い頃の紅君の姿を重ねている私の方が、自分を卑下して 酷い なんて言っている蒼ちゃんより、ずっと酷い人間だ。

その事はしっかりと自覚してた。涙が浮かぶほどに、強く強く、いつだって自責の念に駆られてた。

第三章 4

学校が夏休みに入るとすぐに、以前から宣言していたとおり蒼ちやんと紅君は旅に出る事になった。

紅君が十二歳までを過ごしたあの街を二人で訪れるのは、実はもう四度目なのだという。

「毎年夏休みになると行ってるんだ……俺がお世話になってた福祉施設は今はないけど、当時を知ってる人から少しでも話を聞けないかと思って……」

終業式の日、電車に揺られながら紅君がそう話してくれた時、やっぱり私は名乗りを上げる事が出来なかった。

誰よりも詳しい話が出るはずなのに、そうする事は恐い。

（本当の事を知ったら、紅君がどんなに傷つくだろう……）

その思いがどうしても頭から離れない。

「やっぱり……思い出したいの……？」

恐る恐る尋ねてみたら、真っ直ぐな視線を向けられた。思わず怯みそうになるくらい、昔と変わらない、強い意志を感じさせる視線だった。

「うん。そうしなくちゃいけない……そんな気がする。このまま、自分の中に大きな空洞を抱えて生きていくのは辛い……でもそれ以上に、絶対に忘れちゃいけない事が俺にはあった。そんな気がするんだ……きっと誰だってそうなんだろうけど……」

飛ぶように過ぎて行く窓の向こうの風景に、ふと視線を移した横顔から目が離せない。

紅君にとって、忘れてはならないはずだったもの——園長先生や希望の家の子供達。学校みんな。そしてたった一つだけのお母さんの思い出。

たくさんの失くしものの中に、私は含まれているだろうか。二人で交わしたあの小さな約束は——。

ギョツと力任せに握り潰されたように胸が痛くなって、私は紅君の横顔から視線を逸らした。

（確かに……出来れば取り戻して欲しい……！でもやっぱり……悲しい事実だけは知らせたくない……！）

改めて考えるまでもなく、私の中で渦巻いている思いは、ずい分身勝手なものだ。

覚悟を決めて口にしてしまえば、ものの数分もかからないうちに終わってしまう説明なのに、それは決して実行には移されない。

以前蒼ちゃんも言っていたとおり、そこには 思い出したい という紅君自身の思いが反映される事はない。

（ごめんね……紅君……）

自然と私の頭は下がり、彼の少し不自由な左足に視線が落ちた瞬間、頭上から声がした。

「……一緒に行く？」

ハッと息をのんで、すぐさま顔を上げた。

紅君は少し困ったように眉根を寄せて、静かに私を見下ろしていた。

「ごめん……また変な事言ってる……なんでだろう。全然そんなつもりないのに勝手に言葉が飛び出して来るんだ……いつも悪い……ほんとゴメン……」

私は必死に首を横に振った。

（謝らなきゃいけないのは私なのに！いつだって紅君の気持ちなんかお構いなしで、自分の思いばかり優先してる私の方なのに！）顔を上げると不自然なくらいに動揺している事がバレてしまいそう、私は俯いたまま必死に頭を振り続けた。

「ひよつとして……俺が記憶を失くす前にも会った事がある？……新幹線で三時間もかかるあの町にいた事なんて……あるはずないか……」

ドキリとこの上なく心臓が跳ねて、思わず動きが止まってしまった。

あまりと言えばあまりのタイミングで首を振るのを止めた私の行動を、紅君がどんなふうを受けとったのか。確認する事が恐い。顔を上げる事は出来ない。

ガタンと大きく電車が揺れ、よく聞き慣れた車内アナウンスが、もうすぐ次の駅に到着する事を告げてくれる。

——次は……。……。降り口左側となって降ります。お気を付けてお降り下さい。

永遠とも思える一瞬の沈黙を、ひどく現実的な声によって打ち碎かれて、私はホッと安堵した。ガチガチに緊張していた全身から力が抜ける。

「行こう……」

紅君は、まるで蒼ちゃんのように、俯いたままの私の頭を軽くポンと叩いて、座席から立ち上がった。

「うん」

慌ててその背中を追いながら、頬に一筋零れ落ちた涙を、グイッと手の甲で拭った。

（よかった……紅君に嘘をつかなくてすんで……よかった！）

深く問い詰められなくて助かったという思いよりも、何よりも、そんな些細な事に思わず涙が零れるくらい、彼は私にとって特別だった。

やっぱりどうしようもなく特別だった。

「千紗、そろそろ時間だよ。もう上がりな……時計よりも正確な蒼ちゃんが来ないと、やっぱり調子がおかしくなっちゃうねえ……」

厨房からかけられた叔母の声にハッと時計に目を向けると、もう七時がまわるところだった。

学校は休みだからこのまま店を手伝う事にはなんの支障もないのだが、休みの間くらいゆっくりと過ごしなと笑う叔母の好意に甘えて、私は短い夏休みの間も、いつもの時間にお弁当屋での仕事

を終える事にしている。

ボーっとしていて今日はいつもより遅くなってしまった。ふと目を向ければ、ガラス扉の向こうの町はゆっくりと暮れゆくとしている。

「うん。じゃあ、帰るね……」

のろのろとエプロンをとって、いつものようにお弁当を一つ下げて、裏口の扉を開けた。

高い塀の前にひよろつと背の高い人影が、私を待っていてくれた。い事が、こんなに寂しい事だとは自分自身でも分かっていなかった。扉の開く音にどこからともなく集まって来た野良猫たちも、大好きな蒼ちゃんを探して、キョロキョロと戸惑っているようだ。

「まだ帰って来てないよ……寂しいね……」

まるで自分の心に話しかけるかのように呟いて、しゃがみ込んで手を差し伸べたら、猫たちは代わる代わる私の手や足に体をすり寄せて来る。

いつも蒼ちゃんがそうやっていたようにご飯を準備してあげてから、自分も壊れかけた椅子に座ってお弁当を開いた。

叔母が私のためにと詰め込んでくれた特製弁当には、今日も美味しそうなおかずが並んでいるのに、ちっとも箸が進まない。

普段より時間が遅いからばかりではなく、夕暮れの町も、薄闇に包まれ始めた空も、なんだか今日はやけに暗い感じがした。

蒼ちゃんと紅君に会っていない上に、学校の友人たちとも顔を会わせていないからだろうか。ふいにとつともなく寂しくなつて、誰からも背を向けられてひとりぼっちだった放課後の教室を思い出す。小学校の小さな教室。机に突っ伏すようにして泣くのを必死にこらえていた私に声をかけてくれたのは、紅君だった。

（紅君……）

蒼ちゃんの笑顔を思い出していた時とはまた違った痛みが、私の胸を切り裂いていった。

紅君に会えなかった四年間、繰り返し繰り返し思い出していた彼

の子供の頃の笑顔ではなくて、最近のどこか寂しそうな笑い顔が思わず頭に浮かんだ事が、自分でも意外だった。

私の心の中で、大好きだった少年の面影を大切にしまっていた場所には、今一緒に蒼ちゃん的笑容が輝いている。

それは本当に宝物のように大切に、いつでも私を優しい気持ちにさせてくれる。

だけど今の紅君は違う。再会してから私に見せてくれたこれまで知らなかったような彼のいろんな表情は、心の中のもっとどこか違う場所に焼きついている。

思い出すと瞼の裏が熱くなるほどに。どうしようもなく息が苦しくなるほどに。

毎日彼を一目見るたびに、どうかして昔の笑顔を取り戻して欲しいと思う。

それ以上に、昔彼が私にしてくれたように、今度は私が彼を助けたいと思う。

何が出来るんだろう。何をしたらいいんだろう。そんな事さえ分からないのに、湧き上がる思いだけは固くて強くて。

こんな深くて暗い思い——きつと紅君には迷惑なだけだろうに、抑える事が出来ない。

自分の中の静かな情熱を、無視して無かった事にしてしまうのは、今こんなに難しい。

（紅君にとって私は、もう単なる蒼ちゃんの知り合いでしかないのにね……）

自分を戒めるように、何度も何度も心の中で繰り返していないと、望む資格もない夢を見てしまいそうだった。

守られるはずのない約束を、また後生大事に抱え込んでしまいうだった。

（遠くで見ているだけでいい……昔みたいに、ただそれだけでいいから……どうかもっと幸せになってほしい……あの笑顔を取り戻してほしい……）

まるで味のしないお弁当を少しずつ口に運びながら、ひとりぼちでそんな事を思った。

暗くなつた空に輝き始めた星を見上げながら、強く、思った。

その時ふいに、どこか遠くで車が急ブレーキをかける音と、タイヤの軋む音がした。

驚いて顔を跳ね上げた瞬間、両手が震えだしてお弁当を取り落としてしまった。

「あつ……いけない……」

慌てて椅子から降りて、その場にしゃがみ込み、どうにか拾い上げたいのに体が言う事を聞いてくれない。

風に乗って聞こえて来る人々のざわめきや悲鳴や叫び声なんかに、体中の全神経が集中している。

（違う！違う！違うから！！）

お弁当を諦めた私は、両手で自分の耳を塞いで首を振った。

「ここはあの街じゃない……！今はあの時じゃない……！」

呪文のように繰り返しながら、自分自身を抱き締める。急にズキズキと痛み出した背中のか、次々と脳裏に甦って来る無残な光景なのか、溢れ出した涙を拭う事もせず、ただ首を振り続けた。

事故にあつたあの時から、車の音や大通りは私のトラウマになっていて、時折こんなふうに恐くてどうしようもなくなる。

叔母や叔父が傍にいてくれ、根気強く言い聞かせてくれたおかげで最近ではあまり気にならなくなっていたが、どうやら事故が起きたらしい気配は、やはり敏感に私の記憶の蓋をこじ開けてしまったようだ。

嫌だと体中が拒否しているのに、足が勝手に立ち上がる。黒煙が上がり人々のざわめきが聞こえてくる方へ、ふらふらと体が勝手に歩き出す。

（嫌だ！嫌だ！）

頭では力の限り拒絶しているのに、まるで自分の体ではないかのように、私の足は全然止まってくれない。

様子のおかしな私を心配してか、ニャーニャーと鳴きながらまわりついてくる猫たちにも、躊躇さえ出来ない。

前にも何度がこんな事があった。自分で思っているよりずっと、私はあの事故の時、最後まで紅君を見守れなかった事が後悔として心に残っているのらしい。

事故の現場なんて恐くてたまらないのに、引き寄せられるようにそちらに向かってしまう。

そこに紅君がいるはずないって事は、今ではいつそう深く理解しているはずなのに、体はまるで私の言う事を聞いてくれない。

「嫌だ……嫌だよ！」

声を振り絞る事が出来ず、小さな声で呟きながら、止めどなく涙を流して事故の現場に向かっていている女の子なんて、誰が見たって奇妙なものだろう。

自分でもおかしいと思う。止まる事が出来るものならとくにそうしている。でも出来ない。

「誰か……！誰か止めて……！」

泣きながら小さな悲鳴を上げた時、私の足が向かっている大通りとは反対の方から声がした。

「千紗ちゃん？」

見えない糸で操られていたかのような体が、プツリと糸が切れたように、ふいに自由になった。私はゆっくりと首だけで背後を振り返る。

私に向かって手を振る蒼ちゃんと、その横に立つ紅君の姿を目にしたら、まるで呪いが解けたかのように、ピタリと足も止まった。「どうした？何かあったの？」

心配げに問いかけてくる蒼ちゃんに向かって、私は踵を返して、救いを求めるように歩み出す。

いつもいつも私の心をすくい上げてくれる眩しいくらいの笑顔に、
無我夢中で駆け寄る。

だけ――。

ガタガタとまだ震えが止まらない両手で、すぐるように私がつか
んだのは紅君の手だった。

自分に向かつて大きく広げられていた蒼ちゃんの腕ではなく、そ
の隣で戸惑うように差し伸べられていた紅君の手だった。

「千紗ちゃん……？」

驚いたようにかすれた声で、蒼ちゃんに名前を呼ばれた瞬間、思
い知った。

四年ぶりに触れた紅君のあの頃とは比べものにならないくらい大
きな手が、私の手を振り払ったりせず、しっかりと握り返してくれ
た瞬間に、痛いくらいに分かった。

（何年経つてもやつぱり変わらない……私が好きなのは紅君だ……
！何があつたって……どんなに離れていたって、結局全然変わらな
い……変わるはずがない……！）

この上なく残酷に。我が儘に。胸の中には蒼ちゃんに対する抱え
きれないくらいの罪悪感を抱えながら、それでも私はしっかりと自
覚した。

苦しくてたまらなかった。

第四章 1

あの時、私にあとほんの少しだけ冷静さが残っていたなら、きっと蒼ちゃんの腕をとっていたんだろう。

もしそう出来ていたなら、なんの不自然さもなかったし、誰を傷付ける事もなかった。

そしたら、まだ私たちの優しい関係は続いていたんだろうか。

例えひた隠しにした私の本音が、誰に向かっていたとしても——。けどそれはやっぱり許されない——許されてはならない裏切りだったんだと、自分でもそう思う。

「千紗ちゃん……？」

蒼ちゃんが私を呼ぶ声に、紅君がハツとしたように私の顔を見直した。ひどく驚いたような、それでいて呆然としたような表情だった。

しっかりと握り締めていた私の手を放して、そのまま身を引く。まるで蒼ちゃんに場所を譲るかのように、私の前から二、三步後退る。

再会した時からずっと、紅君はいつも私に対してそれぐらいの距離を置いていたというのに、今はその動作の全てが胸を抉られるように痛かった。

「大丈夫？」

いつも通りの笑顔を浮かべて、蒼ちゃんは私に問いかけてくれる。きっとこれ以上ないくらい酷い顔色をしているだろう私に、それでも優しく声をかけてくれる。

でも私の脳裏には、さつき一瞬だけ見た凍り付いたような蒼ちゃんの表情が、しっかりと焼き付いていた。——私が紅君の手を取った瞬間の、静かな驚愕の表情。

（ごめんなさい……蒼ちゃん……！）

「うん……大丈夫……」

本当は全然大丈夫なんかじゃない心理状態で、無理に口を開いたら涙が零れた。

ポロポロと零れ落ちる涙を必死で拭いながら、懸命に、目の前にいる人の名前を呼ぶ。

「蒼ちゃん……」

「なに？」

呼べばすぐに笑顔で返事をしてくれるこの人が、どんなに私を大切にしてくれているのか。それは私にだって分かってる。

「蒼ちゃん……」

「うん？」

分不相応なくらい大事にされていると、自分でもよく分かってる。

「……お帰りなさい」

本当は真っ先に言うつもりだった言葉。言いたかった言葉。心の中でぐちゃぐちゃになった感情をどうにか押し殺して、せめてそれだけを伝えたら、やっぱり笑顔が返って来た。

「うん。ただいま」

蒼ちゃんはちよつと身を屈めて、私と目の高さを合わせて、眩しいくらいに笑ってくれた。

だけど両手を自分の膝に突いたその格好じゃ、いつものようにポーンと私の頭を叩く事は出来ない。

そう感じた瞬間、これまでいつだって私に向かって広げられていた温かい両腕が、故意にか無意識にか閉じられた事を悟った。

（蒼ちゃん……）

あんなに無防備に、大きく開かれる事はきつともうないんだろう。

——その事がよく分かって、胸が痛かった。

「結局、これという収穫はなかったなあ……毎回話を聞かせてくれ

る人たち以外には、新しい人とも出会わなかったし……」

「そうなんだ……」

私がいつも夕方にお弁当を食べる店裏の狭い場所で、今日は蒼ちゃんと紅君も、叔母さんが作ったお得弁当を食べた。

蒼ちゃんは今回の旅行について色々に語ってくれたけれど、紅君は時々「うん」とか「そうだね」とか相槌を返すばかりで、ほとんどしゃべらなかった。

お弁当を食べ終わった後も、しゃがんだ体勢のままこちらには背を向けて、猫たちと戯れている。

私は極力そちらには目を向けないようにして、ただ蒼ちゃんの顔ばかりを見ていた。

でも視線は向けなくても、体中の意識が紅君に向かってしまっている事が、自分でもよく分かる。

それだけはもう、止めようと思っててもどうしようもなかった。

「千紗ちゃんは……？ 何も変わった事はなかった？」

二人が現われた時、私が明らかにおかしい様子でフラフラと大通りに向かって歩いていたら事を、きっと蒼ちゃんは言っているんだろう。

事故の気配や喧騒なんかを思い出すと、またブルブルと震えてきそうな両手をぎゅっと握り合わせて、私は精一杯笑顔を作った。

「うん……大丈夫……」

「そう……」

蒼ちゃんとの間に、これまでとは全然違う空気が流れる。

他の人には口を噤んでしまうような事も、これまで不思議と蒼ちゃんにだけは話せた。

滅多に主張しない自分の考えも、言葉が溢れるように口にする事が出来たし、みつともないくらいに何度も、泣き顔だつて見せた。

蒼ちゃんはいつだってそれらを、あの眩しいぐらいの笑顔で受け止めてくれて。私はますます安心する事が出来て。一緒にいるとあんなに自然で楽だったのに——今は苦しい。

慣れない笑顔を懸命に浮かべて、本当の気持ちは何ひとつ言い表せない私なんて、全然私らしくないって、きっと蒼ちゃんだっと思ってる。

だけどそれを彼は口にしない。

私の予期せぬ行動によって、自分だけじゃなく蒼ちゃんまで変えてしまった事が、余計に私を辛い気持ちにさせた。

「じゃあ……また……」

笑顔で手を振って去って行く背中に、頭を下げた。深々と下げた。これまでは何度も何度も私を振り返りながら、大きく手を振ってくれていた人が、決して振り返らない事が悲しい。

その上――。

少し離れて蒼ちゃんの横を歩く紅君は、ついに一度も私に目を向けようとはしなかった。

サヨナラの挨拶の時も、蒼ちゃんの陰に姿を隠すようにして、ただ伏し目がちに俯いていた。

（バカだ、私……）

自分の本心から目を背ける事で、なんとかバランスを保ち続けていた微妙な私たちの関係が、私のたった一度の失敗のせいで崩れていく。

千紗ちゃん……今までと同じでいいから、これから僕も僕の傍にいてよ……ずっといてよ……傍にいてくれるだけでいい……僕が邪魔になったら、いつでもそう言ってくれていいから……！

いつか蒼ちゃんが私に言った言葉が、胸に浮かぶ。

（いくら蒼ちゃんがそう望んだからって、やっぱりこんなにずるい事……きつともと間違っていたんだ……！）

優しい蒼ちゃんを傷付けたくなかった。そのくせやっぱり、紅君の姿から目が離せなかった。

ずるい私が蒼ちゃんの提案に甘えた結果、ぎりぎりに心を追い詰められた時に本音が零れ出した。この上なく残酷な形で――。

（ごめんなさい！ごめんなさい蒼ちゃん……紅君……！）

二人が角を曲がって見えなくなる最後の瞬間、紅君がこちらを振り返った。

真っ直ぐに私を見つめる瞳に射竦められたかのように、身動きが出来なくなる。

永遠とも思える一瞬の後、すぐに目を逸らして彼はまた歩き始めたけれど、私は動けなかった。

知りたいような知りたくないような何かが、その視線には含まれているような気がして、妙な胸騒ぎがし、なかなか動き出せなかった。

「学校……これまでみたいに一緒に登下校するのは、もう終りにしたいんだ……」

短い夏休みが終わって、新しい学期が始まった初日。いつもの駅ホームで紅君からそう切り出された時、悪い予感的中した事を知った。

悲しい思いよりも寂しい思いよりも、そう言ってもらえた事にホツとした。

私が蒼ちゃんの目の前で紅君の手を取ってしまった以上、今までのように二人で過ごす事は出来ない。もともと蒼ちゃんが引き合わせてくれた二人だからこそ、尚更――。

本当は私から言い出さなければならなかった言葉。先に口にしてくれた紅君の優しさに、心の中だけで感謝する。

「うん。分かった。ごめんなさい」

「いや、俺こそゴメン……」

お互い、何に対して ごめんなさい なのかは、言及しなかった。確かめあう事が恐いから、私は先にその場から逃げ出す。

「じゃあ私……こっちの車両に行くから……」

「ああ……」

背中を向け合って、私たちは別々の車両に乗り込んだ。

夕暮れ時の電車はいつもだったら学校帰りの学生で賑わっているのに、今はまだ普通の学校は夏休み中なので、比較的人がまばらだ。四人がけのボックスシートに一人で座って、窓に頬がくっつくほどに近付いて、外の景色に目を向けたら、今にも泣き出しそうな自分の顔が見えた。

（なによだらしい……紅君と再会する前に戻っただけじゃないの……）

ほんの半年前までは毎日一人きりで乗っていた電車だったのに、今はそれがたまらなく寂しい。

特に会話を交わすわけじゃなくても、いつだって見える範囲の所にいてくれた。——それだけの事がどんなに自分にとって意味があつて、大切な事だったのかを、改めて思い知らされた。

（悪いのは自分なんだから……！傍にいたいなんて……もともとそんな事望める立場じゃなかったのに、蒼ちゃんと紅君の優しさに甘えてただけなんだから……！）

自分を戒めるように俯いて唇を噛みしめていたら、頭上から声をかけられた。

「ここ空いてる？……ねえ君、隣座つてもいい？」

ハッと顔を跳ね上げて見てみたら、若い男の人が三人、狭い通路を塞ぐようにして立っていた。

四人がけの席に、知らない男の人三人と座るなんて嫌で、慌てて立ち上がる。

「どうぞ……私は移動しますから……」

他にも空いている席はたくさんあるのにと嘆息しながら、自分がその空席に移動しようとしたら腕をつかまれた。

「いなくなっちゃったら意味ないじゃん。一緒に座ろうよ」

「いえ……！私は……」

「いいからいいから」

大きな体で通せんぼするかのように進路をふさがれて、少し焦る。振り解こうとした腕も、ますます力を入れられてしまって、なかなか

か放す事が出来ない。

「放してください……！」

困りきつて懇願したら、馬鹿にしたように鼻で笑われた。

「いいじゃん仲良くしようよ」

これは車掌さんに気付いてもらうしかない、男たちの間から遠くを眺めたら、隣の車両に淡い色の髪が見えた。

その髪が太陽の光を受けてキラキラと輝いていた頃から、私は気がつけば、いつもいつも彼を見ていた。

どんなに遠くからでも、一目で他の子とは見分けがつく相手を、やっぱりこんな時でも真つ先に見つけてしまつて、そんな自分にドキリとする。

彼の綺麗な色の髪が、私は子供の頃から大好きだった。うっん髪だけじゃない。彼の全てが――。

（紅君……）

声を出して呼んだわけでもないのに、ハツと振り返つてこちらをみた紅君は、次の瞬間には立ち上がっていた。

走る事は出来ない足で、それでも最速の速さで、あつという間に私のところに駆けつけるから泣きそうな気持ちになる。

「放して……！嫌がつてるだろ……？」

ぐるりと周りを取り囲まれている間は、決して逃げる事なんて出来ないと思うほど強い威圧感を感じさせていた男たちだったが、並んでみたら紅君よりはかなり小さかった。

明らかに見下ろすような角度で、怒りを込めた強い視線を紅君に注がれ、萎縮してしまったのがよく分かる。

「こっちに來て」

グイツと反対の腕を紅君に引かれ、よろめきながら歩き出した私から、男たちは手を放した。

男たちはそのまま何もせず、ただ私を見送っているだけなのに、紅君は歩みを止めない。運転席に一番近い先頭の車両まで、手を引いたまま私を連れて行つて、ちよつと力づくで一人がけの席に座ら

せた。

そして、まるで私の姿を世界の全てから隠すかのように、すぐ目の前に立ち塞がった。

「目を放したら、次の瞬間にはもうこれだなんて……冗談じゃない……！」

怒ったように呟かれた言葉に、私はうな垂れた。

「ごめんなさい」

「違うよ、ゴメン……自分に腹が立ってるんだ……いや……呆れるのかも……」

先日からのよそよそしい態度と比べれば、明らかに親しい感じを取り戻した紅君の声に、私は恐る恐る顔を上げた。

紅君は本当に困り切ったような表情で、私を見下ろしていた。

「兄さんが大切にしている子だって事は、よく分かってる……だから俺だって守ってやんなきゃ、兄さんがいない時は俺が傍にいてやんなきゃって思ってたはずなのに……！それはいつたいなんのためだったのか……本当に兄さんのためにだったのか……自分でももう、全然分らない……！」

「紅君……？」

「なんで俺の事をそう呼ぶの……？なんでその声を聞いたなら……遠くからでも姿を見つけたら……どんなに自制しようとしたって、俺の体は勝手に動き出すの……？」

「紅君……！」

「ごめん。やっぱり変な事言ってる……無理だよ……これ以上傍にいないなんてやっぱり出来ない。でも目を放す事だって、本当は一瞬だって出来ない……！」

私が座る座席の背もたれを、指先が真っ白になるほどギュツと掴んだまま、紅君は顔を伏せた。

心臓を鷲掴みにされたように胸が痛くて、ツウツと一筋、私の目から涙が零れ落ちる。——今にも零れそうに溢れ出して、さっきから懸命に我慢していた涙が、やっぱり我慢出来ずに零れ落ちた。

紅君はなんの躊躇いもなく私に手を伸ばして、指先でその涙をすくい上げてしまう。

「泣き顔なんて見たくない。いつも笑ってて欲しい……いろんな事をたくさんたくさん抱え込んで、きつと一人で泣いてるんだろ？ なんて思ったら……頭では分かっているつもりでも、やっぱり放っておけない……！」

頬を撫でるように涙の跡を拭っていた大きな手が、私の頭の後ろにまわった。

グイッと引き寄せられて、そのまま紅君の腕の中に抱き締められる。

「兄さんが好きならそう言って！ もう二度と会わないし、学校だって辞めるから！ 大好きな兄さんの幸せだったら……たとえ今すぐは無理でも……きつと俺には、いつかは祝えるはずなんだ……！」

涙でぐちゃぐちゃになった顔のまま、恐る恐る彼の背中に手をまわして、私は首を振った。懸命に振った。

（無理だ！ 紅君に嘘をつくなんて私には出来ない！ たとえ紅君がそれを望んでも……私の方から突っぱねる事を望んでるって分かっても……やっぱり出来ない！）

決して言葉にする事は出来ない本当の気持ちを、紅君に伝えようとするかのように、無我夢中で彼にしがみ付いた。

（私が好きなのは紅君だから……！ いつになっても、何があっても、ずっとずっと紅君だから！）

ぎゅっと一瞬力を込めて、私を強く抱き締めてから紅君は腕を解いた。

床に置いたままにしていた鞆を持ち上げて、クルリと踵を返す。

「ごめん……帰る……やっぱりもう会えない……！」

私は慌てて席から立ち上がる。足を引き摺りながら電車から降りて行く背中を、急いで追おうとしたら、プシューッと扉の閉まる音がした。

「紅君！」

出口に駆け寄った私の目の前で、重たい鉄の扉は静かに閉じた。

「紅君！紅君！」

周りの目も気にしないで、こぶしで扉を叩く。

ホームに降り立った紅君はこちらを振り返って、苦しそうに顔を歪めて首を振った。

「ごめん」と呟くように、小さく唇が動く。

さよなら……

彼の唇の動きだけで、私がその言葉を読み取った瞬間、電車が静かに動き出した。

「待って！やだ……待って、紅君！」

みつともなく叫びながら、窓に張り付くようにして、遠くへ行って行くホームを振り返る。

紅君は微動だにせず、その場所に立っていた。私の乗った電車を、ゆつくりと頭を動かして、ただ静かに見送っていた。

「やだよ紅君！」

届くはずのない声を振り絞って、懸命に首を捻って、振り返っていたホームが次第に見えなくなっていく。私の視界から消えていく。彼と私との僅かな繋がりが、確かに分断されていく感覚を実感として感じて、私はその場に崩れ落ちるように座り込んだ。

「いやだよ……！」

良心の呵責や罪悪感や後悔や苦悩。いろんな気持ちを取り払ってしまったら、私の中に残るのは結局たったひとつ——紅君を想う気持ちだけなのに。

それこそが一番許されない、望むべくもない願いだという事が辛かった。

第四章 2

あの日から、夕方、紅君が私を迎えに来る事はなくなった。

まるで自分を追い詰めるように宣言していたとおり、どうやら本当に学校にも通っていないらしい。

「紅也は退学するって言ってるんだけど……さすがにそれはね……もし気が変わってやっぱり通いたいってなった時、簡単に元に戻るものではないでしょ？だからしばらくは様子を見る……ひよつとしたら休学かな……？」

何があっても変わらずに私が働くお弁当屋を訪れる蒼ちゃんは、私を責めはしなかった。

私と紅君の間に何があったのか。知りはしなくてもうすうす感じているだろうに、それをどうこう言うような人でもない。

変わらずに向けられる笑顔が苦しかった。

「ごめんね……千紗ちゃんにもいろいろと力になってもらってたのに……」

ふいに謝られるから慌てて首を振る。力になるどころか、紅君に助けられていたのは私の方だ。

困った時は、いつも助けに来てくれた。何度も何度も守ってくれた。——そう思うだけで、泣きそうな気持ちになる。

「もしかた紅也が学校に行くって言い出したら……その時はよろしく、先輩……！」

明るくかけられた声に、頷く事は出来なかった。もうどうしても出来なかった。

「蒼ちゃん……私、蒼ちゃんに謝らないといけない事がある……そして聞いてもらいたい事も……」

足元に長く伸びる自分の影を見つめたまま重たい口を開いたら、蒼ちゃんがふうつと大きく息をついた。

らしくない長いため息に、驚いて顔を上げたら、この上なく優し

い顔で私を見下ろしてくれていた。

「うん、待ってた……いつか千紗ちゃんからそう言ってもらえるのを……ずっと待ってた……だからそんな顔しないでいいよ……嬉しいよ……」

いつだってこんなふうに、蒼ちゃんは掛け値なしに優しさを与えてくれる。こんな私なんかに、惜しみなく与えてくれていた。

だからそんな蒼ちゃんに、もうこれ以上秘密を抱えなくていいんだと思って、ホツとする。ホツとして涙が零れた。

心から安堵して、自分がこれまでどんなにその事を苦しく思っていたのかを、改めて自覚した。

「私がこの町に来る前に住んでいたのは、紅君が育ったあの街……そして私たちは同じ小学校に通う同級生だった……」

そんな爆弾発言から始まる昔話を、蒼ちゃんはひどく驚いたりはずせずに穏やかに聞いてくれた。

私が言葉に詰まった時は助け舟を出してくれるし、言い難い事なんかはサラッと蒼ちゃんの方から口にしてくれる。相変わらずの心配りが有り難かった。

「そっか……紅也と一緒に事故にあった女の子って、千紗ちゃんだったんだ……どつりであの街でいくら探したって見つからないわけだ……」

「ごめんなさい……本当にごめんなさい！」

膝にくつつきそうなほどに深々と下げた頭を、ポンと軽く叩かれた。

内心、蒼ちゃんがそんなふうに私に接してくれる事はもうないだろうと思っていたので、ひどく驚いた。

「謝らなくていい……本当は思い出すのだって苦しいでしょ？なのに僕に話してくれた……それが嬉しいよ。ありがとう……だから千紗ちゃんは余計な事は気にしなくていい……」

「蒼ちゃん……！」

顔を上げると、やっぱりいつものように笑ってくれている。思わずその笑顔に手を伸ばして、すがり付いてしまいそうになる。

でもそんな自分を、私はしっかりと戒めた。

「でも……そっか……そうだったんだなあ……」

蒼ちゃんは小さく苦笑しながら、自分のボサボサの髪に手を突っ込む。ギョツと両目を瞑って、前髪をかき上げながらそのまま空を見上げた。

こんなに動揺した蒼ちゃんを見たのは初めてだった。そう思ったから——気がついた。

そう言えばもうずい分長い間、私は蒼ちゃんの笑顔以外の顔を見ていない。

まるで生まれた時から笑顔だったかのように、いつもいつも優しく笑っている人だから、不思議に思わなかったけど、違和感を感じなかったけれど、よくよく考えてみればおかしい話だ。

（いくら蒼ちゃんだって、嫌な事や辛い事、悲しい事だってあるはず……なのにいつも笑顔だなんて……）

無理してたんだろうなと思う。ううん。きっと無理させてたのは私だ。

「ごめんなさい、蒼ちゃん……」

思わず声にして言ってしまったら、蒼ちゃんが私に視線を戻した。分厚い眼鏡の向こうから私を見つめる優しい瞳。やっぱりいつ見てもそれだけは紅君とそっくりだ。

私がそんな事を考えてる間も、蒼ちゃんは苦しさを滲ませながら

——やっぱり笑っている。

「謝らなくたっていいって……千紗ちゃんには絶対に譲れないものがあるんだって、僕はちゃんと分かってたんだから……どう？たいしたものでしょ？……でも、紅也に対してだけはなんだか態度が違ってたから、ああ僕じゃダメなのかな、なのに紅也ならいいのかななんて、みっともなく落ち込んだりもしたけど……そっか……最初か

ら紅也だっ たんなら納得だ…… 千紗ちゃんの譲れないものってあいつだっ たんだなあ……」

「蒼ちゃん……！私……」

だけどそれでも、私が蒼ちゃんに惹かれていた心は嘘じゃない。このまま彼の隣にしようと、一時は本気でそう思った。

以前自分が紅君にやつてもらったように、なんとか蒼ちゃんの力になりたいと願った想いは、確かに本物だった。

ただ、やっぱりどうしても紅君が私にとって特別だっただけ。そうしようなんて頭で考えなくても、心で思わなくても、自然と体が動いてしまうだけ。

だから蒼ちゃんが自分を卑下する必要なんてないのに。出来る事なら 私は蒼ちゃんの事だって大好きだ って言ってしまうたいのに。——それは出来ない。

それはやっぱり口にはいけない言葉だと思う。

「紅也に本当の事を話さなくていいの……？」

そんな悲しそうな瞳で、それでも表情だけは無理に笑顔を作って、どうして蒼ちゃんは私の事ばかり気にかけてくれるんだろう。

放っておいたっていいのに、もう知らん振りしてたっていいのに、やっぱり気遣ってくれる。

「うん…… 前に蒼ちゃんが言ってたのと、私も同じ気持ちだから…… 思い出しても辛い事が多いから、紅君には思い出して欲しくない……」

蒼ちゃんはつめていた息をちよつと吐いた。

「ありがとう……ごめんね…… あいつにとつて千紗ちゃんは、きつと特別だっ たんだろうにね…… そして千紗ちゃんにとつても……でしょ？」

いつの間にか固く組み合わされていた蒼ちゃんの両手が、小さく震えている。まるで祈るような格好で胸の前で組まれたまま、カタカタと震えていた。

「蒼ちゃん……」

だめだ。私の方が、もう胸が痛くてたまらない。こんなに優しく、こんなに愛情に溢れた人を、どうして私は傷付ける事しか出来なかったんだろう。

初めから背を向けていればよかったのか。深く関わらないように気をつけていればよかったのか。でも、紅君ともう一度引き合わせてくれたのだって蒼ちゃんだ。

感謝する事ばかりのはずなのに、私は蒼ちゃんに何一つ返せない。彼が望んでいたものはなんなのか——よく分かっていたはずなのに、それは決して与えられない。

「蒼ちゃん……」

「千紗ちゃん！」

私の呟きと、蒼ちゃんの小さな叫びがピタリと重なった。蒼ちゃんは深く深く俯いて私にクルリと背を向けた。

「ゴメン……ちょっと、今はもう無理だ……今度会う時はきっと通も通り笑うから……笑えるようになってるから……だからゴメン……」

蒼ちゃんが何を言いたいのかはすぐに分かった。ひよろりと背の高い背中が、小さく揺れている。それはきつと私が見てはいけない姿だ——蒼ちゃんが絶対見られたくない姿のはずだ。

だから私は蒼ちゃんに背を向けて駆け出した。

「ごめんなさい……蒼ちゃん！」

懺悔の言葉だけ、彼の傍に残すように叫んで、その場から逃げ出した。

涙は止まらなかった。当たり前だ。あんなに自分を大切にしてくれた人に、あんなにひどい事をした。ひどい事しか出来なかった。たとえ蒼ちゃんが、次に会う時は平気な顔をしてくれたって、何事もなかったかのように笑いかけてくれたって、自分で自分が許せない。もう許せない。

（会えないよ……！もう蒼ちゃんにも……紅君にも会えない！）
きつとそれが一番いい。私は紅君に記憶を取り戻して欲しくはないし、蒼ちゃんをこれ以上傷付けたくもない。ましてや、私のせいであの仲のいい兄弟の関係がおかしくなってしまうのなんて——絶対嫌だ。

（私が一人……いなくなればいい……）
そう決意して、叔母たちが営む小さなお弁当屋に駆け戻った。

夜間高校を卒業して大学に受かったら、もともと叔母たちのところからは出て行こうと思っていた。母が残してくれた貯金や保険金を使って、自分でアルバイトもして、一人で生活する。そのつもりだった。

二年半後に実行しようと思っていた一人暮らしが、少し早くなつたと思えばいい。

しかし、一人で住みたいと申し出た私に、叔母はいい顔をしなかった。

「そりゃあ、私たちのところが嫌で仕方がないって言うんだつたらしょうがないけど……そうじゃないだろ？」

「そんな事はない！絶対にないよ！」

「だったら今までどおりここにいな。店も家もオンボロで、うちは貧乏だし……学校にもちよつと遠いけど……千紗が寂しくなった時、私たちは一緒に居てあげる事は出来る。あんたに必要なのは……そういう事だよ」

「叔母さん……！」

涙が溢れた。口は悪くつて、態度も素っ気無くつて、それでも叔母も叔父も私がここに来た当初から、惜しみなく愛情を注いでくれた。その事はよく分かっていた。

以前一度だけ、叔母に教えてもらった事がある。叔母夫婦は望んでも子供が持てなかったのだそうだ。だから行き場のない私の事を、

章兄さんがくれた私たちの子供だ とすんなり受け入れてくれた。これ以上なく大切に守ってくれた。

「ちよつと気分を変えたいんだったら、二、三日友達の所へでも行っておいで。自分じゃ分からないだろうけど、あんたずい分思いつめた顔してるよ……千紗。そんな時に焦って答えを出したって後で後悔するだけだ……ゆつくり考えて、それでもやっぱりここを出て行きたいって思ったなら、またそう言いな。話はそれからだ……」
「うん。分かった」

愛情いっぱいの叱責に感謝して、店を出ようとしたら叔父に呼び止められた。それまで黙って私と叔母の話を聞いていた叔父は、ビール袋に入ったお弁当を私に掲げて見せた。

「弁当持っていけ、千紗。友達の分も二つ。お世話になりますって、ちゃんとお礼言うんだぞ」

「うん」

本当の両親と言ってもいいぐらい、真剣に私に向き合ってくれる二人に引き取ってもらえて、私は本当に幸せだったんだと、改めて実感した。

学校の近くに一人で住んでいる美久ちゃんに連絡したら、二つ返事でOKを貰えた。

「いいよ、いいよ。いつでもおいでよ。せつかくだから若菜と理香子も呼ぼうつか？」

奇しくも教室以外で、三人のクラスメートと初めて顔を会わせる事になった。

「へえ……千紗んちのお弁当、結構おいしいじゃん……」

「ほんと。チエーン店のより量も多いし、おかずもいろいろ凝ってる……」

「学校に近かったら、毎日買いに行くのにねー」

叔父が持たせてくれた二つのお弁当は、四人で分けて食べた。

夜の教室で毎日繰り返されている他愛ない会話は、美久ちゃんの狭いアパートに場所を移しても、変わる事はない。

「でも毎日こんなに美味しい物食べてたら絶対太っちゃう!」

「大丈夫だよ。だって千紗は、全然太ってないじゃん」

「ほんとだ。ははっ」

三人の笑顔を見て会話を聞いてるだけで、私の心も軽くなる。

「毎日買いに来る人もいるよ。それもかなりの人数……」

一瞬心に浮かんだ蒼ちゃんの面影を胸の奥に封じ込めて、私は小さく笑った。

「ねえーほらー…… やっぱり近かったらよかったのに……!」

「はははっ」

夜の学校が始まるまでの僅かな時間。彼女達から元気を分けてもらえて本当に良かった。ほんの少し浮上した気持ちで、今日も休まず学校に向かう事が出来る。

目と鼻の先にある学校に向かってアパートの部屋を出る時、美久ちゃんがポツリと呟いた。

「千紗……話を聞くくらいだったらいつでも出来るからね……なんにも役にはたたないかもしれないけど、あたしは口だけは固いよ」

「美久ちゃん……」

「最近、あのイケメン君、学校で見ないね……元氣だしなよ……」

あながち外れでもない指摘に、思わず涙が浮かびそうになって、ちよつと慌てた。

いろんな事が重なって、自分の事がすっかり嫌になって、沈み込んでしまった気持ちだったけれど、その原因の一つには、きっと紅君の姿を見れていない事もあるんだと思う。

もう会わない と言われて、仕方がないと思った。悲しかったけれど納得した。けれどそれは所詮は私の建て前で、本当の気持ちはやっぱり今だって紅君の姿を探している。ちらりと見るだけいいから、目にする事は出来ないかと探し続けている。

(本当に……どれだけ特別なんだろう……)

そんな相手に小さな子供の頃にめぐり会えた。辛い事も苦しい事も山ほどあるけど、その奇跡にだけは感謝したい。心から感謝したい。——そう思いながら俯いていた顔を上げて、何気なく目を向けた道路の向こうに、その人を見つけた。

「あれ？ひょっとして噂をすれ違ってやつじゃない……？ねえ千紗？あれって……そうだよな……」

学校の正門の前で、次々と登校してくる生徒達に時々小突かれながら、笑って立っているのは確かに紅君だ。私が見間違えるはずがない。

「学校やめたわけじゃなかったんだね……良かったじゃん」
バチンと私の背中を叩いて、美久ちゃんたちはそのまま歩いて行く。紅君が立つ校門に向かって。

でも私は、一歩も踏み出す事が出来なくて、じりじりと後退りした。

「千紗……？何やってんの？」

みんなが私を呼ぶ声に、紅君がゆつくりと動きを止めてこちらを振り返ろうとするから、その仕草を全て見届ける前に、私はクルリと踵を返して学校とは反対の方向へ駆け出した。

「えっ？ちよつと千紗！どこ行くのよ！」

三人が慌てる声を背中に聞きながら、いつそう走るスピードを上げる。

紅君が走って追いかけては来れない事を知っていて、こんな逃げ方をする私はひどい人間だ。

でもなんて思われたっていい。——やっぱりもう会えない。話す言葉も、見せる顔も、もういつたいたいどうしたらいいんだか全然分らない。

「おい紅也！」

「紅也君！！」

ざわめきと共に、彼を引きとめようとするかのような声が背後からいくつも聞こえて来るから、私は悟る。

きつと紅君は追いかけて来てくれてるんだ。こんな私なんかを――

（もういい！もういいよ！）

無我夢中で駆ける。

「来ないで！紅君！」

足は止めないままに顔だけ振り返って大声で叫んだ瞬間、すぐ近くでゴオツツという音が聞こえた。

「とまれえっ！！ちい！」

紅君の叫び声に、文字どおり足が止まって動けなくなつて、それから私は自分がいつの間にか、あんなに恐れて近づく事さえ出来ずにいた国道に、今にも飛び出しそうになつていた事を知つた。

「何やつてるんだ！何やつてるんだよ……！」

彼にとつての最速の速さで、足を引き摺りながら私のところまでやつて来た紅君が、固まつてしまったように身動き一つ出来ない私を、道路から引き剥がすようにして連れ去る。

腕をつかんで、引かれるままに歩かされて、安全な場所まで連れて行かれた。

「心臓が止まるかと思つただろ……！」

それはまさしく私のセリフだった。真つ白になつたまま、何も考えられない状態の頭で、ただ彼の名を呼ぶ。

「紅君……」

――彼はなんと言つた？

これまで決して名前では呼ぶ事のなかった私を、さっきなんて呼んだのだろう。

その呼び名は、亡くなつた父が幼い私を愛情いっぱいと呼んでいた呼び方で――。

だから子供の頃、偶然にも紅君が私の事をそう呼んだ時、懐かしくて嬉しくて涙が止まらなかった。

だけどその名前で私を呼ぶ人は、もう誰もいない。

紅君が記憶を失ってしまった今、もう誰もいないはずだったのに――。

「何？俺の事が嫌いなら、大丈夫……もう会いに来たりしないから……！ちいがちゃんと逃げないで兄さんと向き合ってくれるんなら、俺はもう二度と、ちいの前に姿を現さない。だから……」

高ぶった感情のままに一気に言葉を吐き出し続けていた紅君が、ハッとしたように私の顔を見た。

「ちい……あれ？……俺……？」

驚いたような戸惑ったような顔。思わず私まで、息が止まりそうになる。

（まさか思い出したの？紅君……記憶が戻ったの？）

言葉にしようかどうしようかと迷った次の瞬間、私の視界の中で紅君の長身の体が全身の力が抜けたかのように、ぐらりと横倒しになった。

「紅君……！」

そのままアスフェルトに叩きつけられようとした頭を、間一髪抱き止める。

固く閉じた長い睫毛と、蒼白な顔色に私自身も血の気が引いていく思いを感じながら、私は声を限りに叫んだ。

「誰か！誰か来て！紅君を助けて……！」

大好きな薄い色の髪をきつくきつく胸に掻き抱きながら、喉が潰れるほどに何度も叫んだ。

――奇しくもそれは、四年前のあの事故の時、私が言いたかったのに言えなかった言葉だった。

これまで何百回となく夢に見た。道路の中央に横たわる紅君にトラックが突っ込んで行く光景。

助けて欲しくて。誰かに彼を救い出して欲しくて。でもあの時の私はそれを口にする事すら出来なかった。

夢の中ですら、ただの一度も彼を救う事は出来なかった。

あの時の苦しい気持ち、悲しい気持ちを、今全て贖うかのように、叫び続ける。

「お願い！お願い！！紅君を助けて！」

ピクリとも動かない、誰よりも何よりも大切な人を抱き締めて、声の限りに叫んだ。

第四章 3

どこか冷たい空気を感じさせる殺風景な病室の真ん中で、静かにベッドに横たわる紅君の姿を見てみると、息が止まりそうになる。

「大丈夫だよ……紅也は大丈夫……」

学校からの連絡で駆けつけてくれた蒼ちゃんが、震える体を支えてくれて、何度も何度も言い聞かせてくれて、それでも私は流れ落ちる涙を止める事が出来なかった。

——何の前触れも無く突然に、紅君は私の目の前で倒れた。

あの唐突さも、勢いの激しさも、思い出すだけで恐くてたまらなくなる。

見えない何かにあつという間に紅君を連れ去られてしまいそうで、今度こそもう二度と会う事が出来なくなってしまうそうで。

恐怖はいつまでたっても私の心から消えなかった。

「例の事故の後、こういう事は何度かあったんだ。最近はある程度なくなってたけど……どうやら紅也は事故の時頭を強く打ってるらしくって、子供の頃の記憶が飛んでるのもそれが原因だと思う……時々こんなふうに倒れる事もあるけど……大丈夫……僕が保証するよ、紅也は大丈夫……」

執拗に何度も 大丈夫 を繰り返す蒼ちゃんが、私の不安だけではなく、自分の不安も消し去ろうとしている事は明らかだった。

（うん……うん……）

蒼ちゃんを安心させるためにも、返事を返したいのに声が出ない。私の喉は奥の方までカラカラに乾ききっている。

ガタガタと震える両手を握りあわせて、胸の前できつくきつく組む事しか、その時私に出来る事はなかった。

私の事を昔の呼び名で呼んだ紅君が、記憶を取り戻したのか。何かを思い出したのか。確かめたい事はたくさんあったけれど、今はもうそんなものはどうでもいい。

(……どうして倒れたのかさえ本当にはわからない紅君が……もう一度目を覚ましてくれるなら……それだけでいい!)。心の中で、私はずっとそう祈り続けていた。

「こんなにすぐ、また千紗ちゃんに会う事になるとは思わなかった……なんだか僕って……やっぱり格好悪いね……」

自嘲気味に呟く蒼ちゃんの声に、私はずっと俯けていた顔を上げた。

「蒼ちゃん……?」

紅君が眠る病室の前の廊下で、呆けたように長椅子に座り込んでからどれぐらいの時間が過ぎたのだろう。

紅君が倒れた瞬間の映像を、目が開いているのか閉じているのかも分からなくなるくらいに何度も繰り返し映し出していた私の目に、やっと現実の風景が見え始める。

目の前に、自分に向かって差し出された小さなペットボトルがあった。

ゆるゆると視線を上げてみれば、座り込んだ私を見下ろすようにして蒼ちゃんが立っている。

ずっと隣にいてくれたはずなのに、いったいいつの間に飲み物を買って来てくれたんだろう。彼がいつ立ち上がったのかさえ、今は思い出せない。

「はい。これ飲んで……じゃなきゃ千紗ちゃんまで倒れちゃうよ……」

いつもよりぎこちない笑顔に、胸がズキリと痛んだ。

ほんの数時間前にあんな別れ方をして、もう会わす顔さえないと思っていた人が目の前にいる。

今度会ったらきつと居たたまれない思いをすればかり思っていたのに、いざ蒼ちゃんを目の前にしたら、やっぱりホッとする気持ちが一番大きかった。

不安に押し潰されそうなこんな時、他の誰でもない彼と一緒に居てくれて、本当に良かったと思う。

「結局、紅也が望んだとおりになったな……凄く怒ったんだよ、あいつ……僕が 千紗ちゃんとしばらく会わない事にした って言ったら、兄さんがそんな事する必要ない！ って……それで、気がついたら家の中のどこにもいなくて……急いで千紗ちゃんに会いに来たんでしょ？……紅也が倒れたのって、やっぱり僕のせいだね……」

「蒼ちゃん！」

思わず差し出された飲み物ではなく、それを持つ腕の方を掴んでしまった。

まるで平素とは別人のように、悲しく笑う蒼ちゃん表情が胸に痛い。

「蒼ちゃんのせいなわけない！紅君が倒れたのが誰かのせいだつて言うんなら……それは私のせいだよ！」

国道に飛び出そうとした私を、急いで引き止めたせい。思いがけず昔の記憶が頭をかすめて、ひどく混乱させてしまったせい。過去を知っているくせに口を噤んで、私は何食わぬ顔で彼の近くに居続けたせい。

——ううん。そもそも私が紅君と出会って、彼を自分の不幸に巻き込んでしまったせいだ。

「違うよ」

心の中だけであげ連ねていたつもりだったのに、蒼ちゃんは言葉にして、私の思いを否定した。

まるで、私は何を考えているのか全部分かっているかのように、ずっと表情を固く引き締めて、これまでより自分の言葉に重みと真実味を持たせる。

「千紗ちゃんと出会った事を、紅也は後悔してない。君を守ろうとした事は、あいつにとって、とてもとても大切な事だった。だから悔やんでなんかいない……間違いなんかじゃない……！」

「でも……………！」

まるで本人からそう伝えられたかのように、蒼ちゃんに紅君の思いをきっぱりと断言されて、思わず涙が浮かぶ。

「君が気にする事はない……責任を感じる事は無いんだ……」

「だけど……………！」

それでも自分を責めずにはいられないと、頭を振ろうとした瞬間、扉の向こうの異変に気がついた。

「に……………いさん……………？」

かすれたような小さな声が聞こえて来たから、とつさに長椅子から立ち上がる。

私が一步を踏み出す前に、蒼ちゃんはもう身を翻し、扉を開けるのもどかしいくらいの勢いで病室の中に駆け込んでいた。

「紅也！」

蒼ちゃんの後ろから、私も部屋に踏み込む。

ベッドの上から紅君のあの綺麗な瞳が真っ直ぐにこちらを向いている光景が見えて、泣きそうな気持ちになった。

（ああ、またもう一度、紅君に会う事が出来た……………！）

そう思えただけで、もう他には何もいらなかった。

「どうしたの……………？そんなに血相変えて……………」

薄く笑いながら蒼ちゃんにそんな問いを発した紅君は、顔色は悪くても、ずい分穏やかな表情をしていた。

緊張で頬を強張らせていた蒼ちゃんが、ついついつられて笑ってしまうくらいだった。

「どうしたのって……………まいったな……………そんなにサラッと言うなよ……………こっちは本当に心配したんだから……………」

「うん、分かってる。ごめん……………」

紅君に歩み寄った蒼ちゃんは、彼の手を取って脈をみたり、ベッドの周りに置かれた様々な計器に次々と目を向けたりしている。

（そう言えば、蒼ちゃんって医学生だった……）

今さらのように、私はそんな事をぼんやりと思い出していた。

「気分はどう？どつか痛む？」

蒼ちゃんの問いかけに、紅君はゆっくりと首を横に振る。

そうしながら私の方に視線を向けて、ふいにニツコリと笑った。

再会してからは一度も見える事の無かった、まるで子供の頃の彼のような曇りない笑顔に、心臓を鷲掴みにされたような気持ちになる。

（えっ？……紅君……？）

しかし次の瞬間、紅君は私の顔をしっかりと見つめながら、信じられないような言葉を口にした。

「……誰？兄さんの彼女？初めまして、弟の紅也です。こんなみっともない格好で、すみません……」

ガツンと何か硬い物で一発、後頭部を殴られたような気がした。

（な……に……？どうして……？）

混乱し切って頭が回らない。なのに心臓は私の体の中心で、早鐘のように鳴り響いているし、体中からどんどん血の気が引いていく。

「紅也……？お前……！」

だけど蒼ちゃんが驚きの声をあげた瞬間、その声をかき消すような勢いで私は叫んでいた。

そうしようとか、そうしたいとか頭で考える前に、勝手に喉から声飛び出していた。

「蒼ちゃん！私、お医者様を呼んで来るから！」

驚きに見張った目を、紅君から私に移した蒼ちゃんに向かって、必死で首を横に振る。

（今は紅君を混乱させるような事は言わないでいい……！私の事はどうでもいいから……！）

決して口に出しては言えない思いを、なんとか蒼ちゃんに伝えようと必死に首を振る。

蒼ちゃんは小さく息をのんで頷いた。

「うん、頼むよ千紗ちゃん……」

いったいいつの間に？ とか 兄さんも隅に置けないな…… とか、かすれた笑い声で囁く紅君の言葉を背中で聞きながら、私は本当に病室を後にした。

（これは悪い夢……？それとも私に与えられた罰……？）

張り裂けそうな胸でそんな事を考えながら、静かな病院の長い廊下を、どうしようもない喪失感を抱えて呆然と歩いた。

「特定の何かについて記憶が抜け落ちてしまう事自体は、そんなに珍しいケースではないです。それがある出来事に対してだったり、人物に対してだったり、症例は様々ですけど……あまりにもその事ばかりを考え過ぎてという事は、大いに考えられます。特に彼の場合は、過去に頭を強く打っていますから……突然どんな事が起こっても、全然おかしくはない……」

苦しげに説明を施してくれた医師の水玉模様のネクタイから、私はずっと目が離せなかった。

視線を上げると、口を開くと、涙が零れ落ちてしまいそうだった。目に見えている状態より、紅君の事故の後遺症は樂觀視出来るものではないのだと、改めて専門の人物の口から聞かされて、胸が塞ぐような思いだった。

本当に二度と目を覚まさない可能性だってあったのだと思うと、今回倒れた事で紅君が失った物なんて、些細な物だと思える。

——それが私に関する一切の記憶だとしても。

病院からの帰り道。以前は紅君と二人で乗っていた電車に、蒼ちゃんと二人で乗り込んで、何も言葉は交わさないままに長い時間が過ぎた。

降りるべき駅に着いても微動だにしない私を気遣って、蒼ちゃんはどうとう重い口を開く。

「千紗ちゃん……」

「……………」

言葉は返さず、ただ視線だけを上向けた私に、蒼ちゃんは手を差し伸べた。

「行くよ……帰ろう……」

間違える事無くこの手を、あの時も取っていたなら、紅君は私に関する最近の記憶だけでも留めておいてくれたんだろうか。

そして私たち三人の微妙だけど優しい関係は、まだ続いていたんだろうか。

そんな事を考えてしまう自分が嫌で、やっぱり私は蒼ちゃんの手を取る事は出来なかった。

軽く頭を左右に振って、自分の力だけで座席から立ち上がった私に、蒼ちゃんは何も言わず、先に立って電車を降りる。

後続く私を振り返らずに、そのまま改札口に向かって歩きながら、励ますような言葉をかけてくれた。

「大丈夫だよ……もう少しして紅也の容態が安定したら、千紗ちゃんの事は僕から話す。今度はちゃんと、紅也の大切な女の子だよって、最初から説明するから……」

「だめっ……………」

思わず叫んで足を止めてしまった。

蒼ちゃんも驚いたように立ち止まって、そして初めて私を振り返る。

分厚い眼鏡の向こうの優しい瞳に向かって、私は懸命に訴えた。

「いいの！もういいの！紅君は私の事を忘れてしまっていていい……」

私の言葉に、蒼ちゃんの顔が苦しげに歪んでも、私は言葉と一緒に零れ落ちた涙を手の甲でグイッと拭って、毅然と顔を上げ続けた。「無理に昔の事を思い出そうとしなければ、きっと紅君が倒れる事も無いよ……私と会わなければ、訳のわからない感情に戸惑って、苦しむ事も無い……！だからいいの！私はもう紅君とは会わないから……いいの！」

「千紗ちゃん……！」

蒼ちゃんが私の言葉を訂正して、私の気持ちを取り成してくれようとする事はあらかじめ分かっていた。

だから彼がそれ以上言葉を発する前に、私は蒼ちゃんの横をすり抜けて駆け出す。

「千紗ちゃん！」

呼び止めようとはしても、追いかける事は躊躇しているらしい様子にホツとしながら、そのままスピードを上げた。

「千紗ちゃんっ……！」

蒼ちゃんの激しい叫びにも、もう二度と振り返ってはいけないうと、そう思った。

どだい無理な話だったのだ。自分のせいで不幸にしまった紅君の、せめて傍にいたいなんて。思い出してもらえないまでも、姿だけは見ていたいなんて。

そんな願いを胸に抱えているくせに、蒼ちゃんの優しい腕も失いたくなかった私――。

（だからバチが当たった……身のほど知らずの私に下された――これは罰だ！）

息が上がるほどに夢中で駆けながら、齒を食いしばって泣いた。叔母さんたちのお弁当屋に向かって走る私の視界を、切ない思い出がいつぱい詰まった景色が通り過ぎる。

紅君と再会した公園。一緒に見上げた桜の木。少し離れて一緒に歩いた夕暮れの駅までの道。

時折彼が発する、昔を彷彿させる言葉に、何度も何度もドキリとさせられた。

以前とは変わってしまったどこか寂しげな笑い顔を見るたび、どうしようもなく胸が痛かった。

（紅君……紅君……！）

どうして神様は紅君の記憶と一緒に、私の記憶も奪ってはくれないのだろう。

いつもいつも私一人が、彼は無くしてしまった思い出を抱えて、生きていかなければならない。

苦しい思いを我慢して、なのにこれからも、普通に生活していかなければならない。

それでも――。

（紅君が無事ならそれでいい……他には何も望まない……！）

彼が意識を失っていた間、祈るように繰り返していた思いを現実のものとする為に、決意する。

もう紅君と会わない

蒼ちゃんに宣言した言葉を、確かに現実のものにしようと、私は夜空に瞬く星に誓った。

苦しい息をこらえて懸命に駆ける私を、満天を埋め尽くすように輝く星々が、遙か遠くからそつと見つめる。

何の音もしない。紅君と一緒にいるといつも感じていた優しい風さえ、もう分からない――ひどく切ない夜だった。

第四章 4

照り付けるような夏の陽射しは遠くなり、いつの間にか吹き抜ける風にも秋の深まりを感じるようになった。

紅君が私の事を忘れてしまっただけから三ヶ月。

私は本当にただの一度として彼と会おうとはしなかった。

叔母たちのお弁当屋を毎日訪れる蒼ちゃんも、その習慣をやめた訳ではないけれど、無理に私が店番している時間に合わせる事はない。

だからほんの時々、偶然に顔を会わせた時だけ、短い会話を交わす。

「久しぶり……元気？」

「うん……蒼ちゃんは？」

「ああ。元気だよ……」

どちらも決して紅君の名前は出さなかった。

けれど蒼ちゃんがわざわざ話題に出さない事こそが、紅君もまた元気な証拠なのだと、私はそう解釈していた。

紅君は結局、夜間学校を辞めなかった。だから少し離れた一年生の教室まで覗きに行けば、いつでもその姿を見る事は出来る。元気にしているかどうか、自分の目で確かめる事も出来る。

でも、まるでそれは自分には禁じられた行為であるかのように、

私は頑なに彼に会う事を拒んだ。

登下校の電車も、時間をずらした。

時間調節のために時々立ち寄る美久ちゃんの部屋で、紅君の噂話が出る事は何度かあったけれど、最近ではもう誰も私をからかう事は無くなった。

私には関係ない と顔色一つ変えず、意固地に首を振り続ける私に、みんなすっかり閉口してしまっている。

「だったら本当に私がアタックかけちゃうからね？」

私を焦らそうという意図が見え見えの美久ちゃんの言葉にも、淡々と頷いた。

例え胸が張り裂けそうに痛くても、その本心は誰にもバレなかったと自分では思っている。

（いつか忘れられる……時間が経てばきつと……！）

呪文のように心の中で繰り返す言葉が、どんなに無駄なものなのかなんて、誰よりも自分が一番良く分かっていた。

紅君と出会ってから五年。ただの一度として彼の事を忘れる事が出来なかった自分が、これからだって変わらない事は何よりも確かだった。

「ねえいいでしょ？ どうせ予定なんてないんだろっから……」

「失礼だな。私にだって……」

無邪気に問いかけてくる美久ちゃんに、口を尖らせながら反論しようとしたのに、その先の言葉が何も浮かんで来ない。

「なによ、やっぱりないんじゃない……じゃあ決まりっ！ ねっ？ 千紗も参加！」

煌びやかなイルミネーションに街が包まれる頃になると、夜の教室は毎夜、クリスマスに行なわれるパーティーの話題でもちきりだった。

12月24日の終業式の日、そのまま学校でパーティーが行なわれるなんて、夜間学校ならではだ。

「去年も一緒に楽しんだじゃない…… たった四人しかない女子なんだからさあ、一人でも減っちゃうと男子がガツカリするって！」

「そうかなあ……別に私なんていなくても……」

「いいから！ 私たちと騒ぎたくないの？ 決定！ もう決定だからね！」

教室の後ろに大きく貼り出された出欠を問う用紙に、美久ちゃんはさっさと私の名前も書き連ねてしまう。

（まあいいか……）

油性ペンで名前を書いた周りに、赤ペンで花まで書かれてる自分の名前を見ながらちよつと笑った。

最近では少し笑顔にもなれるようになった。

優しい叔母たちが気遣ってくれるおかげ。楽しい仲間たちが賑やかに取り囲んでくれるおかげ。

そしてまるで以前と変わらない笑顔で、蒼ちゃんが時々会いに来てくれるおかげ。

いつの間にか紅君と再会する前の日常に、戻りつつある自分に自分でビツクリする。

胸の奥に燦っている痛みは、きっと一生忘れる事は出来ないだろうけど、何事も無かったかのように暮らしていく事は出来る。

淡々と、平穩に、過ぐす事は出来る。

（これでいい……きつとこれでいい……）

まるで自分に言い聞かせるかのように、私は自分の本音をいつもひた隠しにしていた。

けれど必死に押し殺した想いなんて、ちよつとしたきつかけであつという間に溢れ出してしまふ。

小さな小さな努力の積み重ねを、たった一瞬で全部壊してしまふ。紅君に対する私の想いは、いつだってそんな激しいものだったのだから。

自分でも手におえないくらい熱く激しいものだったのだから――。

恋人たちがロマンチックなデートスポットで愛を語り合い、子供たちを中心とした家庭ではサンタクロースが未だに大活躍する聖夜。日頃は、かざりつけの無い蛍光灯の下で私たちが勉強に励む夜の教室も、色とりどりの折り紙やモールで、その日は綺麗に飾りつけされていた。

それになんと言つても極めつけは、黒板の前に置かれた私の身長ほどもある大きなクリスマスツリー。

「これってさ、昼の奴らが使ったのを、そのまま残していつてくれただってさ……」

クラスメートの男子の説明に、私たちは感慨深く頷いた。

私たちの通う夜間学校は、昼間は普通の高校として、夜とは比べものにもならないくらいたくさん生徒たちが学んでいる。

午前中で終わる終業式の日。午後から賑やかなパーティーが行なわれた余韻が、まだ教室のそこかしこに残っているような気がした。「俺たちも負けないくらいにもりあがろうぜ！」

しつかりと二時間の授業が行なわれた後、注文したり持ち寄ったりした料理をくっ付けた机の上に広げて、総勢十三名でのクリスマスパーティーは始まった。

入学してから一年九ヶ月を共に過ごしたクラスメートたちは、年齢も昼間の職業もみんなバラバラだ。

だが総じて頑張り屋で明るい子たちが揃っていると思うのは、女子に限った事ではない。

「千紗ちゃん食べてる？もつと食べて！ほら飲んで！」

未成年者もいるためお酒は禁止の中、強引に勧められるのはジュースのはずなのだが、自分より遥かに年上のクラスメートに言われると、なんだかお酒のような気がしてくるのはなぜだろう。

「おいしい！長岡んちのオードブルセット、結構いけるぞ！」

「えっ！俺も！俺も！」

大皿に盛られた叔母たちの惣菜を褒めてもらうと、私だって悪い気はしない。

いい匂いを電車の中でも車両中に漂わせながら、必死に学校まで運んで来たかいるというものだ。

「決めた！俺は長岡と結婚してこのお弁当屋の後を継ぐ！」

声高らかに宣言した男の子が、他の男子にもみくちゃんにされる光景を見ながら、私も美久ちゃんたちと一緒にあって声を立てて笑っ

た。

なんの気負いも無く、こんなに普通に笑えたのはずいぶん久しぶりだった。

「ほーらね。参加してよかったでしょ？」

いつもよりもっと綺麗にメイクした美久ちゃんに、顔を覗き込まれるからなおさら笑顔になる。

「うん。そうだね」

「元気出せよー千紗！きつといい事もあるって！」

ポンポンと肩を叩いてくる若菜ちゃんや理香子ちゃんも、私の事を心配してくれてたんだと、今さらながらに思った。

「うん。ありがとう」

あんまり女の子ばかりで固まっていると、男子の方から抗議の声があがる。

「こら！そこ！女の子が固まらない！！他のテーブルが全部寂しい事になっちゃうだろ！」

「テーブルって……ただの机じゃん！つ・く・え！」

「うるさいっ！こういう時は雰囲気重視なの！だからここも教室じやなくって、素敵な雰囲気のお店！俺たちは今、パーティールームを貸しきり中！」

「なんじゃそら！どこにそんな金があるんだよ」

「ないから、脳内補完してんだろ！」

「ぎやはは！お前、ジュースで酔っ払ってるんじゃないの？」

止めどなく続く楽しい会話に、笑ったり口を挟んだり、本当に楽しい夜だった。

（学校ってこんなに楽しいものだったんだな……）

この学校に通うようになってから再確認した事を、きょうもまた私は、何度目か思った。

11時が過ぎても男子はまだ宴もたけなわという雰囲気だったが、

私の帰りの電車がなくなると、女の子四人は先に帰る事になった。

夜の校庭を歩いていると、校舎の何箇所からか、賑やかな声が聞こえて来る。

きつと私たち二年生ばかりでなく、一、三、四年生もパーティーを行なっているのだろう。

「ねえ千紗……本当に一年生の所に行ってみなくていいの……？」
夕方から何度も、散々繰り返された同じ質問に、私はため息をつきながら首を振った。

「いい」

「えーっ……だってえ……」

それでも食い下がろうとする美久ちゃんを、若菜ちゃんがそつと手で制す。

「美久……いい加減にシなつて……千紗も困つてるでしょ？」

「だって……」

ぷうつと頬を膨らます美久ちゃんは、ひよつとしたら本当に、自分が紅君に会いたいのかもしれない。

そう思うと胸のどこかがチクリと痛む事は確かだったが、私は精一杯なんでもない顔を作つて、美久ちゃんを振り返った。

「行きたかつたら美久ちゃんどうぞ。私は行かないけど……」

「なによお！千紗の意地悪！」

怒った美久ちゃんがみんなの先に立つて歩き始めた足を、ほんの数歩進んだ所でピタリと止めた。

ちよつと困つたように首を竦めて、私を振り返る。

「千紗……」

なにがあつたのかを説明されるまでもなく、私の目は、次の瞬間にはもうその人の姿を捉えていた。

数人の友人たちに囲まれながら、数十メートル先を歩いている明るい色の髪。

いったいどれくらいぶりだろうと思っただけで、泣き出しそうに

なる自分を必死にこらえる。

（ああ、本当に元気そうだ……良かった……笑ってる……）

それだけを確認して、もうこれ以上は自分には許されないと背を向けた瞬間に、背後で美久ちゃんの大声が聞こえた。

「ねえちよつと紅也君！片桐紅也君！」

ギョツとして振り向いた瞬間に、しまったと思った。

訝しげにこちらを見た紅君と、ばつちり目があってしまった。

「あれ？ひよつとして……」

自分の名前を呼んだ美久ちゃんではなく、その後ろの私を見つめる紅君の表情が見る見る変わっていく。

（ダメだ……ダメ……！）

息をするのも苦しくなるほどに頭の中では繰り返しているのに、よく分かっているつもりなのに、目を離せない。紅君から視線が逸らせない。

だってそこには懐かしい笑顔があった。

私の事を　ちい　と彼だけの呼び名で呼んでいてくれた頃の、あの大好きな笑顔があった。

「兄さんから同じ学校だって聞いてたけど、全然見かけないから不思議に思ってたんだ……学年が違うとこんなに会わないものなんだね……」

本当は私が懸命に紅君を避けていただけで、普通にしていたらもっと早くに会っていただろうなんて事は、とてもじゃないけれど彼には言えない。

「うん……」

短い返事を返す私に、紅君はチラチラと後ろを振り返りながら問いかける。

「お友だち、本当によかったの？俺、邪魔しちゃったんじゃない？」
あんなに　会いに行こう！行こう！　と息巻いていた美久ちゃん

は、実際に紅君が私たちの前に現われたら、後は二人でごゆつくり！　なんて言いながら、若菜ちゃんたちと一緒にいなくなってしまう。

やっぱり私を紅君にどうしても会わせなかったただけなんだと、彼女の本音を思い知る。

紅君も、病院で目覚めた時以来三ヶ月ぶりに会った私に、話をしたかったんだ　と友だちとはあっさりサヨナラしてしまった。

電車に乗って帰る町も同じな以上、駅までの道もその先も、必然的に二人きりになってしまつて、どうしようもなく焦る。

（早く！早く紅君から離れなきゃ！）

私が傍にいたら彼に良くない事が起こると、そんな強迫観念にも似た思いを、私はどうしても捨て切れなかった。

「兄さんの彼女つてわけじゃなかったんだね……　僕の勝手な片思いなのに！　つて、後で散々怒られたよ……」

ちよつと笑い混じりの声で、蒼ちゃんの事をそんなふうに話す紅君は、倒れる前より昔の紅君に近いような気がした。

思わずその横顔を見上げてしまう。

明るくつて強くつて優しくつた子供時代の彼。あの頃の紅君が帰つて来るのなら、私の事なんて忘れてしまったままでも構わないと

——思わず願つた。

「何？」

ふいに視線を向けられるから、ドキリとして目を背ける。

「なんでもない……」

「そう……」

紅君は私の事なんて何も覚えていないのに、短いやり取りの中にも間違いなく流れる穏やかな雰囲気、昔のままで、懐かしくて、胸に痛かった。

クリスマスの街は一日限りの煌びやかな装飾に輝いていて、いつ

もの通学路もまるで夢の世界への入り口のようにだった。

だからすっかり忘れていた恐怖を、紅君が軽くこめかみに指を当てて立ち止まった途端、私は一気に思い出した。

背筋がゾツと凍るような気がした。

「どうしたの紅君！どこか痛む？」

思わず叫んだ私を、紅君は驚いたように見返す。

でもその表情は、見る見るうちに見惚れるほどの笑顔に変わった。

「頭がちよつと痛んだ気がしたけど、大丈夫……たいした事はないよ……それよりもその呼び方……」

ハツとして両手で口を覆ってももう遅い。

追い詰められた時に、私が思わず彼をその呼び名で呼んでしまったのは、もう二回目の事だ。

（なんて馬鹿なの……！もう本当に、自分で自分が嫌になる！）

悔しくって、腹立たしくって、唇を噛みしめて俯く私の耳に、紅君の声が聞こえて来る。

「なんだかしっくりくる……おかしいね……会ったのなんて二回目なのにね……」

思いがけない言葉に思わず顔を上げると、私を見下ろす紅君と目があつた。

なんだか不思議そうに、でもそれにも増して私に答えを求めるかのように、注がれる視線に金縛りになる。

（二回目なんかじゃない！私は子供の頃から、紅君の事をよく知っている！あの頃だつて今だつて……私は紅君の事が大好きで……！）

口に出して言えたならどんなにいいだろうと思う言葉たちを、私は全部飲み込んで、紅君に頭を下げた。

「ごめんなさい……やっぱり今日は美久ちゃんの家泊まるから……」

……一緒には帰れない……」

それだけ言つて、紅君の返事も待たずに駆け出すのが精一杯だった。溢れんばかりに目に浮かんだ涙がなんとか零れずに済む——それが私の限界だった。

「やっぱりお節介だったのかな……ごめんね千紗……」

真っ赤に泣き腫らした目で玄関の扉を叩いた私を見て、美久ちゃんは申し訳なさそうにそう言った。

心の中に溜め込んだ悲しい思いを、もうこれ以上一人で抱えている事が苦しくて、私は美久ちゃんに本当は紅君を子供の頃から知っている事と、紅君が私に関する記憶を二度もなくしてしまった事だけを伝えた。

「そうか……ごめん……」

しゅんと肩を落とした美久ちゃんは、台所に行ってミルクを温めると、それを持って私のすぐ隣に腰を下ろした。

「記憶が戻りかけたらまた彼が倒れてしまいそうで……千紗が恐いって思う気持ちはよく分かるよ……」

膝を抱えて座り込んだままの私は、その膝の上に額を乗せて、耳だけで美久ちゃんの話聞いていた。

「自分と会わなければいいんだって……逃げてしまおうと思う気持ちも分かる……でも……」

突然変わった声音に、私はつられるように顔を上げた。

美久ちゃんは手にしていたミルクの入ったカップを、ずっと私に差し出した。

「どんなに千紗が避けたって、今日みたいに会ってしまおうでしょ？……そこから逃げようとしたって、彼は千紗の事をやっぱり少しずつ思い出していくでしょ？……それって……」

言葉を区切って、美久ちゃんはちよつと照れ臭そうに笑った。でもその瞳は、ごくごく真剣だった。

「なんだかもう 運命 みたいに私には思える……ちよつと羨ましいくらいに……」

（私と紅君の関係は、そんなにいいものじゃないよ……！）
いったんは口にした言葉を、私は声にする事が出来なかった。

他の人にそんなふうにもらえて、嬉しい思う気持ちと恐いと思う気持ち。

いろんな感情が渦巻く中に、紅君に 好きだ と言われた時の、この上なく幸せな気持ちがあった。

もうずい分久し振りに、私はその時の気持ちを思い出した。

うん。俺も大好き！ちい！

そう言つてギュッと握り締められた手の温かさ、柔らかさ。

あの幸せを、五年ぶりに体の感覚として思い出した。

（紅君……！）

「運命なんじゃないかな……」

ロマンチストな美久ちゃんによしよしと頭を撫でながら何度もそう繰り返されて、ポロポロと頬を伝って落ちる涙が止まらなかった。

第五章 1

ロマンチストの美久ちゃんに、紅君との関係を 運命なんじゃないかな……なんて言われて、真に受けたわけではない。

でも、私と一緒にいると不幸にしまうとか。私の事なんて忘れてしまった方がいいとか。紅君との関わりをこれまで後ろ向きにしか考えられなかった自分を、ほんの少し変えようと思った。

無理をしたって紅君を想う私の気持ちは変わらない。だったらもうちょっと、ほんのちよつとだけ、自分の気持ちに正直でありたい。もう紅也君に近付かないで！ と女の子たちに詰め寄られても、決して曲げる事の出来なかった想いは、今もやっぱり私の心の中にしっかりと息づいているのだから――。

クリスマスのお弁当屋は、いつもとはまるで違った忙しさだった。パーティー用のオードブルやチキンバスケット。予約や店頭販売の分を合わせると、叔父さんと叔母さんと私の三人で休みなく働いても、とても終わりそうにはない。

昨日のイブは学校に行かせてもらったのだから、せめて当日ぐらいはもつと働きたいと、私も朝から厨房に入った。

今日のお店は、お客さんが来た時だけ誰かが店頭に立つという繁忙期のスタイル。

目が回るほどに働き、かなり疲れもピークにきた夕方。ドアの開く音に店頭に出て行った伯母さんが、ふいに私を呼んだ。

「千紗……出ておいで！」

揚げ終わったばかりのフライドチキンを箱に詰めて、呼ばれた方に顔を向けたら、カウンターの向こうに蒼ちゃんが立っていた。

「忙しそうなのに、すいません」

眼鏡の前で手を合わせて小さく笑う蒼ちゃんにお弁当を渡しながら、叔母さんが思いがけない言葉を口にする。

「いいんだよ気にしないで。千紗、ちょっと休憩しておいで……」
「えっ？でも……」

こんな状況の時にいいんだろうとか。蒼ちゃんと一緒に行けという事だろうかとか。私が躊躇する前に、叔母さんはさつさと私の分のお弁当も蒼ちゃんに手渡した。

「いいから。早く行って帰って来て、それから私と交代だよ」
せかせかとそんなふうに言われれば、後はもう急ぐしかない。
「うん」

エプロンを外しながら頷いて、私は蒼ちゃんと一緒に店を出た。

春から夏にかけて、蒼ちゃんが毎日のように店に通っていた頃と同じ時刻のはずなのに、外はもう真っ暗だった。

明かりの消えた商店街。薄暗い外灯が所々にポツンと建っている程度の通りだから、目を凝らせば夜空の星だつて見える。

昨夜、紅君と一緒に歩いたネオンの輝く街とはあまりにも違い過ぎて、その事になんだかホツとした。

自分が本来いるべき場所に戻って来れたような、そんな安心感に包まれた。

（ひよつとしたら、昨夜のあれは夢だったんじゃないかな……？）
もうやめようと思ったはずの後ろ向きの考えまで、また頭に浮かんで来る。

でも、私がそんな事を考えた瞬間、先に立って歩いていた蒼ちゃんが突然口を開いた。

「みんな元気だよ……毎日ご飯をもりもり食べてる……千紗ちゃんに会えなくて寂しがってる気がするから、そろそろ会いにおいでよ……」

誰がと言われなくても、蒼ちゃんが何の事を言っているのかはす

ぐに分かった。

私は勢い込んで返事する。

「うん。私も会いたい……！」

吹き抜ける風が頬に気持ちいいよりも冷たく感じるようになる頃。お弁当屋の裏で毎日ご飯をあげていた野良猫を、蒼ちゃんは全部自分で引き取った。

本格的に寒くなる前に屋根のある所に移す　とか、一日一食じやそろそろ足りなくなってきたみたいだ　とか、理由は色々語ってくれたが、私と毎日顔を会わさなくて済むようにというのが一番の理由だった事は、私にだって分かってる。

それまで当たり前のように二人で過ごしていた時間が、なくなってしまうのは寂しかったが、当然の事だとも思った。

誰といても何をしてても、結局紅君の事しか想えない私が、これ以上蒼ちゃんの優しさに甘えているわけにはいかない。

申し訳ない気持ちいっぱい、蒼ちゃんの決断に感謝する事しか出来なかったあの日から三ヶ月。

こうして蒼ちゃんの方から、会いにおいでよ　なんて気軽に口に出してもらえるようになった事が、やっぱり有り難かった。

まるで蒼ちゃんの優しさを知っているかのように、いつも足元にまとわりついていた猫たち。あの光景が私は大好きだった。

（きつと蒼ちゃんに甘やかされて、丸々と太ったんだろうな……どんなに大きくなったんだろう……？）

そんな事を考えて、初めてハツとした。

（蒼ちゃんの家に行くって……それって紅君の家に行くって事じゃ……？）

ふと足を止めて、困ったように蒼ちゃんの顔を見上げた私を、彼は以前と全く変わらない笑顔で見下ろした。

「大丈夫……そんなに自分を責めなくていいんだよ。気にしなくていい。紅也は、千紗ちゃんの事を思い出そうとしたから倒れたってわけじゃない……それに、どんなに千紗ちゃんが逃げようとした

って、僕の弟も僕以上になかなか諦めが悪い……」

屈託なく笑いながら蒼ちゃんが視線を向けた先に、私も目を向けて、泣きそうな気持ちになった。

そこだけ場違いにライトアップされた、ケーキ屋の大きなクリスマスツリーの前に、紅君が立っていた。

私と蒼ちゃんの姿を見つけると、満面の笑顔になる。その笑顔を目にすると、やっぱりどうしようもなく胸が苦しくなる。

「千紗ちゃんの事、僕は何も話さなかったよ……でも紅也が自分から聞いてきた。どんな子なんだ、いくつなんだ、兄さんとどんな関係なんだって散々尋ねるから、僕が好きだった子だよ、って答えたら、ホッとしたみたいに笑った……」

ドキリと胸が跳ねて、思わず蒼ちゃんの顔を見上げた。好きだった という表現に、私の胸の中の一部が、妙にざわついた。

蒼ちゃんはふわりと笑って、私の目を見つめたまますっかりと頷いた。

「好きだった んなら良かったって……過去形で良かったって……ああ、これが紅也の本音だったんだって、初めて分かった……その気持ちを封じ込めようと、あいつに無理をさせてたのは千紗ちゃんじゃない……僕だよ……」

「蒼ちゃん！」

それではまるで蒼ちゃんが悪いみたいだと。そんなの私は納得がいかない。声に出して抗議しようとした瞬間、大きな手が私の頭をポンと叩いた。

以前よくそうされていたように、宥めるように頭を撫でられて、自分が蒼ちゃんにそうやってもらうのがどんなに好きだったかを、やっぱり思い出した。

「僕は紅也に、千紗ちゃんを好きな気持ちで負けたとは思っていない……今だって君が大好きだし、幸せになって欲しいと思ってる……」

ダメだ、涙が零れる。蒼ちゃんが優しく、優しすぎて、それが

胸に痛い。

「でも……自分の弟ながら……ううん、自分の大切な弟だからこそ、紅也は凄いと思う。褒めてやりたいと思う。だってあいつは、何度千紗ちゃんの事を忘れたって、必ずまた君を好きになるんだ……！ 気持ちの深さや想いの確かさを計るとしたら、これ以上の証明はないよ……違う？」

言葉は違っても、蒼ちゃんの言わんとしている事は、昨夜美久ちゃんに繰り返された事によく似ていて、なおさら涙が零れる。「悔しいとか、苦しいとか……僕の中のいろんな感情をひとつひとつ整理していったら、素直に 凄い と思う気持ちが残った。紅也の諦めの悪さ……いや、想いの確かさに感動した。千紗ちゃんは？ 千紗ちゃんはどう思う？」

(どうって……)

頬を濡らす涙をてのひらで拭って、私は恐る恐る顔を上げる。

紅君の方を振り返って、こちらを真っ直ぐに見ている姿を見たら、もうそれだけでまた涙が浮かんだ。

「私は……紅君に笑ってほしい……それを遠くから見たいなら、私はそれだけでいい……」

フツと苦笑するように、蒼ちゃんが笑った気配がした。

「まったく……強情なところがそっくりだ……よく似てるね、紅也と千紗ちゃんは……」

思いがけない言葉に、蒼ちゃんの顔を振り仰ぐとすると、両肩をガシツとつかまれて、逆に紅君の方を向かされる。

「紅也が好き？」

これ以上ないほど優しい声で尋ねられて、どうしようもなく動揺する。

「……………」

「 だけど とか でも とかは無しね……好き？」

複雑に絡まった私の感情を解きほぐすかのように、蒼ちゃんの声が穏やかに問いかける。

ずっと離れた所に見えるのは、いつだって知らず知らずのうちに、私が視線を引き寄せられていたたった一人の人。

何度も諦めなくちゃと思って、忘れようとして、それでも絶対に私の心から消える事はなかった人。

明るい色の髪も。綺麗で澄んだ瞳も。満面の笑顔も。私を呼ぶ声も。大好きだった。ずっとずっと大好きだった。

溢れる想いを我慢出来なくて、私は紅君以外には伝えた事のない気持ち、初めて他の人の前で口にした。

「うん……紅君が好き……」

私の肩から手を離れた蒼ちゃんが、ポンともう一度私の頭を優しく叩いた。

「だったら難しい事は考えなくていいよ。遠くからじゃなくすぐ近くで、紅也だけ見てたらいいい……」

まるで後押しするかのように、後ろから軽く押し出されて、私は慌てて振り返ろうとした。

「千紗ちゃん！」

でも蒼ちゃんの穏やかだけどきつぱりとした制止の声は、私にその行為を許さなかった。

「紅也だけ見てればいいって……ね……？」

次第にか細くなっていく声が胸に痛くて、振り返りたいけれどそれは出来ない。

紅君が好き　と言い切ってしまった私は、蒼ちゃんの言うとおり、もう前だけ向いて進むしかない。

怖かった。本当にそれでいいのか。私が傍にいたらまた紅君をひどい目に遭わせてしまうのじゃないか。不安に押し潰されそうになった瞬間、こちらを見ていた紅君が身じろぎした。

まるで私を呼ぶかのように、ほんのちよつとだけ左手を差し伸べ、小首を傾げて笑った人に向かって、——私はついに駆け出した。

迷いや憂いを全部置き去りにしたら、蒼ちゃんが言ったとおり、もう紅君の姿だけしか目に入らなかった。

近付くと同時にどんどんはつきりとして来る紅君の笑顔が、私に「おかえり」と言ってくれているような気がして、それがたまらなく嬉しかった。

「どうしても今日中に会いたくて、兄さんに呼んで来てもらうなんて……俺ってひどいよね」

駆け寄った私の乱れた長い髪を、一房指ですくって直しながら、紅君は笑ってそう言った。

「兄さん、何か言ってなかった？あいつは鬼だとか、血も涙もないとか……」

冗談めかして笑う紅君の顔を見上げながら、私は首を振った。

蒼ちゃんは紅君の事を 凄いと褒めはしたけれど、怒ったような事は言ってなかった。どうして紅君がこんな事を尋ねるのかと、疑問に思う。

そんな私の気持ちを察したかのように、またちよっぴり紅君が笑った。

「自分がフラれた相手を 俺も告白したいから呼んで来てくれ なんて言われたら、俺だったらきつと怒ると思うんだけどな…… やっぱ兄さんって不思議な人だ……」

「……………！」

心臓が止まるような思いで、小さく息をのんだ。

「ごめん。ほとんどしゃべった事もないのに、変な事言ってるって自分でも分かってる。正直自分でもよく分からないんだ…… でもずっと気になってる。初めて会った時から、ずっとずっと気になってる……！」

「紅君……………！」

「クリスマスの日に一緒にいたかったなんて言ったら、ずいぶん俗物的に聞こえるかもしれないけど…… いろんな物を一緒に見たくて……………」

取りとめもなく話しながら夜空を見上げていた紅君の横顔が、ふいに喜びに輝いた。

さっき私に向かつて差し出されたと思った左手。そのてのひらを空へと向けて、次の瞬間、私の目の高さへと下ろしてくれる。

「すごい！寒いと思ってたら、ほら！やっぱり降って来た……！」

大きなてのひらの上で見る見るうちに形を失い、水滴へと変わってしまふ小さな白い結晶。

「雪……？」

呟いた私の顔を覗き込むようにして、紅君がそれはそれは嬉しそうに笑った。

「そう！一緒に見れてよかった。クリスマスの街も、冬の星空も、今年一番の雪も……他の誰でもなく君と一緒に見たかった……」

「紅君……！」

思わず漏れそうになった嗚咽を隠すように、私は自分の口と鼻だけを両手で覆った。でも目は隠せない。私はもう、自分を真正面から見つめてくれる紅君から、目を逸らしたくはない。

「他にもまだまだいっぱいある。見せたいもの、これから初めて一緒に見たいもの。数え切れないくらいいっぱいある！」

私の事なんて全部忘れてしまっているはずなのに、どうして紅君は、昔私にくれたのと同じ言葉を、また私にくれるのだろう。

そんな奇跡を目の前で見せられるから、運命だよ　なんて、想いの確かさだよ　なんて、美久ちゃんや蒼ちゃんが私に囁いてくれた身震いするほど嬉しい表現が、耳の奥に甦る。

「おかしな事言ってるって、自分でもそう思う。でもなんだか焦るんだ。君を見てると、自分の想いを早く言葉にしなくちゃ、伝えておかなくちゃって……妙に焦る」

「紅君……」

「俺……」

笑い混じりだった紅君が、ずっと表情を引き締めた。真っ直ぐに私を見つめながら、ゆっくりと口を開こうとする。

だから私は、彼が次の言葉を発する前に、無我夢中で彼の名前を呼んだ。

「紅君！」

「何？」

迷う事無く返事を返してもらえる事が嬉しくて嬉しくて、それだけで満足してしまいそうになる自分を、必死で奮い立たせる。

「紅君……！」

心臓が口から飛び出してしまいそうにドキドキしていた。息を吸うのも忘れてしまったようで、緊張のあまりに頭がクラクラする。

だけどそんな自分を励まして、私はもう二度と口にする事はないと諦めていた言葉を、五年ぶりに、彼より先に口にした。

「好きだよ。紅君。大好き」

大きく目を見開いた紅君の前に、震える手を差し伸べる。

私の顔からそつと視線を下ろした紅君が、まるで宝物でも手にするかのように、私の手を両手でそつと包み込んだ。

「うん。俺も大好き」

私の上にもう一度降って来た、私のためだけの大切な言葉は、昔よりずっと低い声だった。

でも昔よりずっとずっと大きくなった紅君の手は、昔と同じように温かかった。

傷ついて、悩んで、迷って、それでもこの手を離さずにいるためなら、どんなに苦しい事だって乗り越えていこうと、私に新たに決意させるほどの愛しい温もりだった。

固く繋ぎあつた手に、紅君の腕に、肩に、明るい色の髪に、白い雪が降りしきる。

軽く払ってあげようかと、繋いでいない方の手を伸ばしたら、その手をくぐり抜けるようにして、紅君の顔が私に近付いて来た。

軽く屈みこんで、顔を斜めにして、ほんの僅か、瞬きするくらいの瞬間、私の唇に触れていった冷たい唇。

「ゴメン。ほんつとゴメン」

首まで真つ赤になった紅君が、それでも私の手は離そうとせずに、照れたようにそつぽを向いてしまったから、私の中には嬉しい気持ちしかないはずなのに、また泣きそうになった。

（神様……お願い……もう紅君の記憶を奪わないで……！）

本当はいつだって心の奥底にひた隠しにしていた自分の本音を、思わず乞い願っていた。

あの春の日の桜の花びらのように、私たちの上に空から降りしきる雪を見上げながら、強く強く願わずにはいられなかった。

第五章 2

五年前のあの日。手に入れたと思った途端に、指の間から零れ落ちてしまった幸せを、やつとてのひらに握り締める事が出来たようなクリスマスだった。

まるで夢みたいで。現実だなんてとても思えなくて。ただただ真つ暗な夜空から次々と落ちて来る雪を見上げて立ちすくむ私に、紅君が問いかける。

「寒くない？」

ちよつと外に出たらすぐにまた店に戻るつもりで、外の寒さなんて全然気にしていなかった自分の服装に、改めて気がついた。

お店で働く時の制服代わりのポロシャツに、薄い上着。雪の中を歩くにはあまりにも軽装だった。

紅君に気を遣わせないように、すぐに「大丈夫だよ」と答えようとしたのに、それより先に、あつという間に彼は、自分が着ていたコートを私の肩にかけてしまう。

身軽になった紅君は、軽く頭を左右に振って髪に積もった雪を払い落としてから、私の手を引き歩き出した。

「紅君……！いいよ。紅君が風邪ひいちゃうよ……」

自分より薄着になってしまった彼にコートを返そうと焦る私を、まるでそうはさせないと言うような笑顔で、紅君は振り返る。

「平気だよ。全然気にならない……今なら俺、きつとなんだって出来るよ……なんだって！」

言葉と同時に、繋ぐ手にぎゅつと込められた力が、彼のその不思議な自信の源が他ならぬ私だと教えてくれる。

「紅君……！」

私だって同じだ。一番欲しくて、一番大切に、それなのに諦めずつと背中を向け続けて来たこの手を、もう離さずにいられるのなら、私だってきつと変われる。

幼い頃を感じたように、綺麗なままの私でいられる。

（でも……なんて答えたらいいんだろ……？　どう言ったら、私のこの想いが紅君に伝わる……？）

言葉なんて本当に無力で。私の溢れんばかりの想いを伝えるには、どんな言葉だつてまるで足りなくて。

だからずっと——こうして傍にいたい。背中を押してくれた蒼ちやんの言葉そのままに、ただ紅君だけを見ていたい。

でも、素直な感情だけで行動するには、私はあまりにも大きな秘密を、彼に対して抱えていた。

「見せたい物があるんだ」

私の手を引いて歩き続ける紅君は、どうやら私がいまだ得意ではない大通りへと向かっているようだった。

「大丈夫。近くだからすぐに帰って来れるよ」

時間の事を気にしてくれる言葉には「うん」と頷きながらも、私は実は、別の事が心配でたまらなかった。

急に降りだした雪のせいだろうか。たくさんの車が行き交う大通りは、いつも以上に多くの車で混雑している。

赤いテールランプに目を射られる。時折ブレーキの音を響かせながら、目の前を通り過ぎて行く車の列を目にすると、やっぱり体が震えだす。

私に何よりもの勇気を与えてくれる紅君の手を、しっかりと握っているはずなのにゾクゾクと背筋が寒くなった。

のろのろと歩く速度が遅くなった末に、とうとう一歩も歩けなくなつた私を、紅君は笑いながら振り返る。

「どうしたの？」

こちらを真っ直ぐに見つめる綺麗な瞳には、恐れと感情も悲しみの感情も全く無い。それだけが私の救いだった。

（よかった……！　紅君は事故の事を覚えていないから、私みたいに

苦しむ事はない……大通りを渡る事が出来なかったり、車が恐かったりする事もないんだ……)

五年が過ぎた今でも、ずっとずっと事故の事を引きずり続けている私には、紅君だけはそんな思いをしなくて済んでいる事が嬉しかった。

「大丈夫？」

きつとひどい顔色をしているだろう私に、紅君が優しく問いかけてくれる。

今この時。——もし真実を伝えるのなら今だ。

でもそれでは紅君まで、私と同じように苦しむ事になる。そして自分が守れなかったものの、失ってしまったものを知って、きつと深く自分を責める事になる。

責任感の強い人だから。誰よりも優しい人だから。真実を知った時の胸の痛みはどんなに大きいだろうかと思うと、とても打ち明ける事は出来ない。

それがどんなにずるい事であっても。大好きな紅君を陰で裏切る行為であっても。私には出来ない。

「うん……大丈夫……」

恐怖と緊張感と罪悪感でドキドキと高鳴る胸を、紅君と繋いでいない方の手で私が押さえた瞬間、頭上でカランコロンと澄んだ鐘の音が鳴り響いた。

「……………！」

思わず全力で、空に頭を廻らした。四方を確認した。だってそれはまるで——私が生まれ育ったあの街で、朝に夕に聞いていた鐘の音とそっくりだった。

キョロキョロと視線を廻らす私の様子を、満足そうに微笑んで、紅君が大通りの向こうを指差す。

「あそこだよ……ほら！」

普段はまるで気がつかない蔦の絡まった高い塀の向こうに、白い壁の小さな古い教会が見えた。

鐘楼の高さほどもある大きな大きなクリスマスツリーが、青いライトに照らされて、壁の向こうにほんの少しだけ頭を出す。

「あんな所に教会が……？」

大通りをなるだけ避けてはいるが、この道を通ったのは初めてではないのに、今までまるで気がつかなかったと呆然とする私を、紅君がクスリと笑う。

「うん。普段はもう使われてない教会らしいんだ。でも今日だけは特別……クリスマスだからね。朝、偶然あの鐘の音を聞いて、その瞬間君の顔が浮かんた。自分でもどうしてかなんて分らない……ただあの鐘の音を君にも聞かせたくて、兄さんに無理やり呼び出してもらった……やっぱり、これって変かな……？」

変なんかじゃないと。当たり前だと。叫んでしまいたかった。

私でもドキリとするくらいよく似ているのだから、紅君がこの鐘の音を懐かしく思うのは当たり前だ。

希望の家があつたのは、教会の敷地内。朝に夕に、私よりもっと身近にあの鐘の音を聞いていたはずの紅君ならば当然なのだ。

「紅君！」

思わず大声で呼びかけはしたが、踏ん切りはつかない。ここで私が言ってしまうていいのか。それとも黙っていた方がいいのか。感情ばかりが先走ってしまつて、冷静に判断出来ない。

「何？」

私が次に口を開くのを長い間待つてくれていた紅君が、ついに尋ねてきた。

「なんでもない……」

結局真実を口に出来ない私は、彼と一緒にいてひとつ幸せを感じるたび、ひとつ罪悪感を胸に抱え込んでいくばかりだった。

最後の予約客が注文していたオードブルを受け取りに来た後、ようやくお店を閉店にし、叔父と叔母と共に私は家に帰った。

宵の口に紅君と見た雪はもうやんでいたが、夜も更けて、寒さはかえって増したような気がした。

「お疲れさん……今日は本当に忙しかったねえ……」

ポンと肩を叩いて労わってくれる叔母を、申し訳ない気持ちで見つめる。

「うん。ごめんなさい……忙しい時間に、長々と休憩して……」

紅君と一緒に教会まで行った時間は、彼が言っていたとおりそれほど長くはなかった。でもその後がダメだった。

散々回り道してやっと辿り着いた紅君の隣から、私はやっぱり離れたくなくて、みつともないくらいにぐずぐずしていたと思う。

ようやく店に戻った時、叔父も叔母も何も言わなかったが、二人ばかりに負担をかけてしまった事は確かだ。

「ごめんなさい……」

繰り返す私の頭を、叔母がはたきのようにパーンと軽快に叩いた。

「何を言ってるんだよ、この子は！文句も言わずに朝からずっと家の手伝いしといて……こんな孝行娘はいないよ！……助かったよ。

ありがとう、千紗」

豪快に言ってハハハッと笑い出すから、ホツと肩の力が抜ける。

そうでなければ嬉しさに胸がつまって、思わず泣き出してしまふところだった。

「休憩だって……ほんとに帰って来なくても良いくらいだったのに……律儀に帰って来るんだから……なんてったってクリスマスだよ

？もつと好きな人と一緒にいたかっただろ？」

「叔母さん！」

からかうように顔を覗き込まれて大慌てした。私を誘いにお弁当屋までやって来たのは蒼ちゃんなのだ。私と蒼ちゃんは叔母が思っているような関係ではない。

「蒼ちゃんと私は……」

慌てて訂正しかけた私の声を、叔母はあっさりと遮った。

「知ってるよ。千紗が好きなのは蒼ちゃんの弟だろ。ずっと前に蒼

ちゃんに聞いた。だからそれぐらい、私だってちゃあんと分かっているよ……！」

ビックリした。まさか蒼ちゃんがそんな事を叔母に伝えていたなんて思ってもいなかった。

「それにね……あんたはまるで気付いてなかっただろうけど、弟君の方だって春からこつち、ずい分何度も店の前まで来てたよ……声もかけないで、ずっとあんたの事を、ただ見てた……あんな表情見てたら、蒼ちゃんじゃなくなたって、自分の事は棚に上げてでも応援してあげたくなっちゃうよね……」

ドキリと跳ねた心臓が、思わず口から飛び出してしまうかと思っ

た。立ち止まった私と叔母を置き去りに、叔父はなんにも聞こえないフリでさっさと先に歩いて行ってしまう。

その背中を見送りながら、どうしようもなく頬が赤くなっていくのが、自分でもよく分かった。

「大事にしなよ。自分の気持ちも相手の気持ちも……想って想われる相手に出会えたなんて……それだけで幸せな事なんだよ」

バシンと今度は私の背中を叩いて、叔母は叔父の後を追って歩き出した。

「だからどんなに忙しくたって、私は幸せ。こんな話……あの人は秘密だからね！」

しいつと人差し指を口の前に当ててみせる仕草に、思わず笑ってしまった。

同じように笑って歩き続ける叔母を追いかけて、また一つ、自分の幸せを自覚した夜だった。

冬休みの間も時間を見つけては度々会いに来てくれた紅君は、三学期が始まる日の夕方、私を迎えに来た。記憶を失う前の日々のように――。

「一緒に学校に行こうと思って……」

そう言って笑う顔を見てみると、以前もそうしていたんだという事を黙っている自分が、どうしても後ろめたくなる。

言った方がいいのだろうか。それとも言わない方がいいのだろうか。迷うばかりの私は、ちゃんと彼の前で笑えているのか。自信はない。

でも紅君は笑ってくれた。いつだって屈託の無い笑顔で、私に笑いかけてくれた。だからなおさら苦しくなる。黙っている事が辛くなる。

「じゃあ言っちゃいなよ……！」

だらしなく弱音を吐く私を、後押しするかのように美久ちゃんが言い切った。

4時間の授業が終わった後の教室。一緒に帰る紅君を待っている私に、付き合って残ってくれていた美久ちゃんは、呆れるでもなく投げやりでもなく、真剣にそう言ってくれた。

「だって……」

それで紅君が傷つくのじゃないかとか。苦しむのじゃないかとか。ひよつとすると記憶を取り戻しかけてまた倒れてしまうのじゃないかとか。不安ばかりが心を過ぎる私を諫めるかのように、ハッキリと告げてくれる。

「黙ってたってきつと思いつく……！千紗と一緒にいたら、きつといつかは思いつくと思う……！」

「そうかな……」

半信半疑で眉を曇らせる私に向かって、美久ちゃんはしっかりと頷く。

「そうに違いないよ。なんなら……証拠を見せてあげる」

「証拠……？」

首を捻る私に、美久ちゃんはそつと耳打ちした。

これから教室を出て、途中で紅君に会っても、気がつかないフリをして通り過ぎろと。そのまま私が行ってしまおうとしたら、紅君

は私の事をなんと呼ぶか、確かめてみると。

再び記憶を失ってからは、やっぱり名前ではまだ一度も呼んでいない私の事を、彼は何と呼ぶのだろうか――。

「それって……！」

彼が私に付けた子供の頃の呼び名を無意識に呼んだ途端、ふいに倒れてしまった4カ月前の姿が思い出されて声が震える。

「大丈夫。千紗の事を思い出したから倒れた訳じゃないって、お医者さんにも言われたんでしょ？大丈夫。大丈夫だから……ね？」

「でも……」

「いいから！ほら！早くしないと来ちゃうよ！」

急かされるままに立ち上がって、まだ何の心の準備も出来ないでいるうちに、廊下の向こうからやって来る紅君の姿が見え始める。

ドキドキと心臓がせり上がって来る私の耳元で、美久ちゃんがそつと囁く。

「千紗……私は確信してるよ。放っておいたって彼は、だんだんあなたの事を思い出す。だったらあなたの口から、昔何があったのか、四ヶ月前にも何があったのか、ちゃんと説いた方がいい……先に説いた方がいいって……！」

「でも……！」

惑う間にも背中を押されて、私はついに歩き出した。ズキリと痛む胸を我慢して、紅君の横を黙ったまますり抜ける。

（ゴメンね……紅君！）

「あれ？」

紅君は驚いたように立ち止まった。

「どうしたの？」

問いかける声に背中を向けたまま、私は真つ直ぐに歩き続ける。
（そんな自信なんてない……！何もしなくても紅君がいつかはきつと私の事を思い出すなんて……そんな都合のいい事、考えられない……！）

首を横に振って、希望を否定して歩きながら、それでも本当は心

のどこかで信じていた。彼の事を信じていた。

「あれ……どうした？ねえ……どうしたんだよ？」

驚いても、追いかけて来てはくれない事に感謝しながら。声をかけられているのに無視している苦しさ在必死で耐えながら。――私は祈るように願ひ続けている。

紅君は私の事を思い出さない方がいい　なんて建て前、とつくの昔に剥がれ落ちてしまっていた。

思い出して欲しい。本当は思い出して欲しい。――自分でももう、自分の本当の本音は分かっている。

「待てって！………ちい！」

そう――分かった。彼はきつと私の事をその呼び名で呼んでくれるって、頭のどこかで信じていた。少しの疑いが入る余地も、本当は最初からなかった。

「紅君！」

たまらず振り返って駆け出した私を、紅君が両手を広げて受け止める。

「……びつくりした！俺の声が聞こえないのかと思った……昔から何度も見てるあの悪夢みたいに……声が届かなくなったのかと思った……！」

驚いて、思わず私は紅君の顔を見上げた。すぐ近くから私を見下ろす紅君は、いつものように笑顔だったけれど少し寂しそうだった。「顔もわかんない……名前もわかんない女の子が、何度も夢に出て来るんだ。なんだか悲しそうにその子が泣いていても、俺はなんて声をかけていいのかが分からなくて……せめて泣かないで……って伝えたいのに声さえ出なくて……きつとやらなくちゃいけない事だっであつたはずなのに、それが何だったのか思い出せない……悔しくって、もどかしくって、見る度に焦らずにいられない夢……あの夢に出て来る女の子を、ちに初めて会った時から、ちに違いないって俺は思ってる……！変だよ……ちいよりずっとずっと小さい小学生くらいの女の子なのにな……」

紅君の声が震えてる。事故の後、初めて再会したあの頃のように、不安げに苦しげに揺れている。

「紅君！……紅君！」

私は無我夢中で彼を抱き締めた。

（これじゃダメだ……！）

苦しいのは自分だけでいいと思ってた。全てを忘れてしまっても、それで紅君が苦しまなくて済むのならそれでいいと思ってた。

でも思い出せない事で紅君が苦しむのなら、美久ちゃんの言う通り、私がいくら我慢して黙ってたって、それはもう何の意味も無い。

「なに？……ちい……どうした？」

優しい、優しい声で呼ばれて、私は決意した。彼に全てを告げようと決心して、顔を上げた。

「聞いて欲しい事があるの……ずっとずっと……紅君に言いたくて、言いたくなかった事……」

紅君が、それまで曇っていた表情を払拭するように、ふわりと笑った。

「なに？……なんだか俺みたいにおかしな事言ってるよ？」

「うん。でも本当なの。どちらの気持ちも、私の本当の気持ちなの。上手く気持ちを伝える言葉なんてまるで浮かばず、ただ思いついたままに口を開く私を厭いもせず、紅君は笑う。」

「いいよ、なんだって聞く。ちいの言葉ならいつだって……」

「うん」

抱き締めてくれる腕に負けないくらい、私も大好きな人の体を抱き締め返した。

願わくば——全てを語った後でも彼が私の事をまだ覚えていてくれますように。

これまでどちらかと言えば、私に過酷な試練を与える事の多かった運命に、全身全霊で祈った。

第五章 3

大きな川沿いに工場が並ぶ、空の高いあの街で、私は生まれ育ち——紅君と出会った。

運動も勉強も出来て、いつだってみんなの中心で笑っているような男の子だった 小田紅也 君は、街に一つしかない教会の片隅に建つ福祉施設から学校に通って来ている子だった。

でもそんな事は微塵も感じさせない、いつも楽しそうに笑っている子だったから、五年生の冬、初めて話をしたあの放課後に一緒に学校から帰るまで、私はそんな事は全然知らなかった。

当時、私は母の再婚相手の澤井から暴力を受けていて、それを心配した紅君は、福祉施設 希望の家 の園長先生に私の事を話してくれた。

教会の牧師でもあった園長先生は、本当に思いやり深い優しい人で、私にも何度も「辛かったらここに来なさい」と声をかけてくれた。

実際に澤井の暴力がエスカレートして、私が 希望の家 に身を寄せていた時に、——事件は起きた。

母と口論になった澤井が母を刺し、そのまま逃走して 希望の家に火を点けたのだ。

おそらくはそこに私がいると思つての犯行だったのだろう。けど私はその時間、まだ学校から帰って来ていなかった。

帰宅途中で、母が病院に搬送された事と、希望の家の火事を知った私は、紅君と一緒に 希望の家 に向かう方を選んだ。

そこで私たちが帰って来るのを心待ちにしている小さな子供たちを、なんとか救いたい一心だった。

その後、もちろんすぐに母のところには駆けつけるつもりだった。でも、そのどちらにも、私たちは間に合う事は出来なかった。学校帰りにいつも二人で乗っていた私と紅君の赤い自転車は、大

きな国道に差し掛かった所で、横滑りに突っ込んで来た大きなダンブカーと正面衝突した。

まるでミニチュアのおもちゃのように、歪んで空に飛ばされた自転車と、通りの真ん中に倒れた紅君。

あともうほんの少しの所に迫っていた火事の黒煙と、炎にも負けないくらいに赤く燃えていた夕焼け空。

——その全てを、私は鮮明に覚えている。

自分も背中からガードレールに打ち付けられて、視界に黒い染みが点々と広がっていく中、完全に紅君の姿が見えなくなるまで、私はただ一心に祈り続けた。

お願いだから、誰か紅君を助けて。と――。

別々の病院に搬送された紅君とは、それきりもう会う事はなかった。

意識が戻る事なく亡くなった母と、火事の犠牲となって亡くなった園長先生とも。

五年前のあの日。私は文字どおり、自分をそれまで愛しみ、自分自身も大切に思っていた人たちを、みんないつぱんに失くしたのだった。

私にとって、五年前のあの出来事は本当に心を引き裂かれるように辛い出来事で。

だからつつかえつつかえ、時には涙でしゃべれなくなりながら、全てを語り終わるまでには長い長い時間が必要だった。

夜間学校の帰りに立ち寄った、蒼ちゃんの大学近くの公園。

去年、四年ぶりに紅君と再会したその場所で、私はついに彼に全てを打ち明けた。

紅君は私の話に一度も口を挟む事なく、深く俯いたまま、長い長い告白をただ黙って聞いてくれた。

「だから……私と紅君はこの町で初めて出会ったんじゃない……
はじめまして じゃないの……」

恐くなかったわけじゃない。私が話す事で紅君の記憶が揺さぶられて、また以前のように倒れてしまったらと思うと、恐くてたまらなかった。

でもぎゅっと両手を握り締めたまま、頑なに俯いたまま、全てを受け入れようとしている紅君の姿を見ていたら、途中で言葉を濁す事も、もうやってはいけないと思えた。

これまでずっと全てを黙ったまま、そ知らぬ顔で紅君の傍に居続けた私の罪を、もう誤魔化してはいけない。

「ゴメン……ゴメン紅君……」

五年前のあの事件の事も。私のせいで紅君が失った様々なものも。悪い事だと知りながら、それでもやっぱり何度も何度も紅君の手を取った――それだけは諦め切れなかった私の想いも。みんなみんな――。

「ごめんなさい……！」

繰り返すしかない懺悔の言葉に、ストップをかけてくれたのは紅君ではなくて、告白に立ち会ってくれていた蒼ちゃんだった。

紅君にもしもの事があった時や、私が途中で話せなくなった時のために、少し離れた所で私たちを見守ってくれていた蒼ちゃんは、身動き一つしない紅君を心配げに見ながら、私の前に走り込んで来た。

「もういいよ！もういいって！千紗ちゃんが悪いんじゃないんだから！……そうだろ紅也？」

いつものお前だったら、すぐにそう言い出すだろ？ とでも言いたげに、珍しく苛立たしげに蒼ちゃんが紅君を振り返る。

それでも紅君はやっぱり俯いたまま、ピクリとも動かなかった。

「でも……！ごめんなさい……」

紅君と並んでベンチに座っている事さえ辛くなって、転げ落ちる

ように彼の前の地面に座り込んで、足元にうずくまるように頭を下げた私を、蒼ちゃんが立ち上がりさせようとする。

「千紗ちゃん！」

「いいの！……いいの！」

その優しい手を振り払って、地面に突っ伏した私の上に、誰かがふっと屈み込んだ気配がした。

（……………？）

恐る恐る顔を上げて確かめようとした瞬間、息も出来ないくらいに強く抱き締められた。

「ちい！」

私の頭をかき抱くように自分の胸に抱き込んで、地面から抱き起こした人物が紅君だと気がついて、一気に涙が溢れた。

（紅君……！）

全てを話す事で紅君との間に溝が出来ても。今までのように彼が私に好意を示してくれなくなっても。それでも構わないと決意していた。

していたけれどやっぱり、そう思うと辛くて悲しくてたまらなかった。

ボロボロに傷ついていた心が、ただ一人、紅君の言葉だけで行動だけで救われる。

「ちい……ちい！……どうして今まで……！」

苦しい息を吐き出すように切れ切れに話す紅君が、その後に言ってくれようとしている言葉が分かってしまっ、いっそう涙が溢れる。

（いいの！……私が黙っている事で紅君が傷つかないのなら……笑っていられるんならそれでいいと思ってたの！……だけど……だくだ！）

伝えたい言葉は、もうそれ以上は何一つ声にはなってくれなくて。ただ嗚咽をこらえて泣き続ける私を、紅君は上向かせ、瞳を覗き込むようにして見つめる。

「ゴメン。俺の方こそゴメン！……ちい一人に辛い思いをさせてゴメン……！」

いっばいに涙をたたえた紅君の瞳は、子供の頃と少しも変わらず、綺麗な澄んだ色をしていた。

強くて優しい、私の大好きな紅君そのもののように、私が全てを語り終えても、何一つ変わってはいなかった。

「守ってやりたいって……何からも絶対俺が守ってやるんだって、強く思ってた気持ちは覚えてる！……その相手がちいだったって事は、記憶がなくなっても分かるよ。俺の全部で確かに分かる！……！だから……！ゴメン！一番辛い時に、一番ちいの心を守ってやらないといけなかった時に、傍にいてやれなくてゴメン……！」
（ああそうだ……そうだね……私の大好きな紅君は、こんなにも優しく……そして強い人だった……！）

もう一度かき抱くように紅君の胸に抱き締められながら、私は五年ぶりで本当にあの頃の紅君が帰って来たような錯覚を感じていた。

事件の事を知ったら紅君が傷つくかもしれないとか。知らない方が幸せでいられるんじゃないかとか。

そんな理由はみんな、紅君に真実を伝える事が恐かった私が、後になって作り出した言い訳のように思える。

紅君はそんな事で絶望したり、後悔ばかりを繰り返してこれからの人生を台無しにしてしまうような——そんな人ではない。

頭のどこかでは確かに分かっていたはずなのに、ただ恐くて——。

私は紅君と再会してからの一年間。うつんそのずっと前——あの事故の直後から。

全てを話したら、彼に自分が嫌われるかもしれないという恐怖に、ただ怯えていただけだったのかもしれないなかった。

それきり言葉もなく、ただお互いを抱き締め合ったまま、長い間地面に座り込んでいた私と紅君の上に、フワリと柔らかなストールが掛けられた。

私がベンチに置き去りにしていたそのストールを、寒くないようにと掛けてくれたらしい蒼ちゃんは、わざわざ私たちと目線の高さを合わせるようにしやがみこんでから、眼鏡越しにニツコリと笑う。「そろそろ立ち上がらないと風邪引いちゃうよ。……なんなら千紗ちゃんだけでも僕が抱き起こそうか？」

「蒼ちゃん！」

自分の腕の中で小さく叫んだ私を、まるで蒼ちゃんから隠すように紅君がなおさら抱き込んだ。

「いくら兄さんでも渡さないよ……ちいだけは」

「ハハハッ。わざわざ言われなくたって知ってるよ。そんな事は……」

……

蒼ちゃんはすぐに立ち上がって、私たちに背を向けて歩き出す。

「でも紅也が自分の後悔だけで頭がいっぱいになって、今の千紗ちゃんを気遣ってやれなくなったら、いつだって僕が横からさらって行っちゃうよって事……」

笑いながら去って行く背中、私は慌てて呼びかける。

「蒼ちゃん！」

「ハハハッ。冗談、冗談……」

後ろ手に手を振りながら遠くなつて蒼ちゃんの、それは彼の言葉通り冗談なのか。それとも本気なのか。私には判断はつかないけれど、紅君はすぐさま地面から立ち上がった。

「分かってる。ちいが傷付かなくてもいいように……これ以上泣かなくてもいいように……俺にとってだって、それがあの頃からの変わらない願いなんだ！」

座り込んだ私の腕を引き上げながら、紅君が蒼ちゃんに向かって放った言葉にドクンと胸が鳴った。

（あの頃からの……？紅君？……まさか？）

驚いたように彼の顔を見上げる私に気がついて、紅君は小さく笑った。

「思い出したわけじゃないよ。ゴメンちい……でも一緒にいた頃に自分がどんなにちいを好きだったのかは、なんとなく分かるんだ。理屈じゃなく分かる……一番真つ先に、それも一度じゃなく二度も……忘れてしまった記憶なのに……ゴメンね……」

私は慌てて、否定の意味で首を左右に振った。そんなに何度も紅君に謝られるような事ではない。いや、それよりもむしろ――。

（嬉しい……！他の誰でもない、大好きな紅君が、自分の事をそんなふうに言ってくれる事が嬉しいよ……！）

ポロリと私の頬を伝って落ちた涙を、紅君が指ですくった。

「泣かないで。もう忘れないから……何があっても、もうちいの事は忘れない……！失った記憶だって、きっといつか取り戻すから……」

……
そんな無理なんかしなくてもいいよと、言いかけた唇は、紅君の冷たい唇でそつと塞がれた。

「俺。この冬の間に、もう一度あの街に行つて来ようと思う。きつと今だったら、夏に行つた時よりいろんな事を感じる事が出来そうだから。ひよつとしたら記憶だつて戻るかもしれないよ……？」

満面の笑みで私に語りかける紅君につられるように、私の頬も緩んだ。自分でも思つてもみなかつた言葉が、自然と口から出て来る。「紅君。私も……」

一緒に行きたいなんて図々しすぎるだろうか。それも日帰りでは到底歸つて来れないあの街に、二人きりで旅したいだなんて――。

一瞬言いよんだ私に、紅君はますます晴れやかな笑顔を向けてくれた。分厚い冬の雲も吹き飛ばしてしまひそうなほどの、眩しい笑顔。

「一緒に来てくれる、ちい？ちいと一緒だったら、きっと、もつと可能性があると思う……！」

勇気を出して口にする前に、そのものズバリを先に言われてしま

って、ホッとすると同時にドキドキする。

（本当に……？ 思い出がいっぱいのあの街と一緒に廻ったら、紅君は記憶を取り戻すかな……？）

少しの期待と。

（でも……無理をしたらまた倒れてしまったりしない……？）

少しの不安。

相反する二つの思いを胸に抱いたまま、その数日後。私は五年ぶりで生まれ育ったあの街を訪れた。紅君と二人で――。

第五章 4

五年前、雨の中で泣きながらサヨナラした私の生まれ故郷は、当時とそれほど変わってはいなかった。

街を縦断するように流れる大きな川も。街のどこからでも見える製鉄工場の煙突群も。そこから吐き出される煙によつて、街全体が独特の匂いがするところまで、まるでそのままだった。

「懐かしい……」

横に並ぶ紅君にはこの街で暮らした記憶がない。それを気にする事も忘れて、思わず呟いた私に、彼はニツコリと笑いかける。

「良かったね」

ハッとその笑顔を見つめ返した。

私が ごめんなさい と謝る事を、紅君は決して望んではない。それが分かっていたから、私はただ心のままに素直に頷く。

「うん」

こんなに穏やかな気持ちでもう一度この道を歩けるとは、私自身も思っていなかった。

全てを失くして、ボロボロに傷付いた心で、逃げるようにこの街を出たあの日に、それまでの自分とは全部サヨナラしたつもりだった。だけど――。

もう一度、隣を歩く紅君の横顔を見上げる。

まるで何かに導かれるかのように、彼はなんの迷いもなく昔二人で歩いたこの土手の道を選んでくれた。

冬の冷たい風から私を守るように、すぐ隣を歩いてくれている人は、夢でも幻でもない。確かに本物の紅君だ。

もう二度と会う事は出来ないと思っていた。だけどころな偶然が重なって、私たちはもう一度めぐり会い、そしてここに一緒に帰って来る事が出来た。だから――。

もう背中を向けなくてもいいんだと、自分に言い聞かせる。

辛い出来事と一緒に、全部封印してしまっていた大切な思い出を、きつともう取り戻してもいい。心の中で抱き締めていていい。

（だって紅君はいてくれる……ちゃんと私の傍にいてくれるんだもの……！）

その事が何よりも嬉しく心強い。

あの頃とまったく変わりなくドキドキと胸を高鳴らせながら、私はずっと紅君を見ていた。

大好きで大好きで、いつだってこの風景の中で懸命に姿を探してたたった一人の人を、すぐ隣で見上げていた。

紅君はあまり多くを語らなかった。

昔二人で行った場所に行き当たると、ここから通りに出て行ったら小学校だよとか、ここに紅君は自転車を隠していたんだよとか、短い説明を加える私に、それはそれは嬉しそうな笑顔を向けてくれる。

けれどしばらく立ち止まって、周りの風景に目を向けているばかりで、自ら口を開こうとはしない。

その沈黙が、やっぱり彼の記憶はそう簡単に取り戻せるようなものではないのだという事を、私に思い知らせた。

（ごめんね……）

また謝罪の言葉が口から出そうになって、そんな思いを私は必死に振り払う。

「どうしたの？」

顔を覗き込むようにして尋ねられて、慌てて俯けていた顔を上げた。

「なんでもない」

精一杯の笑顔で答えた瞬間、柔らかな鐘の音が、冬の冷たい空気を震わすようにして、高い空に響き渡った。

ピタリと一瞬足を止めた紅君が、驚きに目を見張る。

「凄い……！本当に……この音だ……！」

クリスマスの日。私を感じたあの感動を紅君も感じてくれた事が嬉しい。

「うん。そっくりでしょ？だから紅君が、あの時、教会の鐘の音が気になったのは、当たり前前の事なんだよ……」

うんと頷いた次の瞬間、彼は私の手を引いて、先に立って歩き始めた。

「あの鐘が聞こえる先に、俺が昔住んでいた場所があるんだよね……？」

ドキリと心臓が跳ねる。

「うん。でも、もうあそこには……」

言いよどむ私に向かって、紅君はしっかりと頷いた。

「分かっている。建物自体も残ってないって、分かっているよ……兄さんも何度か連れて行ってくれた事があるんだ。たぶんあの場所だと思う……でも……やっぱりちいと一緒に違う気がする……」

「えっ？」

驚く私に顔だけ半分振り返って、やっぱり笑いかけ、紅君はもう一度前へと顔を向け直す。

「頭の中の記憶じゃなく、体が覚えてる感覚……って言うのかな？……こうして並んで歩くのが当たり前だったり、だったらこっちへ進むのが当然だったり……」

「紅君……！」

「ごめんね……思い出したわけじゃない……でも確かに、二人でいるのが自然なんだ……この風景の中でちいと一緒にいるのが……！」

「……………」
浮かびそうになる涙を必死にこらえて、少し急ぎ始めた紅君の歩調に合わせて、私も懸命に歩く。

私の手を引いて歩き続ける紅君の広い背中が、五年前のあの日、私を自転車に乗せて急いだ小学生の紅君の、小さな背中と重なるような気がした。

五年の空白を飛び越えて、二人であの日に戻ってこれたような気がした。

——でも。だからこそ恐くなった。

希望の家 があつた教会が少しずつ近付いて来る。

私が道案内なんてしなくても、紅君は迷う事無くそちらに向かつて進んでいる。

その事自体はたえようもなく嬉しいが、目的の場所が近付くにつれ、私はどんどん恐くなる。息をする事さえ苦しくなる。

逃げ出そうとする足を励まし、萎縮する心を奮い立たせようと懸命に努力したが、どうにも辛くてたまらなくなつて、土手が終わつて長い坂道を国道へと下つて行く途中で、震える声で紅君に呼びかけた。

「ごめんなさい……紅君……ちょっと待って……」

「えっ？……」

驚いたように紅君は足を止めた。

「どうした？……ちい？……」

体を屈めるようにして、私と目線を合わせてくれた紅君は、冷たい風に頬を赤くし、ちよつと息を弾ませてはいるけれど、いつも通りの彼だ。

記憶のない彼には、この道に対して特別な感情など、今はきっとない。

けれど私の方はそうはいかなかった。

二人で自転車に乗つて事故にあつたあの国道が近づいてくる事が恐くて恐くて、自分でも知らないうちに、涙が頬を零れ落ちている。冷たい指先で私の涙をすくつてくれた紅君に、上手く自分の気持ちを説明する言葉なんて見つからなかった。

（行かなくちゃって思う……事故の後も何度も何度も、あの場所にもう一度行ってみなくちゃって思った……けどどうしても出来なかった。出来なかったの！）

紅君と二人で、毎日自転車で走った 希望の家 までの道。

あの大好きな道が、私の中で恐怖の象徴となった日から、私は本当に一度もその場所を訪れていない。

だから私の中であの場所の風景は、いつまでも五年前の初夏のままだった。

道路の中央に倒れ込んだ紅君に向かって、ダンプカーがもう一度突っ込んで行く光景のままだった。だから――。

（無理だ。動けない）

ぼろぼろと涙を零しながら、ぎゅっと目を閉じて俯いた私の両手を、紅君がそつと掴んだ。そのまま上へと持ち上げて、冷たくなった自分の頬に押し当てる。

「俺はここにいるよ」

優しい声に導かれるように、私は涙で濡れた目をそつと開けた。

私のすぐ目の前で、大好きな人が微笑んでいた。

頬に当てられた私の手の上に、紅君はそつと自分の手を重ねる。

「ちゃんとちいの傍にいるだろ？だから大丈夫……もう何も心配しなくても大丈夫なんだ」

記憶がないのに。私は何一つ自分の気持ちを伝えられないのに。

どうして紅君には、今私に必要な言葉が分かるんだろう。

五年もの間、ずっとずっと私を苦しめてきた呪縛が、紅君の言葉によって、てのひらから伝わってくる彼の頬の確かな温もりによって、雪が解けるかのように消えていく。私の中からなくなっていく。

「紅君……」

「うん」

「紅君……！」

自分から彼の顔を引き寄せて、涙に濡れた自分の頬を夢中で押し当てた私を、紅君が抱き締めた。その確かな腕の強さが、私にまた、

これが夢ではないという確かな確信をくれる。

「よかった……」

全身で安堵して、ほっと息をついた私をクスリと笑って、紅君は顔を斜めに傾けてそっとキスした。

「うん。よかった」

繰り返される言葉が嬉しくて、おかしくて、やっと笑顔になる事ができる。

私の涙を丁寧にも何度も拭ってから、紅君は再び私の手を引いて歩き出した。

「行こう」

固く繋いだこの手を放さずにいられるのなら、もうあの国道だつて恐くはないだろうと思った。

片側二車線の広い道路は、目の前にしたらやっぱりただの普通の道路だった。

歩行者信号が青になるのを待って、紅君と手を繋いだまま一気に渡りきったら、何がそんなに恐かったのかさえもう分からなくなつた。振り返って見てみても、道路の中央に横たわる小学生の紅君の姿はもう見えない。

当たり前と言えば当たり前なのに、五年間もの間、ずっと私を苦しめてきた呪縛。それは他ならぬ紅君自身によって解かれた。

「……行くよ、ちい」

振り返って立ち止まっていた私を呼ぶ声に、急いで前を向き直してもう一度歩き出す。高い塀が続く通りを右に曲がったら、懐かしい教会の聖堂が私たち二人を出迎えてくれた。

教会名と共に掲げられていた 希望の家 という木製の看板は、すでに塀から取り除かれていた。

他の壁とはほんの少し色の異なる看板跡が、胸に痛い。

私が俯いた瞬間に、繋いだ紅君の手にギュツと力がこもった。

「行くよ」

手を引かれるまま、教会の敷地内へと入って行く。

夏にこの街を訪れた時にも、紅君は教会に立ち寄っていたようで、園長先生の後に牧師職を受け継いだという日本人の男性は、私たちを快く迎え入れてくれた。

「ようこそ…… またお会いできて光栄です……」

紅君と握手を交わしながら、聖堂の奥の離れの住居部分へと誘ってくれようとする牧師に、紅君がやんわりと断りを入れている。

「ちよつと立ち寄っただけですから……」

「まあまあ…… そんな事おっしゃらずに……！」

二人の会話を耳だけで聞きながら、私は周囲に視線を廻らしていた。

以前 希望の家 があつた場所は今では花壇になっていた。その代わりに以前畑があつた辺りに新しく建てられたこじんまりとした建物が、どうやらこの牧師さんが生活している住居部分らしい。

三十代後半ぐらいの、独身一人暮らしだと聞いていた牧師さんの家の前に、小学生ぐらいの男の子が立っていて私は首を捻った。

（あの頃みたいに福祉施設があるわけじゃないのに…… 子供……？）

ちようど紅君と牧師さんの会話も、その事に言及し始めたところだった。

「いえね…… あなたが来るのを楽しみにしていた者がいるんですよ…… いや、私じゃなくて、ついこの秋から養子にして、一緒に暮らし始めたばかりの子なんですけどね……」

こちらに気がついたその男の子が、ハツとしたように歩み寄り始めて、それまで見えなかった顔がハッキリしてくると同時に、私は自分の口元を両手で覆った。

よく機転の利く賢そうな目。一言多いと言つては、紅君によくたしなめられていた大きな口。楽しい事にも大変な事にも、いつもみ

んなを率先して真つ先に走り出していた元気な姿。

五年の月日の間に、すっかり大きくなってはいたが、彼は確かに私と紅君の良く知る少年だった。

「以前、ここの福祉施設にいた子なんですよ……だからあなたの事もよく知っていて、会いたい！会いたい！って楽しみにしていたんです……おい、翔太！」

翔太君は牧師さんの呼びかけに従って、歩み寄って来ていた足を駆け足に変えた。

「こう兄ちゃん！」

満面の笑顔で駆け寄って来る彼は、身長は高くなっただけで全然変わっていない。紅君の事が大好きで、誰よりも尊敬していた、希望の家で一緒に暮らしていた翔太君のままだ。

でも、だからこそ、私は胸がギュツと苦しくなった。

（紅君は翔太君の事を覚えていない……！）

あんなに紅君の事が好きだったのに、そう知ったらどんなに翔太君が傷付くかと思って、私は思わず自分が先に歩み出た。

「えっ？もしかして、ちいねえちゃん……？」

一瞬、私の事を翔太君が恨んではいないだろうかと心配もしたが、そんな思いは無用だった。

いかにも男の子らしいやんちゃな表情をくしゃっと歪ませて、彼は目に涙を浮かべる。

「なんだよ。よかった……ちゃんと元気にいるんじゃない！……もうどこにもいないなんて、大人たちはみんな口を揃えて言うから、俺てつきり……！」

腕でグイツと涙を拭き去ると、ニカツと私の良く知る笑顔になる。「二人で来たの？あれからずっと一緒にいるの？ひよっとして、付き合ってるの？」

私たちのほうがかなり年上だというのに、相変わらずからかうように、矢継ぎ早に彼は問いかける。

その全てに、私は紅君より先に答えを返そうとして、そうする事

はかなり難しいと言葉に詰まった。

「ええっと……」

瞬間、後ろから誰かが私の肩をぐいっと抱き寄せた。

「生意気言ってるんじゃないよ、翔太。今……四年生か……？どうだ？ちゃんと自分の仕事はサボらずに毎日やってるか？」

翔太君の顔が、この上なく輝いた。

「あつたり前じゃん！兄ちゃんと約束したんだから！それより兄ちゃん……？ちいねえちゃんにどうやって告白したの？」

「生意気！」

私たちに駆け寄って来た翔太君の頭の上に、軽く振り下ろされたこぶしを、私は驚愕の思いで見つめた。

（紅君？）

こぶしから腕へとゆるゆると視線を移動させ、私の肩を抱いている人——他ならぬ紅君の顔を、驚きの思いで振り返る。

（どうして？……翔太君の事……昔の事……思い出したの？）

瞬間、紅君の綺麗な瞳を、様々な思いが過ぎったような気がした。私の顔を見つめながら、小さな声で彼が私を呼ぶ。

「ちい……」

その声が、ついさつきまでよりずっとずっと、昔の彼の声音に近いような気がする。

（まさか！）

どうしようもなく私の胸は跳ねた。

おりしも、再び鳴り始めた教会の鐘の音に負けないくらい、大きく大きく、ドキドキと心臓が私の中央で鳴り響いていた。

第五章 5

私の肩を抱く紅君の手は、温かいというよりは熱いくらいだった。背中から肩にかけて、これまでで一番、あまりにも近くに彼の気配を感じる。

ズシリと肩にのしかかってくるような重みは、決して私を逃がさないという意思表示のようにも感じた。

（紅君……）

それは彼が記憶を取り戻したからなのか。それとももっと他の理由からなのか。

答えが知りたかった。でも知りたくなかった。

笑顔のまま翔太君と話をしている紅君の様子は、まるでいつも通りに思える。

冗談を言い合って。ごくごく簡単に近況を報告しあって。でも、だからこそ普通ではないんだと痛感する。

（だって……本当だったら、翔太君の事だって覚えてないはずで……もちろん昔の話なんて出来ないはずで……なのに……！）

私の中の　もしかして　という思いが、次第に　きっと　という確信に変わっていく。

（思い出したんだ……！紅君……！）

もし間違っていたなら、きつと大きく落胆する事になるのに、それでも期待せずにはいられなかった。

しかし本人にすぐそれを確認する事は、なかなか出来なかった。

私と紅君の手を引いて牧師さんの住居へと招待してくれた翔太君は、たまりにたまった五年分の報告を、一度に全部紅君に伝えようとしているかのようにだった。

「火事の後、俺と鈴は隣町の施設に移ったんだ……和真と奏美は、

それぞれお母さんが迎えに来た。他のみんなはバラバラに違う施設に……でも今でも時々電話したりするよ」

「そうか」

紅君が心からホッとしたように息をついた。

あの頃のように、いかにもみんなのお兄ちゃんらしい笑顔が浮かぶ。

「みんな元気か？」

「うん」

大きく頷いてからすぐに、翔太君は視線を足元に移した。

自分と向かいあつて椅子に座る紅君の足の辺りを見ながら、ポツリポツリと言葉を繋ぐ。

「俺さ……みんなも……園長先生も……もつここにはいないって分かつてるんだ。でも 良かったらここで暮らさないか？ って小野寺牧師に聞かれた時、すぐに はい！ って答えた……だってやっぱりここが俺の家だから……違う？ こう兄ちゃん……」

ハキハキと元気のいい翔太君の声が、次第に途切れ途切れになつていく。

ちよつと反応をうかがうように、翔太君が上目遣いで紅君の顔を見上げた瞬間、紅君は立ち上がつて彼に近付き、子供の頃いつもそうしていたようにぎゅっと抱き締めた。

それには翔太君の方が面食らつてしまった。

「兄ちゃん！ こう兄ちゃん！ 俺、もうチビじゃないんだからさ！」

慌てて抗議の声を上げて、紅君は翔太君の頭を抱き締める腕を決して緩めない。

「ありがとう翔太……俺の方はさんざん回り道して……ここまで帰つて来るのにずい分長い時間がかかったのに、その間、みんなの事も、この場所の事もちゃんと見てくれたんだな！……俺が留守の間は、翔太がみんなを守れて……それがお前との約束だったもんな……」

「うん……！ うん……！」

強がってはみても、やっぱりいくつになっても紅君の弟分の翔太君は、浮かんで来た涙を隠すように、抜け出ようとしていた紅君の腕の中にもう一度頭を引っ込めてしまった。

「よく頑張ったな。偉いぞ翔太」

「うん」

テーブルを挟んだ向かいの席で、二人の様子を見ていた私も、涙が止まらなかった。

牧師さんのお宅を出た後。小さな石碑の前で、紅君はずい分長い間しゃがんでいた。

以前 希望の家 があつた場所に作られた花壇には、よく見ると中央に小さな墓標が設けられていた。

その下に眠るのは、もちろん私たちに惜しめない愛情を注いでくれ、この場所で生涯を閉じた園長先生だ。

私も翔太君も牧師さんも、紅君が再び立ち上がるまでずっと静かに彼を待った。

長い祈りと対話の後、ようやく立ち上がって私たちを振り返った紅君の目は真つ赤に染まっていた。

暮れ始めた空の色を反射しているからばかりではなく、やっぱり深い悲しみに満ちていた。

「園長先生は、俺の事怒ってなかったかな……？焦って無茶をして、その結果、みんなの所に辿り着けなかった……先生の手助けも出来なかった……」

「それは紅君のせいじゃないよ！」

気がつけば、私は誰よりも真つ先にそう叫んでいた。

「私のせいだもの！もとはと言えば、全部全部私のせいだもの！」
五年間、いつもずっと心の中に抱え続けてきた自責の念は、いったん口に出してしまつたら留まる所を知らない。

だって私のせいで紅君が失ってしまったものはあまりにも多すぎ

る。大きすぎる。

「私が 希望の家 にいなかったら！ううん…… みんなに関わらなかったら、そしたら園長先生だって……！」

「ちい！」

「ちい姉ちゃん！」

紅君の必死の声にも負けないくらい大きな声で、翔太君が私の名前を呼んだ。

——それは 希望の家 で暮らしていた小さな子供たちが、心からの親愛を込めて私を呼んでくれていた愛称だった。

「変な事言つなよ！ちい姉ちゃんも 希望の家 の子だからって……園長先生はそう言っただろ！」

そうだった。澤井の暴力から逃れて、私が 希望の家 に一時避難した時、園長先生は確かに私の事を、 今日からちいちゃんもこの子供です と言ってくれた。だけど――。

「でも、あんなに力になってもらって…… 助けてもらって…… でも肝心の時に私はここに辿り着けなかった！園長先生の力になれなかった！」

悔しくて悔しくて。もしもう一度やり直せるのなら、今度こそきつと無事に辿り着くの。夢の中でさえその願いは叶わなかった。

―― 枯れる事のない私の後悔の思い。

唇を噛みしめて深く俯いた紅君も、きつと同じ思いを抱えている。「怒ってなんかおられないし…… きつとあなたたちが無事だった事を喜んでらっしゃると思いますよ……」

穏やかな牧師さんの声が、私たちを慰めようとしてくれる。同じ神に仕える者として、園長先生の心を静かに代弁してくれる。

「大切にしていた子供たちが、こんなに心優しく成長してくれて、きつと喜んでらっしゃるはずですよ」

「でも……」

それでも自分を責めずにいられない私に向かって、翔太君がキリツと真っ直ぐな視線を向けた。

五年生の頃の紅君にも負けない、それは綺麗に澄んだ、迷いのない目だった。

「ちい姉ちゃんも、こう兄ちゃんも……ちゃんと俺たちのところに来たよ！」

ハツと私は、翔太君に驚きの目を向ける。紅君も同じように顔を上げたのが分かった。

「火事の時！……いろんな所が炎で止められて、通れる場所がなくなって、困ってる俺たちに園長先生が言ったんだ……紅君とちいちゃんが助けに来てくれたから、ちゃんと後をついて、歩ける人は歩きなさい　って……それで俺は、兄ちゃんたちの後ろ姿を追っかけて、家の出口まで辿り着いた……他のみんなだってそうだ！嘘じゃない！」

驚きのあまり、私は瞬きする事さえ忘れていた。

（どういう……事……？）

頭がひどく混乱して、考えがまとまらない。

その時、私たちはひどい交通事故にあって病院に搬送されていたはずで。もちろん私にはその時の記憶があるわけではないが、どう頑張ったって　希望の家　にいたはずはない。なのに――。

真顔で訴え続ける翔太君はあまりにも真剣で、疑う隙などまったくない。

「本当か翔太……？」

紅君が静かに確かめた。翔太君に負けないくらい真摯な瞳で、真っ直ぐに彼を見つめてからゆっくりと尋ねた。

「うん。本当」

翔太君が頷いた瞬間、紅君の綺麗な瞳から、ポロリと一粒涙が零れ落ちた。

きゅつと唇を真一文字に引き結んだ紅君が、今どんな思いでいるのかは、この世界の誰よりも、私が一番理解出来る。絶対に誰にも負けない。

――だって、私だって……全く同じ事を考えていた。

それはひょっとしたら、園長先生の優しい嘘だったのかもしれない。くじけそうになっていた子供たちの心を鼓舞するための、いちかばちかの狂言だったのかもしれない。

でも純粋な心で私たちの帰りを待っていてくれたみんなには、私たちの姿が見えたんだ。それはなんて嬉しい事なんだろう。

不可能を可能にするくらいの思いが、あの時、あの場所で生まれていたんだとしたら、翔太君の言う通り、私たちは本当にその場にいたのかも知れない。

どうしても駆けつけたかった場所に、心だけ、魂だけ、やっと思いでたどり着いたのかもしれない。

（だったら嬉しい……！こんな……こんな嬉しい事はないよ！）

ポロポロと零れ落ちる涙を、必死で両手で拭う私とは正反対に、紅君はニツコリ笑った。それはそれは嬉しそうに笑った。

「ありがとう翔太」

それから翔太君に向かって深々と頭を下げる。

そんな紅君に向かって翔太君はVサインを作り、二カツと大きな口を開けて笑った。

いつまでも心に焼き付けておきたい光景さえ涙で滲んでしまつて、次第に見えなくなっていく自分が、私はちよっぴり悔しかった。

教会からの帰り道。来た時と同じように並んで土手の道を歩きながら、私はようやく紅君に尋ねる事が出来た。

「紅君……いつ思い出したの……？」

紅君は 何を？ と聞かず、私の顔を見てちよつと悪戯っぽく笑った。

「本当は、この街に着いてすぐの頃から少しずつ……ちいにいつ知らせて驚かそうかとタイミングを計ってたのに、逆に翔太に驚かされるとは思わなかった……！」

笑顔につられるように、私も一緒に笑う。

「本当に！」

ひとしきり二人で笑いあった時。私の長い髪を巻き上げるようにして、私たちの間を一陣の風が吹き抜けて行った。

それはこの季節では考えられないほど、穏やかな優しい風だった。

「ちい……」

ふいに私の名前を呼んだ紅君が、さっきまでとは打って変わった真剣な顔で、私を見つめる。

本当は分かっていた。紅君が気持ちを込めて何かを語りだす時には、これまでもいつだって不思議な風が吹いた。

だから次に彼が何を言い出すのかも、私にはよく分かっていた。

「ごめん…… 事故に遭う前の事も、みんなの事も思い出したけど……

……まだ、ちいの事だけは思い出せないんだ……」

「うん……」

彼がそう告げるのが、あらかじめ分かっていたから、私は動揺した様子を彼に見せずに済んだと思う。

「どんなに大切だったか…… その想いは分かるのに思い出せない…… どうしても思い出せないんだ！」

ぎゅっとこぶしを握り締めた紅君が、もっと自分を責めだす前に、私はそのこぶしを自分の両手で包み込んだ。

「いいよ。大丈夫。今、紅君はこうして私の隣にいてくれるんだからそれでいい…… そうだよな？」

苦しい色に揺らぐ紅君の瞳が、私の顔を見つめる。出来る事ならその辛さを全部消してしまいたくて、私はなんでもないふうを装って笑った。必死に笑った。

「きつといつか思い出すよ…… その いつか を私はいつまで待って待てるから…… だからいい……」

「ありがとう、ちい」

紅君は少し屈み込んで、私の頭に自分の頭を軽く乗せた。

「じゃあ、その いつか が来るまで、ずっと俺の傍にいて下さい」「えっ？」

ドキリと胸が跳ねる。そう、あの子供の頃。紅君に突然想いを告げられたあの日のように――。

あまりに近すぎる距離から囁かれる言葉は、まるで自分自身から聞こえて来るみたいで、その近さにドキドキする。

紅君が放つ言葉の一つ一つが持つ意味の大きさに、どうしようもなくドキドキする。

「……あれ？これじゃまるで、プロポーズみたいだね……」

五年前に彼が私にくれた言葉と、紅君が今嬉しそうに呟いた言葉とのあまりの既視感に、頭がぼうつとした。

紅君には、私に関する記憶はないままなのだから、これはたんなる偶然なのだろうか。とてもそうは思えない。

こんな状況の事を上手く言い現す言葉だったら、すぐに心に思い浮かぶ。

美久ちゃんと蒼ちゃんから、私たち二人の関係を指して、最近何度も聞かされた言葉だから、しっかりと心に焼きついている。――

「運命」。

「紅君……あのね……」

クスリと笑いながら、彼にも教えてあげようと口を開きかけたら、すぐさま唇を唇で塞がれた。

私の手の間からスリと引き抜いた両手を広げ、紅君は私をすっぽりと包み込むように抱き締める。

「ダメ。言わないで……俺が自分で思い出すから。いつかきつと思いつくから……」

「うん……」

肩口で頷いた私に、紅君は明るい色の髪の毛の頭をそつと寄せた。まるでとてもとても大切なものに頼るかのよう、私の頭に頬を乗せる。

「だからずっと一緒にいて……ずっと……」

「うん……」

これ以上はない幸せな思いで、その日二人で見た黄金色に輝く川

の水面を、私はきつと忘れない。

ちよつと寂しげな声を残しながら、綺麗に隊列を組んで冬の空を飛んで行つた雁の姿も。

たくさんものを一緒に見た。たくさん同じ思いを感じた。大切な旅から三日後――。

――紅君は何の前触れもなく、また、唐突に倒れた。

急に糸を切られたマリオネットのように、地面に倒れ込んだ瞬間。ちい　とただ一言、私の名前を呼んだ彼に何が起こつたのか。彼が何を考えたのか。

それは私には分らない。

次に目を覚ました時に彼が私を覚えているのか。そもそも目覚めてくれるのかも。今はまだ、全然見当もつかない――。

第六章 1

お弁当屋の古いガラスのドア越しに見える町の風景が、夕焼けに染まり始めると、次第にドキドキしてくる。

「千紗。今日はもうあがりな」

「うん」

待ち望んでいた叔母の声が厨房からかかったら、弾かれたようにエプロンを脱いで店を後にした。

この後、夜間学校へと向かう生活に変わりはないが、最近の私には、その前に行く所がある。

学校帰りの学生や、夕飯の買い物をする主婦で賑わう商店街を走り抜け、そのまま駅には向かわずに、ちよつと脇道に逸れる。

白いコンクリート造りの診療所の奥に、目的の家はあった。

私の姿を見つけて足元に擦り寄って来る猫たちと一緒に、玄関ではなく、庭へと進む。

草木に覆われた、どこか懐かしい雰囲気のある庭。それに面した南向きの部屋で、彼は眠っている。

大きなガラス窓へと歩み寄る瞬間。目を閉じて祈るように想像してみる事は、今や私の習慣になりつつあった。

——ひよつとしたら今日は目を覚ましていて、そこに立ってるんじゃないかな。

——あの大好きな笑顔で、ちい と私の事を呼んでくれないかな。

だけど、願いとも呼べるその想像が、現実になった事はない。

彼はやっぱり今日も、庭がよく見えるベッドの上で静かに眠っていた。

少し痩せた頬に影を落とす長い睫毛は、昨日と同じで固く閉じられたままだった。

唐突に紅君が倒れたあの冬の日から、二ヶ月が過ぎた。

体にも脳波にも異常はなく、ただ眠っているだけだという彼は、あれからずっと意識を取り戻していない。

病院ではなく、病院に隣接した自宅で、蒼ちゃんとお父さんが交互に様子を見る日々。夕方、夜間学校へと向かう前のひと時。紅君に会いに来るのが、ここ二ヶ月の私の日課だった。

「紅君……」

自由に出入りしていいと言われていた掃き出し窓から、そっと部屋の中に入る。

いつもは今の時間付き添っているはずの蒼ちゃんが、今日は珍しく席を外していた。

紅君の顔にまで伸びて来そうだった西日を遮るため、カーテンを少し閉める。

ちよつと暗くなった室内は、まるでここだけ時間が止まったかのように静かだ。

「紅君……」

小さな声で囁く私の声が、静寂の中に飲み込まれていく。何度呼んでも、彼は目を覚まさない。

一瞬、昨日蒼ちゃんが冗談混じりに言っていた言葉を思い出した。千紗ちゃんがキスしたら、眠り姫みたいに目を覚ますんじゃない？

真つ赤になつて怒つて、そんな事するはずない！ と叫んだ私を、蒼ちゃんは笑いながら見ていた。

その楽しそうな雰囲気、紅君が意識を取り戻しはしないかというのが、蒼ちゃんの狙いだったんじゃないかと、本当は私だって分かってる。でも――。

二人だけの静かな部屋で、規則正しく寝息をたてている紅君の横顔を見ていたら、思わずその頬に手を伸ばしそうになって、そんな自分にビククリした。

（何やってるの……私……？）

決して蒼ちゃんの言うように、キスしようなんて思ったわけではない。

ただ、もう長い間触れてさえない紅君が、まるで幻のようで、今にも消えていなくなってしまういそいで、不安でどうしようもなくなった。

きっといつかは目が覚めるだろうからと、みんなとは笑顔で話している。

大丈夫です。私はずっと待ってるからと、自分に言い聞かせるかのように何度も繰り返した。

でもその実、心の中では不安で不安で――。

このまま紅君が亡くなってしまう悪夢を見ては、今でも夜中に飛び起きる。

びつしよりと体中に汗をかいて、涙を流している自分に気がつくたびに、痛いくらいに自覚する。

どんなに自分が紅君を好きなのか。彼を失う事にどれだけ怯えているのか。

分かっているのに、どうにも出来なくて。誰にも打ち明ける事も出来なくて。心の限界までたまった不安は、私を押し潰しそうに大きくなっている。

「紅君……」

一度は躊躇って引つ込めた手を、もう一度、眠る彼へと伸ばした。そつと触れた白い頬は、どこかで恐れていたように冷たくなどなかった。温かな血が通っている肌の感触がした。

ただそれだけの事が、嬉しくて嬉しくて、涙が零れる。

「よかった……じゃあ、学校行つて来るね……」

まだ彼の肌の感触が残っている指先を、胸に抱きかかえるようにして、再び庭へと降りて行く私に、返事が帰って来る事はない。

振り返ってもう一度見てみても、紅君はベッドの上、さっきの位置から一ミリも動いていない。

その静穏さに、またどうしようもなく不安をかき立てられる。

「行つて来ます……」

それだけを告げて、私は走り出した。これ以上ここに留まってい
ると、また不安に捕まってしまうそうで、前だけを見て一目散に紅
君の家の庭を駆け抜けた。

「どう？ やっぱり今日も……？」

学校に着くと美久ちゃんが、昨日と同じように私にそう問いかけ
た。昨日の前も、そのまた前もずっとくり返されて来た同じ質問。

ちよつと困つたように私が頷くと同時に、美久ちゃんも他のみん
なも、まるで自分の事のように落胆して大きなため息をつくから、
私はなんだか優しい気持ちになる。

「でも、全然苦しい事なんてなさそうな顔で、穏やかに眠ってる……
だから大丈夫……夢の世界でもきつと紅君は、辛い目にあつたり
してない……」

小さく笑いながらそう告げたら、美久ちゃんにぎゅつと頭を抱き
寄せられた。

「もう！ あんたつて子は……！」

その腕が温かくて、思わず寄り掛かってしまいたくなる。でもこ
こで誰かに甘えたら、懸命に平静を保っている心のバランスまで、
ちよつとずつ崩れていく事を私は知っていた。

だから笑う。懸命に笑う。私は大丈夫 という強がりを実際に
変えるために、誰にも涙は見せなかった。

家へと帰る電車を降りたら、改札口の所で私に向かって大きく手
を振る人がいた。蒼ちゃんだった。

蒼ちゃんはよく、全然似てないでしょ？ と自分と紅君の事を笑
うが、やっぱり背格好とかちよつとした仕草とか、全体の雰囲気は

似ている。

遠くから蒼ちゃんを見た瞬間、私は一瞬紅君かと思ってしまったぐらいで、そんなはずなのに抱いてしまった淡い期待で、内心、少し落胆した。

「どうしたの……？」

まさか紅君に何かあったのかと、慌てて駆け寄ると、蒼ちゃんは笑顔で首を横に振った。

その動作に、何かが起こったわけではないんだと、ホッとす。

「学校に行く前に寄ってくれたでしょ？ 伝えたい事があったのに、ちよと電話に出てて会えなかったから……」

並んで歩きながらそう話す蒼ちゃんの顔を、私は見上げた。

「なに？」

「うん。今度、翔太君が紅也に会いに来るって……その時みんなもつれて来るから、ちい姉ちゃんにそう伝えてくれだって……」

「……みんな？」

紅君が倒れてからすぐに、翔太君は彼に会いに来た。

紅君が眠るベッドの横に座って、ずっと話しかけ続けた翔太君は、帰る間際に、そう言えば私にもそんな事を言って去って行った。――

――今度はみんなで来る　と。

「みんなって……」

まさかという思いで蒼ちゃんの顔を仰ぐ。蒼ちゃんはしっかりと頷いてくれた。

「うん。昔　希望の家　で一緒に暮らしていた、みんなで来るって

……」

「…………！」

必死の思いですつとこらえ続けている涙が、思わず浮かんで来そうだった。

「そう……」

嬉しい。またあの頃のようにみんなが集まる――それは、今、それぞれが集まれるような状態にあるという事だ。誰一人欠けずに、

みんなが元気でいるという事だ。

大好きだった　こう兄ちゃん　の為に集まってくれる。

それはまた、みんなの絆が確かに今も存在しているという事の証明でもあり、私は嬉しくてたまらなかった。

（みんなが来たら、紅君だって目を覚まさないかな……？）

あんなに愛情を注いでいた弟や妹たちが、紅君のために集まってくれるのだ。嬉しくないはずがない。そんなみんなの気持ちを無視出来るような紅君ではない。だけど――。

口に出して期待してしまうと、それが上手く叶わなかった時の落胆がいつそう大きくなるような気がして、私はその思いを蒼ちゃんに伝える事は出来なかった。

胸に抱いた希望は、自分の心の中だけにしまっておいた。

いつになっても、やっぱり傷付く事が一番恐い自分。望みを持つ喜びよりも、それが裏切られた時の心配ばかりをしてしまって、少しも前向きにはなれない自分。

紅君がいないと私は、前を向いて歩く事さえ難しい。どん底の状態の時に、手を差し伸べてくれたたった一人の人だから。私にとつては誰にも代わりは出来ない。紅君しかいない。

――そんな事実を、改めて思い知る。

「楽しみだね……」

私を喜ばそうと、わざわざこんな所までみんなの来訪を教えに来てくれた蒼ちゃんに、私は「うん」と短い返事しか返す事が出来ない。

そんな私を責めるでもなく、咎めるでもなく、ただ歩調を合わせて一緒に歩いてくれる――蒼ちゃんがそんな人で良かった。

優しくて聡くて、相手を思いやる心に長けている蒼ちゃん。

本当に彼には、心から感謝せずにはいられなかった。

約束した土曜日の午後、みんなは予定通り紅君の家にやって来

た。

呼び鈴の音に転がるように玄関に出て行った私は、ズラリと並んだ懐かしい顔に、精一杯の笑顔で呼びかけた。

「いらっしやい」

決して泣かないとずっと前から決めていたのに、私を見た女の子たちの顔がくしゃつと歪んで、一斉にしゃくりあげ始めるから、ついついつられてしまいそうになる。けれど――。

「ほら！ちい姉ちゃん、元気にしてるだろ！こう兄ちゃんだって、すぐに目を覚ますんだからな！」

みんなを励ますように、勇気付けるように軽く頭を叩いてまわった翔太君の言葉に、女の子たちは顔を上げた。

「お姉ちゃん！」

「ちい姉ちゃん！」

私なんかをあんなに慕ってくれていた懐かしい子たちが、手を差し伸べて一斉に私に駆け寄って来る。

大きく両手を広げてみんなをいっぺんに抱き締めながら、泣かないようにするのは、本当に一苦労だった。

ちゃんと笑えているのかは、自分でも疑問だ。

けどそんな私に、男の子たちはちゃんと笑い返してくれた。

幼い頃の面影を残して、大きく成長したみんなの姿に胸が締め付けられる。

（翔太君……綾芽ちゃん、鈴ちゃん、和真君、奏美ちゃん、要君、一葉ちゃん……）

本当に誰一人欠けていないのが、心から嬉しかった。

南向きの暖かい部屋で眠る紅君を、みんなは取り囲んで見つめる。誰も泣いたりはしなかった。真剣な顔で、これまでの事、これらの事を順番に語った。

「こう兄ちゃん。僕、サッカー部に入ったんだ……あの頃の兄ちゃ

んより、もう上手いかもしれないよ？」

「ええーっ、要があ？ ないない。それはない……！」

「なんだよ、翔太！」

紅君をそっちのけで喧嘩を始めそうな男の子たちをくすくすと笑って、綾芽ちゃんがそつと紅君の耳元に口を寄せる。

「あのね、こう兄ちゃん……私、新しい家族が出来たの。生まれたばかりの弟もとっても可愛いよ。きっと仲良くするからね……」

そうか。頑張れよ　という紅君の返事が、聞こえたような気がした。

ハツとして、ベッドに横たわる紅君の様子をのぞき見る。

でもやつぱり彼は、微動だにしていない。

「私のいる施設は　希望の家　みたいに小さい子が多いから、私が最年長なの。昔、ちい姉ちゃんに教えてもらったみたいに、今は私がいみんなにお料理を教える……」

誇らしげに笑う一葉ちゃんに、私も笑い返した。

「そう。偉いね……」

私の隣に、スツと和真君が寄って来た。

「ちい姉ちゃん……僕、今なら姉ちゃんの気持ちが分かるよ……僕が何をしたって新しいお母さんは僕の事が気に入らないんだ……叩かれて、思わずやり返しそうになる時もあるけど、姉ちゃんの事を思い出したら、我慢できる。姉ちゃんだって耐えてたんだから、僕にも出来るはずだって……僕にも仲間がいるから、いつか家を出る日まで、我慢出来る……！」

「和真君……」

思わず言葉に詰まった。

昔、紅君がそうやっていたように、元気付けるつもりで、痛みを分け合うつつもりで、和真君を抱き締めようとしたら、翔太君に先を越された。

「和真！ あんまりひどい時は、俺の所に逃げて来い！ 俺は　希望の家　があつたあの場所にもう一度　希望の家　を作る！ 小野寺牧師

だつて、絶対賛成してくれる！」

翔太君の腕の中でうんうんと頷く和真君の肩は小さく震えている。
「翔ちゃん……また勝手にそんな事決めて……大丈夫なの？」

心配げに彼を見上げる鈴ちゃんに、背後から奏美ちゃんが囁いた。
「ふふつ、そんな事言つて……もし本当にそうなら、一番入り
浸るのは鈴のくせに……今だつて、誰かさんに会えなくなつて寂し
い寂しいつて、しょっちゅう言つてるじゃない……」

「奏ちゃん!!」

大慌てて奏美ちゃんの口を塞いだ鈴ちゃんは、真つ赤な顔で、眠
る紅君の顔を見下ろした。

なんだ？ 鈴は今でも翔太の事が好きなのか？ と紅君が笑い混じ
りでからかう声が、私にも聞こえそうな気がした。

（紅君……ねえ紅君……嬉しいね……）

みんなが変わつていなくて。そのくせ心も体も大きく成長してい
て。あの頃の私たちのように、いろんな事に悩んで傷付いて、それ
でもしっかりと前を向いて歩いている。

みんなが慕ってくれるほどには、私自身は成長していないような
気がして、それが心苦しいほどだ。

（ダメだね。みんなのお姉ちゃんだから、私もしっかりしないと……！）

無理ではなく。精一杯のやせ我慢ではなく。本当に笑つて歩き出
したい。

いつか紅君が目を覚ました時に、胸を張つて 待つてたよ と笑
つて言える自分でありたい。

（うん。頑張る……私も頑張るよ……！）

いつまでも続く、紅君を取り囲んでのみんなの会話は、私にも元
気を与えてくれた。

本当に今にも、 おーい。みんなの声がうるさくつて、ゆっくり
寝ていられないぞ？ と紅君まで起き出して来そうだった。

——でもそんな奇蹟は起きなかった。

みんながどんなに話しかけても、やっぱり紅君は目を覚まさなかった。

分かっていたのに。期待すると落胆が大きいかと、始めから諦めていたつもりだったのに。やっぱり私は、がっかりした。

（仕方ない……本当に、その時を待つしかない……みんなに負けなように、私も自分の目標に向かって頑張りながら、いつかは分らないその時を待とう……！）

昨日までよりは、前向きになった心で、みんなを駅まで送って行った後、帰り着いたお弁当屋の前には、蒼ちゃんが立っていた。

「どうしたの？今日の夕ご飯にはまだ早いよ？」

ついさつき決心した通り、明るい笑顔で問いかけた私に、傍目にも分かるくらい青ざめた蒼ちゃんは、真剣な顔で告げた。

「千紗ちゃん……紅也がいなくなった！」

（え？……どういう事……？）

頭で言葉を理解するよりも先に、私の足は駆け出していた。

毎日、学校に行く前に辿る紅君の家までの道のりを、手にしていた荷物も全部放り出して、全力疾走していた。

辿り着いたのは、いつも通りの静かな庭。ついさつきまで七人の子供たちの訪問を受けて賑わっていた家は、今はすっかり通常の静けさを取り戻している。

点々と庭に配された敷石を辿るのももどかしい思いで、庭に面していたいつもの掃き出し窓へと駆け寄ったら、そこはいつになく大きく開け放たれ、真っ白なカーテンが風にはためいていた。

窓のすぐ横にあるいつも紅君が眠っていたベッドの上には、本当に誰の姿もない。

「紅君……！」

悲鳴のような声で彼の名前を呼んで、その場にしゃがみこんでしまわないように、震える体を自分で抱き締めるのが、その時私に出

来る精一杯だった。

「紅君！！」

私の叫びは、まだ早い春の夕暮れの冷たい風に、かき消されて消えていった。

第六章 2

商店街も、駅までの道も、蒼ちゃんの大学の近くの公園も、もちろん叔母たちのお弁当屋も。紅君が立ち寄りそうな所は全部探した。あまり広くはない彼の行動範囲の、全てを廻った。

でも紅君はいない。どこにもいない。

(どうしよう……！)

時刻はすでに、夕暮れと呼べるものではなくなっていた。

「千紗ちゃん。あとは父さんと僕で探すから……」

蒼ちゃんはそう言ってくれたけど、その言葉を受け入れる事は、私にはどうしても出来なかった。

今諦めたら、本当にもう二度と会えなくなってしまうそうで。その不安が拭い去れない。

「嫌だ……嫌だよ！」

あんなに無理に無理を重ねて、隠していた涙が止まらない。

両手をぎゅっと握りあわせて、懇願するように下げた私の頭を、蒼ちゃんはいつものように優しくポンと叩いた。

「うん。分かった。じゃあ一緒に捜そう」

自分が足手纏いになると分かっているけど、今はただ蒼ちゃんの優しさに甘えるしかなかった。

ベッドに寝ていた服装のまま、ふらりといなくなった紅君は、普通に町を歩いていたらかなり目立つはずだ。

なのに誰も、彼を見かけた人がいない。

「そんなはずない！ そんなはずないんだ……！」

足を棒にして歩き回る蒼ちゃんが、時間の経過と共に焦りを深めていくのは当然だった。

誰もいない場所で、紅君が再び意識を失ってしまわない保証はど

ここにもない。

今こうしている間にも、彼の身には大変な事態が起こっているとも限らないわけで、そう思うと私だって、いても立ってもいられなかった。

とにかく思いつく所、全てに足を運ぶ。

けれどやっぱり、紅君の行方は依然として掴めない。

「どこか思い当たる所はない？……千紗ちゃん……」

そう尋ねられても、私にももう首を横に振るしかなかった。

再会してからこの町で紅君と一緒に行った所には、すでに全部足を運んだ。時間をずらして、何度も行った場所もある。

けれどそのどこにも紅君の姿はなかったし、彼を見かけたという人も、一人も存在しない。

「うつん……ない……」

力なく首を横に振った瞬間、ふと思い出した場所があった。

クリスマスの夜、今日だけ特別に開放された　と紅君が語っていた――いつもはもう使われていない教会。

「そうだ！」

顔を上げた私の手を取って、蒼ちゃんが先に立って走り出す。

「どこ？　なんなら車で送る！」

「うつん。すぐ近くなの！」

しかし、息せき切って駆けつけた古い教会には、紅君の姿はなかった。

紅君が言っていた通り、クリスマスの日は自由に出入り出来た鉄製の門扉は、今日は固く閉じられたままだ。

「くそっ！　違ったか！」

握り締めた鉄柱を蒼ちゃんがガシャンと鳴らした瞬間、門の向こうから声がした。

「おや？　何か忘れものですか？」

古風な吊り下げ型のランプを手にした、灰色の修道着の年配の女性、どうやら目があまり良くないようだ。蒼ちゃんの前まで来て、

しげしげと彼の顔を見上げる。

「あら、ごめんなさい。別の方ですね……声がよく似てらっしゃったものだからつい……」

女性がみなまで言い終わらないうちに、私は問いかけていた。

「よく似た人がここに来たんですか？」

女性はにっこりとやさしく微笑む。

「ええ、そうです。ここはもう閉鎖されてるんですよ。ってお伝えしても、分かってるけど、懺悔をしたいからどうか聖堂に入れて欲しい。って言われて……今日は私がたまたま掃除に来ていたら、特別ですよって、中にお通ししたんです……」

「その人を捜してるんです！まだここに居ますか？」

勢い込んで尋ねたら、そつと首を横に振られた。

「いいえ。ついさっき出て行かれました」

「どこに行ったか……分かりませんか？」

蒼ちゃんの問いかけに、女性はもう一度首を横に振る。

「いいえ。でも、まだそう遠くへは行かれてないと思いますよ……」

「ありがとうございます！」

頭を下げると瞬時に、私と蒼ちゃんは踵を返して駆け出した。

紅君は足が悪いため、走る事は出来ないし、あまり早く歩く事も出来ない。教会を出たのがほんのさっきだというのなら、まだ充分追いつけるはずだ。

「紅也！」

蒼ちゃんの叫びにつられるように、私も声を張り上げる。

「紅君！」

だけど、真っ暗になった夜空に私たちの呼び声は吸い込まれていくばかりで、紅君の返事が返って来る事はなかった。

どこに行ってしまったのか。それきり紅君の足取りはつかめなくなった。

翌日の日曜日。叔父と叔母に頼んで、一日店を休ませてもらった。生まれ育ったあの街に行ってみると告げた私に、蒼ちゃんは僕も行く　と言ってくれたけれど、丁寧に断わった。

そこに紅君がいるという確証があるわけではないし、蒼ちゃんには本当は大学の臨床研修だつてある。

「とにかく、一度行ってみるだけだから……」

繰り返す私に、蒼ちゃんは膝を折り曲げて目線の高さを合わせて、念を押した。

「もし紅也が見つからなくても、この町に帰って来て……いい？叔父さんも叔母さんも、もちろん僕も、千紗ちゃんの帰りを待つてる　つて事だけは忘れないで……いい？」

「どうしたの蒼ちゃん……？　なんだか変……」

あまりにも真剣な顔に、思わず発した質問にも答えず、蒼ちゃんは何度も念を押す。

「いいから。帰つて来るんだよ……？」

「うん……」

返事を返さない事には、到底行かせてもらえないような雰囲気を感じて、私はやむなく頷いた。

でも、蒼ちゃんにはきつと最初から分かってたんだと思う。

思い出の場所を一つ一つ巡つても、紅君を見つけられなかった時、私がどんな気持ちになるのかが――。

昼過ぎに辿り着いた懐かしい街は、二ヶ月前に紅君と一緒に来た時と、やっぱり何も変わつてはいなかった。

あの時は凍えそうに冷たい風が吹いていたのに、今は温かい春の風が吹いているという事だけが違っている。

紅君と一緒に過ごした、一番思い出深い季節に、またこの道を歩く事になったのが、不思議な気もしたし、当然のようにも感じた。

真つ先に訪れた　希望の家　があつた教会では、翔太君が私の姿

を見て、ひどく驚いた。

「ちい姉ちゃん？どうしたの？」

その反応を見ただけで、ここには紅君が来ていない事が分かる。

「うん。ちよつと用があつて……」

苦し紛れの言い訳にも、翔太君は変な顔をせず、私を信頼し切つた目で見つめる。

「ひよつとして……こう兄ちゃんと一緒？……なんて事はないか……」

キョロキョロと私の周りに視線を廻らして、私が一人きりな事を確認すると、ちよつと照れたように頭を掻く。

「俺たちがお見舞いに行ったら、兄ちゃん、目を覚ますかもなんて……本当は思つてたんだ……そうならなくてゴメン、姉ちゃん……」

「うっん！そんな事気にしなくていいの！」

本当はみんなのおかげで紅君が起き上がったと、言つてしまひたかつたけれど出来なかつた。

紅君がどこにいるのかも分からない今の状態じゃ、翔太君を心配させるだけだ。それに――。

「また会いに行くから！今度こそきつと目を覚ましてくれるよ、なっ！」

そう言つて笑う翔太君が、もう一度紅君に会える保証はどこにもない。

（私だけじゃない……紅君の事を大切に思っている人はたくさんいる……その人たちをみんな置き去りに……いったいどこに行つちやつたの？……紅君！）

これ以上話をしていたら、平気な顔を作る事さえ出来なくなつてしまいそうで、私は急いで教会を後にした。

「こう兄ちゃんが目を覚ます方が先だったら、また二人でここに来てくれよなっ！」

笑顔で手を振る翔太君に別れを告げて、他の場所を目指した。

二人で歩いた土手の道にも、問題の国道にも、どこにも紅君の姿はなかった。

柔らかな春の陽射しが、次第に傾いて西の空へと沈みかけ、タイムリミットが近い事を私に教えている。

母と暮らしたアパートにも、紅君も通っていた小学校にも、足を運んでみたけれど収穫はない。

限界を越えて歩き回ると、本当に足が痛くて歩く事も困難になるなんて、身をもって初めて知った。

（やっぱり……この街じゃなかったんだ……）

そもそもどうしてここだと思ったのか。その根拠でさえ今は、私の中で危うい。

（目を覚まして……それまでまだ紅君に記憶があつたなら……今度こそは私の事も思い出してくれそうな気がした……）

だからこの街に来た。二人の思い出がいっぱい詰まったこの街を巡りながら、欠けた記憶を確かなものにして、それから私のところに帰って来てくれるような気がしていた。

（だから、先回りして私も追いかけて来るなんて……やっぱりこんなの……私の勝手な思い込みでしかなかった……！）

落胆してその場にしゃがみ込んだら、もうそこから一步も動けなくなつた。

気力だけを頼りに、動かし続けた足はもうとつくに悲鳴を上げている。

紅君に会いたいと。もうすぐきつと会えるはずだと。信じる気持ちが無くなってしまったら、もう動くはずもない。

（やっぱり会えない……もう会えないかもしれない……！）

私の想像も付かないような理由で、紅君が動き出してしまったのなら、いったい何を信じて待っていればいいのだろう。

もう一度会おうなんて、私はそんな約束交わしてもいないし、彼

が私の事を覚えているのかどうかさえ分らないのに――。

「紅君！」

うな垂れた私の頬を伝った涙が、ポツリと地面に黒い染みを作った瞬間――風が吹いた。

伸ばしっぱなしの長い髪を巻き上げるように、夕焼けに染まった空に向かって一直線に風が駆け上がったから、つられて顔を上げた。涙で滲んだ視界の中で、小さな小さな何かが、私に向かってヒラリヒラリと降りて来る。

今は夕陽に染まって赤く見えるその小さな 何か が、淡いピンク色の花びらだと見て取って、私の目から涙が零れ落ちた。いくつもいくつも零れ落ちた。

「さくら……」

あの遠い春の日。紅君と二人で見た景色のように。空から降って来る花びらを、両手で受ける。握りつぶしてしまわないように、大切に大切に受け止める。

気が付けばいつの間にか、桜の大木のすぐ近くにいた。どこをどう歩いて辿り着いたのかさえ、記憶にない。

なのに大きな桜の木の傍に、私はしゃがみ込んでいた。

瞬間。背後で声がした。

「いつも見てたんだ……気がつくとその子の事ばかり見てた。あまり目立つ子じゃなかったし、男の子と話すタイプでもなかったから、なかなか話すタイミングが見つからなくて……そうこうしているうちに、その子がある日、パツタリと学校に来なくなった……」

聞き覚えようのないその声に、振り向こうと思うのに出来ない。

一気に駆け上ってきた震えるような驚きに、大きくしゃくりあげてむせび泣いているような状態じゃ、とても振り向けない。

「……義理の父親に殴られて、大怪我をしたって聞いた……事実、数日後に学校に出て来たその子は松葉杖で……顔にもいっぱい怪我してた……」

必死に嗚咽をこらえていると息を吸う事さえ難しい。頭も胸も、

たった一つの事でいっぱいなのに、それを口に出す事さえ出来ない。ただポロポロと涙を零して、彼の言葉を背中で聞き続ける事しか出来ない。

「なんで守ってやれなかったんだろって、いっぱいいっぱい後悔した。恥ずかしいとか、みんなにからかわれるかもとか、そんなちっぽけな思い……あの子が傷付く事に比べたら、なんでもなかったのに！」

背中からふわっと私の肩を包むようにまわされた両手が、座り込んだままの私の体を抱き締めた。

さっきまでよりずっと近く。私の頭のすぐ後ろで、優しい声が聞こえる。

「守りたいって思った。他の誰からも、何からも、俺が絶対守るんだって自分に誓った。それなのに、その思いさえ忘れて……一番大切な君の事を忘れて……！」

力を込めて自分を抱き締める腕に、私は恐る恐る指先で触れた。確かに感触を感じても、背中で彼の体温を感じても、夢じゃないかと疑う気持ちがどうしても捨て切れない。

もう六年間も、何度も何度も繰り返し見て来た、優しくて残酷な夢の続きなんじゃないかと思えない。だけど――。

「ゴメン、ちい……それでも好きだよ……誰よりもやっぱり……君が好きだよ」

私の頭に自分の頭を押し付けるようにして、一番近い場所で彼が囁いた言葉だけは、嘘になんかしたくなかった。

夢でも幻でもいい。彼が私を思い出してくれたのがたとえ今この一瞬だけでも。

私にとっては一番大切な宝物として、ずっとずっと心の中にしまっておきたい。

「紅君――！」

叫ぶように名前を呼んだ私を、彼はかき抱くようにもう一度強く背後から抱き締めた。

決して放さないという意味表示のように。自分は確かにここに居るという事を、私に知らしめるかのように。

その腕を信じる。抱き締める強さを信じる。たとえ運命が、もう一度彼から私の記憶を奪っていても、私だけは決して忘れないから――。

その思いを込めて、私は萎えていた足に力を込めて体を捻り、自分から彼の腕の中に飛び込んだ。

「紅君！」

夢でも幻でもなく確かに夕焼けの中に、大好きなその人は存在していた。

第六章 3

まさに燃えるような夕焼けだった。

私を抱き締める紅君の淡い色の髪が、夕陽に染まって金色に輝く。

「……紅君？」

「うん」

何度呼んでもちゃんと返事が返って来る事が嬉しかった。

なのにそれ以上は何も言えない。間近で私を見つめる紅君の笑顔は、子供の頃から大好きだったあの笑顔なのに、見つめ返す事さえ出来ない。だってあまりにも近すぎる――。

どこか現実ばなれした出来事が続いた後だったから、やっと見つけた紅君が消えてしまわないうちにと、私は無我夢中で彼にしがみ付いた。

でも冷静に返ったら、これからどうしたらいいのか途方に暮れてしまう。

確かにここに存在して、私を抱き締めてくれている紅君は、きっといつまで経ったって、消えていなくなったりはしないだろう。

（どうしよう……？）

困ってはいたが、そんな悩みも、ほんのついさっきまでの絶望感と比べたら、この上なく幸せな思いだった。贅沢すぎて、幸せすぎて、なんだか恐いくらい――。

ぎゅっと彼の腕を掴む手に力を込めたら、名前を呼ばれた。

「ちい」

惹かれるままに上げた私の顔の上に、紅君の顔が近付いて来る。「ただいま」

囁かれた言葉に、私も「おかえり」と返したら、そのまま唇で唇を塞がれる。

（ああ、紅君だ……本物の紅君に……もう一度会えた……！）
溢れる涙は、やっぱり止まらなかった。

翔太君たちの来訪を受けて、しばらくしてから目を覚ました紅君は、初めのうちは本当に記憶が混乱していたらしい。

ここがどこなのか。自分は何をしているのか。よく分からないままにベッドから起き上がり、部屋から抜け出し、歩き始めた足が思ったようには動かなかったから、それでいろんな事を思い出したと語ってくれた。

「早くどこかに行かなくちゃって、ずっと心のどこかに抱えていた思いが、火事の 希望の家 に向かった時の思いだったんだって分かって……悔しかった……」

昔のように川沿いの土手に二人で並んで腰を下ろして、私たちはいろんな話をした。

川に向かつて時々、思い出したように小石を投げながら語ってくれる紅君が、どんな悔しいかは私にだってよく分かる。

あの事故の時。三日後に私が目を覚ました時には、全てが終わっていたのと同じように、紅君にとっての その時 も、もう六年も前に終わってしまったているのだ。

「今さらだって分かってても、どうしても園長先生に謝りたくって……近くの教会で懺悔させてもらったら、踏ん切りがついた。ちい会っ前にもう一人、どうしても俺には会わないといけない人がいた……」

「会わないといけない人……？」

思いもかけない話に、私は小首を傾げる。

紅君はしっかりと頷いてから、隣に座る私に顔を向けた。

もう沈みかけた夕陽が紅君の顔に影を作って、そのせいか、さっきまでより悲しげな表情に見える。

「うん。ちいのお母さん…… 約束守れなくすいませんでしたって謝らないうちは、俺にはちいと会う資格もない気がした……」
私はハッと息をのんだ。

（じゃあ……紅君がこの街に来たわけは……？）

「墓前で頭を下げて来た。そしてもう一度誓いを立てて来た。今度こそ約束を守ります。ちいの事はこれから俺が守ります　って……」

「紅君……」

肩にまわした腕に力を入れて、紅君が私を自分の方に引き寄せるから、私はもう一度彼の胸に倒れ込んだ。

ドキドキと、体全部が心臓になったかのように緊張している私と同じくらい、紅君の鼓動だって早い。その事がなおさら私をドキドキさせる。

「やっぱり俺にはちいしか見えないみたいだ……何度記憶を失くしたって、次に出逢ったら、もうその瞬間からちいの事しか考えられない……なんとかして笑顔を守りたくって、その事しか頭にない……こんなの自分でも恐いくらいだよ……ちいは？……俺が恐くない？」

「恐くなんかない！」

夢中で叫んでしまってから、私はハッと紅君の顔を見上げた。手を伸ばせばすぐに触れられる所にいてくれる人に向かって、そっと両手を差し伸べる。

「恐くないよ……何があつたって、誰と出会つたって、紅君の事が忘れられなかったのは私だもの……遠い昔の約束をずっとずっと大事にして、それだけを大切に生きて来たんだもの……記憶がある分、紅君の事をずっとしつこく諦めきれなかったのは、私のほうだよ……だから嬉しい……また会えて……また傍にいて嬉しい……！」

ポロリと私の目から零れ落ちた涙を、紅君が指先でそっとすくう。どちらからともなく頬を寄せて、何度も何度もキスして、私たちは笑顔になった。

私を見つめる紅君の優しい笑顔にまけないくらいに、きっと私だって笑顔になった。

「行こう。ちい」

立ち上がった紅君が、私に向かつて差し出してくれた手を、しっかりと掴む。もう二度と離さなくていいようにと、願いを込めて握り締める。

川面に残っていた夕陽の残像が、キラキラと煌きながら水のうねりにのみ込まれていった瞬間、カリーンと澄んだ鐘の音が、かすかな橙色と深い紫色が混じり合った空に響き渡った。――夕暮れだというのに、まるで新しい夜明けを告げる祝鐘のように。

頬を撫でて私たちの横を吹きぬけて行った風が向かう先は、何度も何度も二人で自転車に乗って、向かった場所。

最後の一回は、焦りと憤りとぐちゃぐちゃになった感情で、冷静さを欠いて向かうしかなかった場所。

あの時はとうとう辿り着けなかった。だからきつとこれからやり直すのだ。

今はもうあの場所に、私たちを慈しんでくれた園長先生はいない。だけど目を閉じればいつだって、本当は「お帰り」と両手を広げて私たちを待ってくれている。

だから今度こそ二人で辿り着こう。――希望の家に。

焦りとか気負いとか、余計な感情は全部六年前に置き去りにして、小さな子供の頃の純粋な心のままに、「ただいま」と帰って行こう。紅君が私に、そうしてくれたように。そこからきつと、新しい未来が始まる。

私の手を引き先に行く紅君の歩みは、決して子供の頃の軽やかな彼のそれとは比べものにもならない。だけど、この方がいい。

急ぎすぎていろんなものを失くしてしまった私たちには、今は、ゆっくりと時間をかけて、次の場所へと辿り着くくらいがちょうどいい。

その方が、二人で一緒にいられる時間が長いという事を、欲張りな私は知っている。

目指す場所がたとえどんな所でも、そこまでの道のりを、時間を、これからはずっと二人で一緒に共有していられる。

「紅君……」

唐突に呼びかけた私に、紅君が振り返る。

「何？」

「好きだよ。大好き」

何度伝えても伝えきれない想いを言葉にしたら、繋いだ手にぎゅっと力を込められた。

「うん。俺も大好き。ちい」

子供の頃に彼から貰ったその魔法の言葉が、またもう一度私に魔法をかける。

何度でも何度でも。紅君が傍にいてくれるかぎり、これからはもう決して色あせる事はない。

だって、いつだってまたこうして貰えるんだから——。

大好きな笑顔と、ちいと私を呼ぶ声。

——子供の頃から、たった一つだけ欲しかった宝物を、私はその日、手に入れた。

第六章 4

「ちょっと千紗！まだ支度終わんないの？」

分厚いドアの向こうから聞こえて来るのは美久ちゃんの声。

本当はとつくの昔に着終わっていた純白のドレスを指でなぞりながら、私はおずおずと返事を返した。

「う、うん。もう少し……」

「早くしてね、みんな待つてるよ。花嫁さんがいなくちゃ、結婚式は始まんない！」

「うん……」

頷きながら背後を振り返ったら、開けっ放しの大きな窓が目に入った。

そこからひよっこ顔をのぞかせた紅君が 俺ちよつと出かけるから、ちい、時間稼ぎしといて…… なんて言って、どこかに行ってしまったてから、もう二十分が経った。

私たちのために、今日この場所に集まってくれた僅かな人の中には、待たされた事に腹を立てるような人物はいない。でも、忙しいみんなの時間を、奪ってしまったているのは少し気が引ける。

「どこ行っちゃったんだろう、紅君……？」

ちよつと困って窓に近付き、霞みがかった春の空を見上げる私は、もう、ほんの少しでも紅君の姿が見えなければ不安でたまらなかった私ではない。

——紅君が私の事を思い出してくれてから、もうすぐ一年。

何があっても、どこに行っても、きつと彼は自分の所に帰って来てくれると信じられるぐらいには、私も大人になった。

彼の事が好きな自分に気がついたあの春からは、七年——私は今日、紅君のお嫁さんになる。

頬を撫でて行く優しい春風も、私たちを祝福しているように感じた。

夜間学校を卒業したら、叔母たちの家を出て一人暮らしをするつもりだった私に、紅君が一緒に暮らそうと言ってくれたのは、卒業を三カ月後に控えたクリスマス頃の頃だった。

（えっ……紅君と一緒に？）

考えただけでドキドキが止まらなかったのに、彼が次に告げたのは、もっと驚くような事だった。

「結婚しよう、ちい。俺たち、本物の家族になろうよ……」

「えっ？」

どんな思いがけない言葉を聞かされた時よりも、ずっとずっとビツクリした。

ビツクリし過ぎて、とっさに返事が返せなかったから、紅君は何通りも言葉を重ねる事になる。

「いや……結婚してください……かな？ずっと一緒にいようよ……とか？」

「……………」

黙り込む私の顔を見ながら、それでも決して笑顔は崩さず、紅君はいく通りもの言葉で、私に自分の気持ちを伝えようとする。

「俺のお嫁さんになって下さい！……それとも……俺はちいのお嬢さんになりたいです！の方がいい？」

どこまでも楽しそうな笑顔のまま、紅君が問いかけるから、私も自然と笑顔になる。なぜだか溢れた涙は、なかなか止まりそうになりから、泣き笑いの顔になる。

「俺は絶対ちいを幸せにする。そして、ちいが傍にいてくれれば、絶対に自分も幸せになる自信がある。だから結婚しよう……いい？」

結局、私が何も言葉を返さなくても、ただ頷くだけで気持ちを表現できるようにしてくれた。

そんな紅君の優しさに、自然な心配りに、小さな頃から懂れて、懂れて――。

いつかあんな人になれたらと、願ってやまなかった人が——好きな人が——私に向かつて手を差し伸べてくれる。

他の誰でもなくこの私を、真っ直ぐに望んでくれる。

嬉しかった。現実だとは分かっていても、まさか夢ではないのかと、何度も何度も確認したいくらい、嬉しかった。

「紅君……」

ようやく開いた口で、かすれ声のまま名前を呼んだら、いつそう笑われた。これまでで一番と言ってもいいぐらいの、本当にとびきりの笑顔を向けられる。

「紅君が、私の家族になってくれるの？」

「うん」

「……………ありがとう……………」

その後はもう、涙でむせんでしまつて、何も言えない。

ようやく言えた言葉が、迷いもなく彼が返してくれた返事が、自分にとってどれほど大切な事だったのかと、私自身にも初めて分かった。

十二の春に私が失くしたものは、どんなに望んでも、もう二度と手に入らない。

—— たった一人の家族だった母。

だからこそ、どこかで気持ちを入れ替えて、諦めをつけて、背中を向けて来た事実。

—— 私には今、家族と呼べる人はいない。

叔父と叔母は、成人するまでの後見人になってくれているし、一緒に生活してもいるが、厳密に言えば私の 家族 ではない。私は苗字だって 長岡 のままだ。

母が亡くなったあの時からひとりぼちになった私にとって、紅君が新しい家族になってくれるというのは、とっても大切で、この上なく嬉しい事だった。

「ねえ千紗……まだ？」

再びドアの向こうからかけられた声に、私は慌てて振り返った。

「うん。あと少し……」

「もう！……本当に急いでね？」

「うん」

介添え役をやってくれている美久ちゃんを騙し続けるのも、これ以上は無理な気がする。

（どうしよう……もう本当の事を言おうかな……？）

心の中の葛藤を持て余して、何気なくもう一度窓の外に目を向けたら、遠くに小さな人影が見えた。

私と同じように純白の衣裳に身を包んだ、スラツと背の高いその人は、普通に町中を歩いていたら目立って仕方ないはずなのに、そんな事微塵も気にしていない。

ちよつと悪い右足のせいで走る事は出来ないが、以前よりはあまり足を引き摺らなくなった軽快な歩みで、こちらに向かって真っ直ぐに歩いて来る。

春の陽射しは優しく、彼の淡い色の髪に光の輪を作る。

（まるで天使みたいだよ、紅君……）

思わずそんな事を考えてしまってから、私は慌てて首を横に振った。

（ううん。天使なんかじゃない……私の大切な人。だからこれからも、ずっとずっと傍にいてね……）

まるで私の心の声が聞こえたかのように、紅君がこちらに目を向けた。

「ちい！」

大きな声で私の名前を呼んで、伸び上がるようにして手を振るから、私も振り返す。

「紅君！」

大好きなあの笑顔が、だんだんこちらに近付いて来た。

「ゴメン……控え室の窓から桜の木を見てたら、急に思い出した事があった……どうしても確認したくて行って来た……こんな大事な日に、ほんとゴメン……」

顔は笑顔のままながらも、紅君が何度も何度も謝るので、私は慌てて首を横に振る。

「大丈夫だよ……でも、確認したかった事って何……？」

紅君は手に持っていた薄い黄色の封筒から、一枚の書類を取り出した。

「これ、俺の戸籍抄本。結婚式の後、婚姻届を出す時に言っても良かったんだけど、どうしても先にちに説明しておきたくて……」

「……………」

首を傾げた私に、紅君は書類を指し示しながら、窓越し、ちよつと背伸びして、耳に口を寄せた。

「俺の名前はさ、実を言うと戸籍上は 小田紅也 のままなんだ……希望の家 の園長先生の戸籍からは抜けたくないって……それが再会した父さんと電話口で一番に話した事だったから……俺はその後 希望の家 にいた頃の記憶をなくしたけど、父さんは律儀に約束を守って、俺を 小田紅也 のままにしといてくれた……だから、俺と結婚したら、ちいも……」

ドキリと胸が跳ねた。

「 小田千紗 になるけど……いい？」

込み上げて来た涙が、目から零れないようにするのは一苦労だった。

小一時間もかかって、私に花嫁用のメイクをしてくれた美久ちゃんの苦労は無駄にしたいくない。

でも告げられた真実は、私にとっては涙が出るほどに嬉しい事で——やっぱり泣かずにはいられない。

辛かったらいつでもここにいらっしやい　と私に両手を広げてくれた園長先生と同じ名前。

紅君の事を本当の兄のように慕っていた子供たちみんなと同じ名前。

そして子供の頃、遠くからいつも見ていた憧れの　小田君　と同じ名前。

考えれば考えるほど、このままいつものように大泣きしてしまい
そんな私を氣遣って、紅君が窓越しに腕を伸ばした。

「ゴメン……泣かないで、ちい……」

いつもよりかなり低い位置からギュツと抱き締められて、紅君の方が私を見上げる角度で静かに口づけられて、私は頷いた。何度も何度も頷いた。

「ありがとう紅君……嬉しい……」

「そうか……良かった……」

紅君がもう一度、私の唇に自分の唇を重ねようとした瞬間、背後でボタンと扉の開く音がした。

「千紗！いいかげんにして！って……ああっ！紅也君？……ダメだよ！式の前にこっそりいちゃついてる新郎新婦なんて……聞いた事ないよ！？」

美久ちゃんが大声で叫んだせいで、ドアの向こうには大勢の人が集まって来る。

「どこにも姿が見えないと思ったら……何やってるんだよ、紅也……」

ため息をついた蒼ちゃんと。

「紅兄ちゃん……？」

驚いたように目を見開いている翔太君。

必死に笑いを噛み殺している紅君のお父さんと、ちょっとホツとしたような顔の小野寺牧師。

翔太君以外の　希望の家　の子供たちも、あちらこちらから顔を出す。

「ごめんなさい！すぐに行くから！」

慌てて窓に背を向けた私を、紅君が窓越しにトンと後押しした。

「じゃあ、チャペルで待つてる……俺の花嫁さん……」

きつと今日だけの呼び名に、ドキリとして振り返ったら、紅君はもうどこにもいなかった。

でも不安になる事なんかない。

またすぐに会えると確信を持って、廊下に集まった以外のみんなが首を長くして待つてくれている場所へと、私は歩き出す。

「ちい姉ちゃん、綺麗……！」

女の子たちの感嘆の声を嬉しく聞きながら、笑顔で歩み続ける。

屋外に設けられた簡素なチャペルに辿り着くと、叔父さんにエスコートされてこれから私が一步を踏み出す長い赤絨毯の先には、紅君がもう姿勢を正して立っていた。

その姿にドキドキする。声には出さず　ちい　と口の形だけで呼ばれて、なおさらドキドキする。

私を待つ紅君の笑顔にも負けにくいぐらいの笑顔を、私も彼に返した。

よく晴れた空に響くのは、本物の私たちへの祝鐘。

まるでライスシャワーのように、風に吹かれて私たちの上に舞い散るのは、紅君と二人で何度も見上げた桜吹雪。

全てが優しく。何もかもが私たちの門出を祝ってくれているかのような中。私は静かに紅君の元に辿り着き、私の手は叔父から紅君へと手渡された。

「絶対に幸せにします」

紅君の小さな呟きに「ああ」と返事した叔父の声が、そんなに涙声になるとは思ってもいなかった。

だからこそ決意する。たとえこれから先どんな事があつたって、私だって幸せになろうと、自分から必死に努力する事を決心する。

（ありがとう、叔父さん……！叔母さん……！）

涙は見せず、ずっと笑顔であり続ける事を心がけながら、私は紅

君と繋いだ手に目を向けた。

（これから一緒……ずっとずっと一緒！）

——ただそれだけで、私はきつと、どんな事だって出来るだろう。

全てを失った私は、一番大切でかけがえのない人を手に入れた瞬間、全てを取り戻した。

——それはまるで奇跡のような、でも真実の初恋。

（終）

第六章 4（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

千紗と紅也のお話はこれでおしまいです。ブログのほうに紅也視点の番外編と、蒼ちゃんが主人公のお話があります。

よかったらのぞいてみてください。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4553q/>

風は君色

2011年2月27日20時41分発行